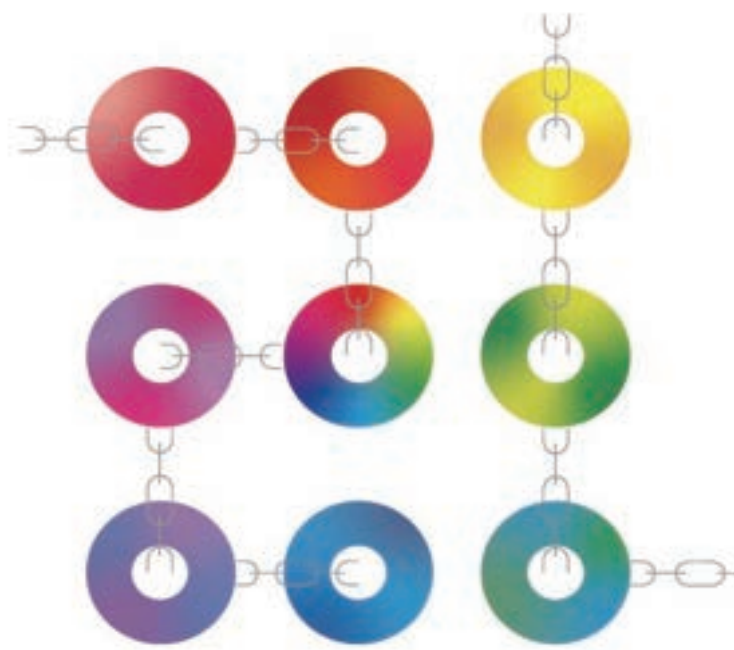


Japanese Association of Qualitative Psychology

日本質的心理学会

第21回大会

あむ、
あまれる、
あみなおす



日程

2024年

10/19_土・20_日

開催場所

成城大学 7号館

東京都世田谷区成城6-1-20 (小田急線 成城学園前駅 徒歩4分)

準備
・
実行委員長

青山征彦 (成城大学)

開催のご挨拶

日本質的心理学会第21回大会は、成城大学で開催いたします。会期は2024年10月19日（土）～20日（日）です。成城大学は、大正新教育の拠点の一つとして知られる成城小学校（のちに成城初等学校と改称）を源流に持ち、自由な校風で知られています。幼稚園から大学院までがひとつのキャンパスにあるのも特色で、自然豊かなキャンパスが自慢です。

ただ、本学には日本質的心理学会の会員がごくわずかしかなかったため、近隣にある7大学の会員から準備・実行委員会を組織して、大会を運営いたします。ご参加いただいた方にとって記憶に残る大会になるように、心を尽くして運営にあたります。ご期待ください。

本大会のテーマは、「あむ、あまれる、あみなおす」としました。従来の心理学では、人間の主体性を個人に閉じたものとして考えてきましたが、こうした見方は、近年、問い直されています。私たちの主体性は、自分だけでなく、他者やさまざまな人工物との関わりのなかから生じるものですし、社会や文化、制度といったものとも切り離すことができません。このような見方に立つと、人間は、自らをめぐる関係を「あむ」と同時に、「あまれる」存在であることが見えてきます。

さらに、人間は現状を変革し、未来を創り出す存在であることを考えれば、既存の関係を「あみなおす」ことは重要な意味を持ちます。既存の関係を変革していくという意味では、「あみなおす」ことは、イノベーションと言えるかもしれません（ちなみに筆者は、社会イノベーション学部 に所属しています）。また、発足から20年を超えて、新たな時代に向けてスタートしようとする本学会にとっても、「あみなおす」ことは、重要なテーマだと思います。

日本質的心理学会は、多様な領域の研究者が参加し、自由闊達に意見を述べて交流できることが特長です。そのような学会のよさを活かし、質的心理学の未来に向けて、活発で深みのある議論ができる大会になることを期待します。

日本質的心理学会第21回大会 準備・実行委員長
青山征彦（成城大学社会イノベーション学部 教授）

目 次

1. 大会参加者へのご案内	1
2. アクセス	5
3. 会場案内	7
4. スケジュール	9
5. 大会企画概要	11
6. 大会プログラム	13
招待講演	13
シンポジウム（委員会等企画・会員企画）	13
一般研究発表（ポスター）	19
7. 抄録	37
招待講演	37
シンポジウム（委員会等企画・会員企画）	39
一般研究発表（ポスター）	81
大会参加者索引	139

出版社広告

1. 大会参加者へのご案内

1) 大会概要

<第21回大会ホームページ>

大会テーマ 「あむ, あまれる, あみなおす」

会期: 2024年10月19日(土)~20日(日)

場所: 成城大学7号館



<大会 SNS>

Xアカウント: @JAQP2024atSEIJO

Facebook アカウント:

<https://www.facebook.com/JAQP2024>



- *大会初日の開始時間前後は、受付が混雑することが予想されます。時間にはゆとりをもってお越しくださいますようお願い致します。
- *大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示板及び大会 SNS にてご案内します。
- *期間中、日本質的心理学会デスクが設置されます。入会等の各種お問い合わせは、こちらにお願いします。

<重要事項>

大会の発表・参加においてトラブル等が生じた場合には、日本質的心理学会および大会準備・実行委員会はその責任を負いません。特に、プレゼンテーションにおける著作権、肖像権、個人情報の取り扱いについては十分にご注意ください。大会当日の写真撮影等については、大会スタッフの指示に従ってください。

2) 大会参加について

受付場所: 7号館地下1階学生ラウンジ

受付時間: 両日ともに8:30~

(1) 事前申し込みの方

早期登録で入金済みの方には、事前に大会抄録、参加証と領収書が発送されています。受付終了後、各会場へお越しください。

直前に参加登録された方は、受付で大会抄録、参加証と領収証をお受け取りください。未入金の方は、当日受付にて、Peatix で手続きを行ってください。

(2) 当日参加申し込みの方

当日参加の方は、受付にてご記名後、Peatix で参加費等の支払い手続きを行ってください。当日の大会参加費、懇親会参加費は下記の通りです。

		一般	大学院生	学部生
大会参加費	会員	6,000 円	4,000 円	2,000 円
	非会員（臨時会員）	7,000 円	5,000 円	3,000 円
懇親会参加費	会員・非会員	3,000 円		

※学生会員の方は学生証をご提示ください。聴講生、研究生は学生に含まれます。

3) クロークについて

大会期間中、7号館1階715教室にクロークを設け、みなさまのお荷物をお預かりします。ご利用の際には、必ず、係員より番号札をお受け取りください。なお、貴重品については、お預かりできませんので、個人で管理していただきますよう、お願い致します。

受付時間 10/19（土） 8：30 ～ 18：00
 10/20（日） 8：30 ～ 18：00

4) 学内 Wifi の利用について

会場内では、eduroamを利用することが可能です。また、ゲスト用のWifiとして、Wi2 300 も利用可能です。詳細は、受付にてご案内します。

5) 懇親会について

大会1日目10/19（土）18：00から、7号館地下1階学生ラウンジにて懇親会を開催します。おひとりでの参加、お仲間同士での参加、学生会員の参加いずれも大歓迎です。

当日申し込みも可能ですので、ふるってご参加ください。

6) 昼食について

大会会場の近辺では昼食をとる場所が少ないため、大会 1 日目 10/19（土）は弁当の販売（1 個 1,000 円）をいたします。

また、大会 2 日目 10/20（日）に開催される総会においては、弁当を準備いたします。

7) 飲食・喫煙について

お食事をとられる場合は、7 号館地下 1 階学生ラウンジをご利用ください（食堂の営業はありません）。なお、ゴミについては、なるべくお持ち帰りくださいますようお願いいたします。

7 号館内の飲み物の自動販売機は、7 号館地下 1 階学生ラウンジに設置されております。館外には、法人事務局・大学食堂棟前にあります。

また、喫煙場所は、7 号館の裏（屋外）にあります。喫煙は、喫煙場所以外ではできませんので、ご協力のほど、よろしくお願いします。

8) 会員控室について

7 号館地下 1 階学生ラウンジを休憩室としておりますので、ご自由にご利用ください。

9) 世田谷区内の福祉事業所との協働について

◎ クッキー等の販売 ◎

大会 1 日目 10/19（土）に世田谷区で活動をしている社会就労センター「パイ焼き窯」（社会福祉法人はる）の焼菓子の販売があります。世田谷区内のみならず、さまざまなイベントでの販売実績があり、とてもおいしく、人気のある商品ですので、お早めにお買い求めください。場所は、7 号館地下 1 階です。

◎ コーヒーサービス ◎

10/19（土）、20（日）に株式会社スワン成城店のコーヒーを数量限定でサービスします。場所は、7 号館地下 1 階です。

10) 書籍の展示・販売について

10/19（土）、20（日）にポスター会場において、出版社の書籍の展示・販売があります。ぜひご利用ください。

2. アクセス

所在地

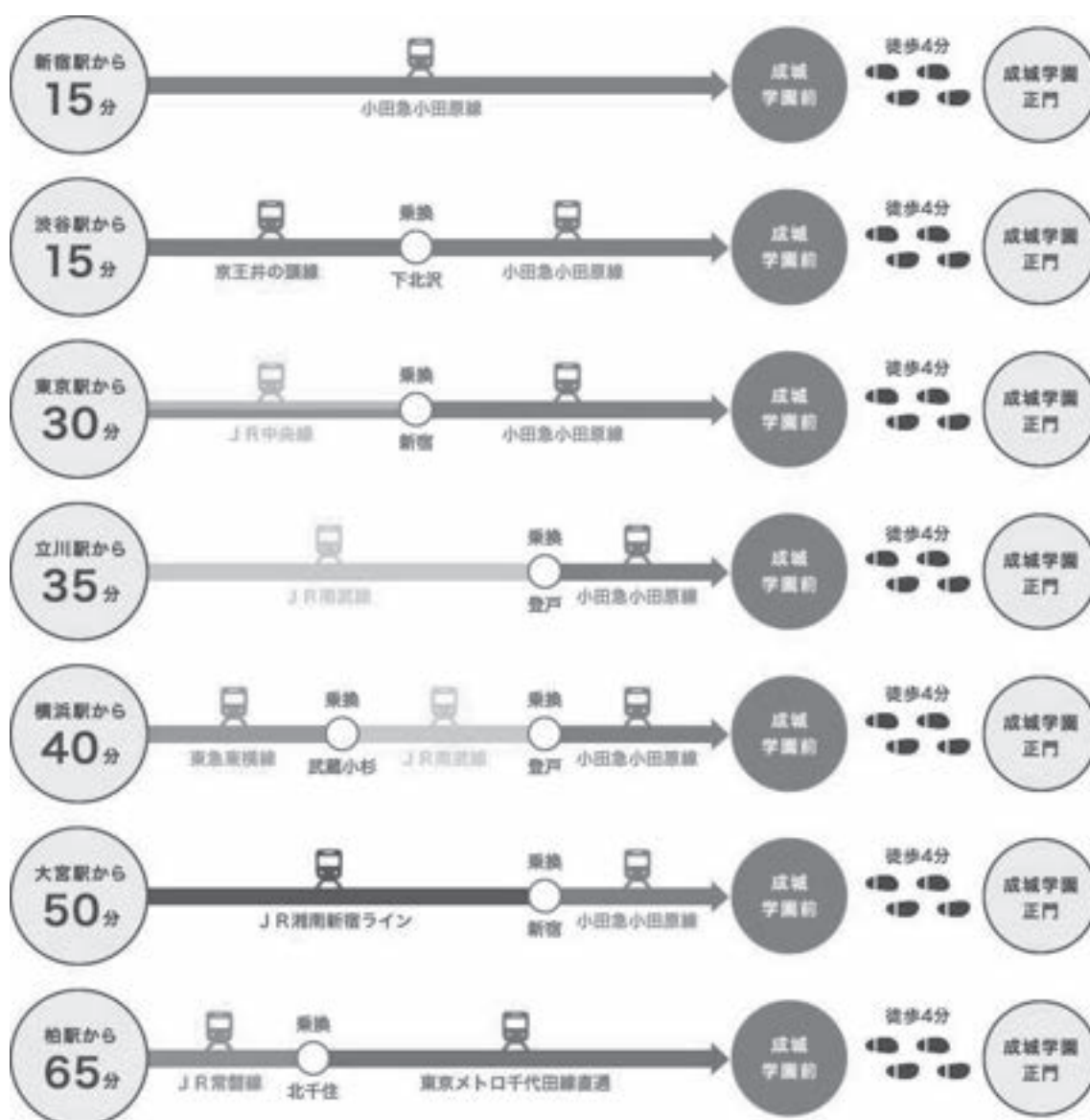
〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

交通

小田急線 成城学園前駅下車徒歩4分



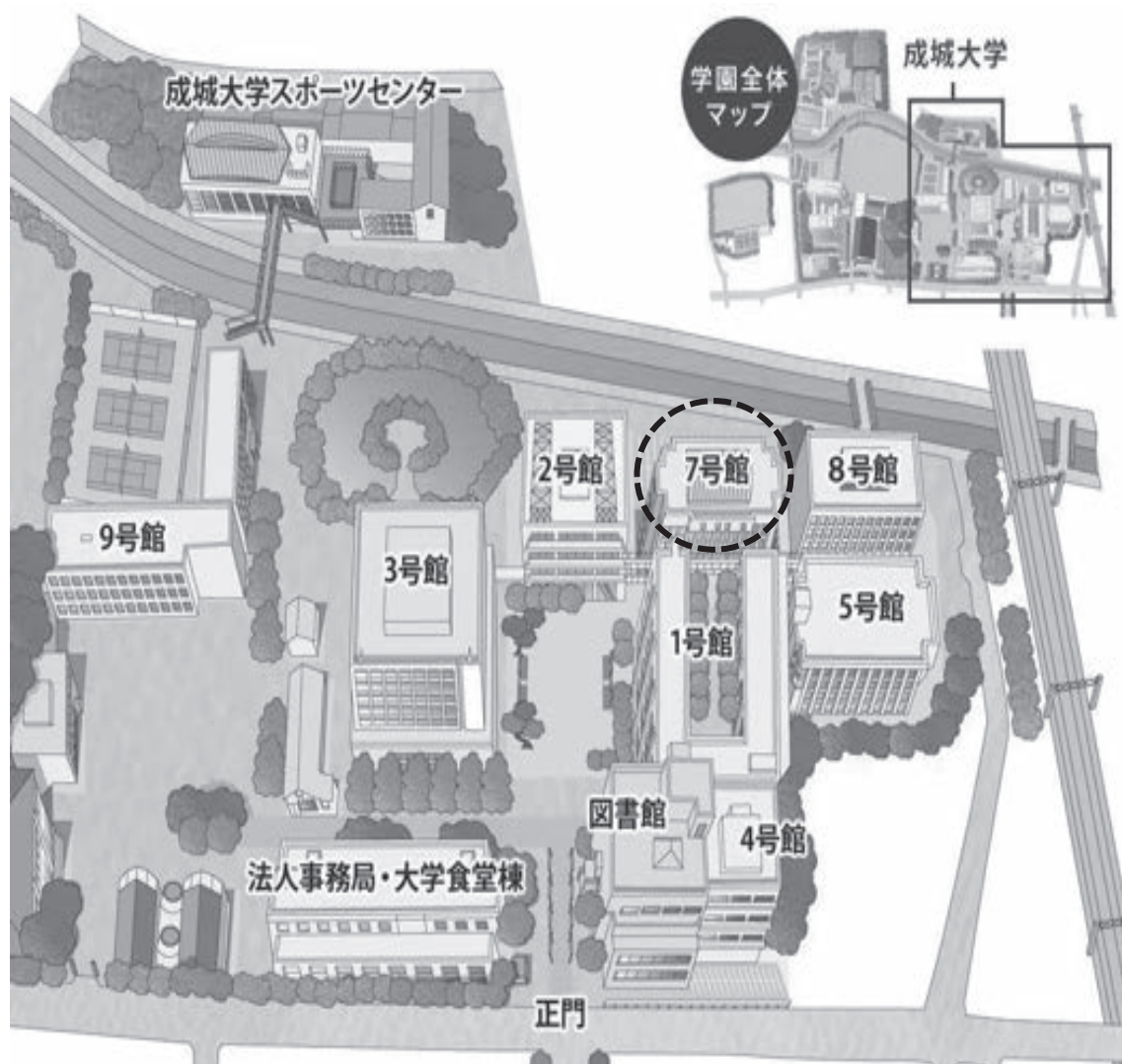
※小田急線「急行」は停車しますが「快速急行」は通過となりますので注意でご乗車ください。



※上記はおおよその所要時間です

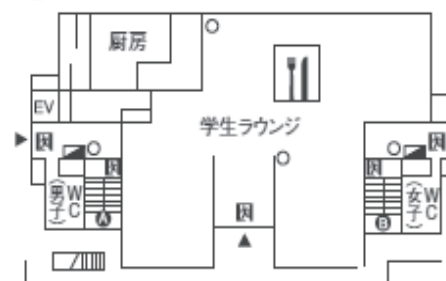
3. 会場案内

大会会場は7号館です。

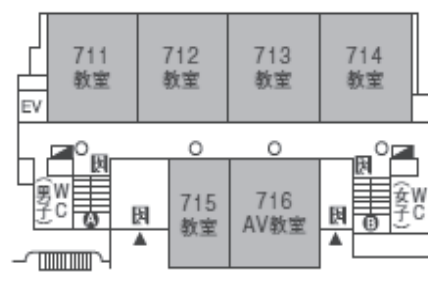


7号館

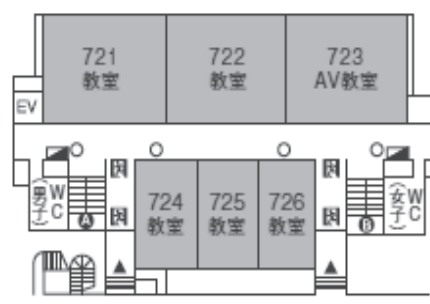
B1F



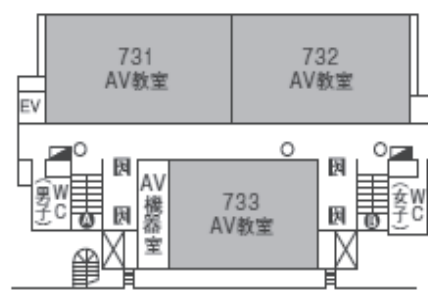
1F



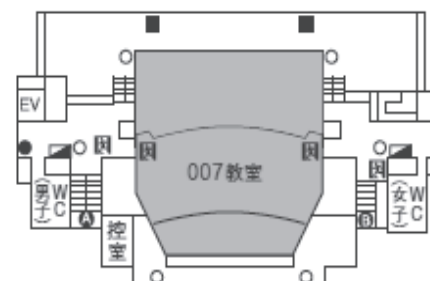
2F



3F



4F



- ▲ …入口
- 因 …非常口
- …屋内消火栓
- …消火器
- …避難器具
- A/// …避難階段
- …非常用階段避難車

4. スケジュール

10/19 (土)	地下1階学生ラウンジ	711教室	721教室	722教室	723教室	731教室	732教室	733教室
830	受付開始							
930		会員企画シンポジウム1	会員企画シンポジウム2		ポスター (優秀賞選考セッション)		ポスター (一般発表セッション)	
1000		道具と身体	対人支援における支援者の質的変容					
1030								
1100		企画：飯田 奈美子	企画：田代 順					
1130								
1200								
1230								
1300		会員企画シンポジウム3	研究交流委員会企画 シンポジウム	会員企画シンポジウム5			会員企画シンポジウム6	
1330		悩み方の作法	未来に向けたナラティブの力	質的研究をあみなおす			アートベース・リサーチが拓く質的研究の可能性	
1400								
1430		企画：角南 なおみ	企画：杉山 高志・安齋 聡子・佐藤 由紀・杉浦 彰子	企画：楠見 友輔			企画：青山 征彦	
1500								
1530								
1600		会員企画シンポジウム7	常任理事会企画 シンポジウム				招待講演	
1630		AIが質的研究をどう変えていくか	日韓若手研究者による質的研究の展開				アートベース・リサーチとソーシヤルフィクションのパワーと可能性	
1700		企画：薛 海升	企画：伊藤 哲司				バトリシア・リーヴィー	
1730	懇親会受付開始 (17:45)							
1800	懇親会							
1900								

10/20 (日)	地下1階学生ラウンジ	711教室	721教室	722教室	723教室	731教室	732教室	733教室
830	受付開始							
930								
1000								
1030								
1100								
1130								
1200								
1230								
1300								
1330	講習会 ヴァルシナー先生との対話	会員企画シンポジウム11 ASD・NT間の共生的な規範的行為形成を目指す支援	会員企画シンポジウム12 「ゲームをつくること」による関係性のあみなおし	質的心理学研究編集委員会 企画シンポジウム 『コンフリクト』と向き合う	会員企画シンポジウム9 ビジュアル・ナラティヴとメタファーの力 企画：横山 草介・やまだ ようこ	ポスター (優秀賞選考セッション)	会員企画シンポジウム10 記号論的文化的心理学の理論的展開の議論 企画：滑田 明暢・宮下 太陽・土元 哲平 総会 (11:45～12:45)	ポスター (一般発表セッション)
1400								
1430	講師：ヤーン・ヴァルシナー	企画：山本 登志哉	企画：石田 喜美	企画：上手 由香・綾城 初穂				
1500								
1530								
1600	会員企画シンポジウム13 言説分析と社会的課題	会員企画シンポジウム14 アロマセラピー実践の可能性	会員企画シンポジウム15 メディア芸術作品のマルチモーダル投射論	会員企画シンポジウム16 「土地の力」を感じる	会員企画シンポジウム17 特別支援教育を「あみなおす」ための方法論			
1630								
1700	企画：川野 健治・ハッ塚 一郎・岡部 大祐	企画：樫田 美雄	企画：阿部 廣二	企画：村本 邦子・伊藤 哲司	企画：海老田 大五朗			
1730								

5. 大会企画概要

本大会では、シンポジウム、招待講演、一般研究発表（ポスター）、講習会を下記の通り、企画しています。

シンポジウム

本大会では、常任理事会・委員会企画シンポジウム4件、会員企画シンポジウム17件を開催します。詳細は、大会スケジュール及びシンポジウムの抄録をご参照ください。

招待講演

大会1日目10月18日（土）にパトリシア・リーヴィー博士（Patricia Leavy, Ph. D.）をお招きして、「アートベース・リサーチとソーシャルフィクションのパワーと可能性（The Power and Possibility of Arts-Based Research and Social Fiction）」というテーマにてご講演をいただきます。時間は16:00から、会場は732教室になります。

一般研究発表（ポスター）

ポスター発表は、10月19日（土）午前、20日（日）午前に開催します。「優秀賞選考セッション」は731教室、「一般発表セッション」は733教室が会場となります。発表者は、各自の番号を確認し、該当する会場にて準備・対応をお願いします。

8:30～	ポスター貼付
9:30～11:30	ポスター発表（責任発表時間）
15:30までに	ポスター撤去・回収

ポスター発表会場には、専用のボード（縦210cm、横90cm）が設定されています。ボードのサイズにおさまるポスターの準備をお願いします。ポスターの貼付にあたっては、会場内に画びょうを準備していますので、ご利用ください。

～大会優秀賞について～

今年度のポスター発表では、発表申込時の抄録と自身の研究の卓越性についてのアピールをもとに、大会当日「優秀賞選考セッション」を設定し、研究発表について審査を行って優秀賞を選出します。

対象はこれまでの大会で受賞経験のない方です。自薦制になっておりますので、「優秀賞選考セッション」候補は、申込時に申請した方です。

講習会

10月18日（金） 13:00～15:00 711 教室

質的研究者のための演劇ワークショップ：ドキュメンタリー演劇をてがかりに

講師：萩原 健（明治大学国際日本学部教授）

内容：

ドキュメンタリー演劇は、非日常・非現実の世界へ観客を引き込もうとする通常の演劇とは違い、日常の現実の再発見や再認識を促します。この演劇の制作実践を通じて、その手法を質的研究にどう取り入れられるかについて考えます。

10月20日（日） 13:00～15:00 711 教室

ヴァルシナー先生との対話

講師：ヤーン・ヴァルシナー（オールボー大学教授）

内容：

日本質的心理学会と長年にわたって交流のあるヤーン・ヴァルシナー先生をお招きして、参加者との対話の場を持ちます。ご自身の研究についての相談や、文化心理学についての問いなど、事前に参加者からの質問を受けつけ、ヴァルシナー先生に回答していただきます。奮ってご参加ください。なお、通訳はつきません。

6. 大会プログラム

【招待講演】

10月19日（土） 16:00-17:30 732 教室

アートベース・リサーチとソーシャルフィクションのパワーと可能性
The Power and Possibility of Arts-Based Research and Social Fiction

パトリシア・リーヴィー博士 (Patricia Leavy, Ph. D.)

【常任理事会企画シンポジウム】

10月19日（土） 15:30-17:30 722 教室

日韓若手研究者による質的研究の展開
ーボーダーを超えた協働の可能性を追求してー

企 画： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

【質的心理学研究編集委員会企画シンポジウム】

10月20日（日） 13:00-15:00 723 教室

『コンフリクト』と向き合う

企 画： 上手由香（広島大学）・綾城初穂（駒沢女子大学）

【質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム】

10月20日（日） 13:00-15:00 732 教室

研究者の偶然性と当事者性

企 画： 北尾良太（大阪歯科大学看護学部）
町田奈緒士（奈良女子大学大学院人文科学系）
松浦李恵（宝塚大学 東京メディア芸術学部）
郡司菜津美（国士舘大学文学部）

【研究交流委員会企画シンポジウム】

10月19日（土） 13:00-15:00 722 教室

**未来に向けたナラティブの力
ーナラティブを用いたまちづくりー**

企 画： 杉山高志（九州大学大学院人間環境学研究院）
安斎聡子（青山学院大学コミュニティ人間科学部）
佐藤由紀（玉川大学リベラルアーツ学部）
杉浦彰子（JA 共済総合研究所）

【会員企画シンポジウム】

会員企画シンポジウム 1	10 月 19 日 (土)	09:30-11:30	721 教室
--------------	---------------	-------------	--------

道具と身体 —プラクティスの構造化の考察の精緻化—

企画： 飯田奈美子（立命館大学衣笠総合研究機構）

会員企画シンポジウム 2	10 月 19 日 (土)	09:30-11:30	722 教室
--------------	---------------	-------------	--------

対人支援における支援者の質的変容 —ナラティブ・アプローチの導入で支援者と臨床現場はいかに変容したか—

企画： 田代 順（ナラティブ・アプローチ研究室）

会員企画シンポジウム 3	10 月 19 日 (土)	13:00-15:00	711 教室
--------------	---------------	-------------	--------

悩み方の作法 —日常体験に対する臨床的アプローチの学際的模索—

企画： 角南なおみ（帝京大学文学部）

会員企画シンポジウム 4	10 月 19 日 (土)	13:00-15:00	721 教室
--------------	---------------	-------------	--------

TEA（複線径路等至性アプローチ）の可能性 —移境態・関係学・個体化・ナノエスノグラフィー—

企画： サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

会員企画シンポジウム 5	10 月 19 日 (土)	13:00-15:00	723 教室
--------------	---------------	-------------	--------

質的研究をあみなおす —『アンラーニング質的研究』の回折的読み—

企画： 楠見友輔（信州大学）

会員企画シンポジウム 6	10 月 19 日 (土)	13:00-15:00	732 教室
--------------	---------------	-------------	--------

アートベース・リサーチが拓く質的研究の可能性
ードキュメンタリー演劇を中心にー

企 画： 青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

会員企画シンポジウム 7	10 月 19 日 (土)	15:30-17:30	721 教室
--------------	---------------	-------------	--------

AI が質的研究をどう変えていくか
ーその②ー

企 画： 薛海升（東京大学大学院教育学研究科）

会員企画シンポジウム 8	10 月 20 日 (日)	09:30-11:30	721 教室
--------------	---------------	-------------	--------

複線径路等至性アプローチにおける分岐点の捉え方
ー対人援助に関わる研究を例とした考察ー

企 画： 上川多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）

会員企画シンポジウム 9	10 月 20 日 (日)	09:30-11:30	723 教室
--------------	---------------	-------------	--------

ビジュアル・ナラティブとメタファーの力

企 画： 横山草介（東京都市大学 人間科学部）
やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）

会員企画シンポジウム 10	10 月 20 日 (日)	09:30-11:30	732 教室
---------------	---------------	-------------	--------

記号論的文化心理学の理論的展開の議論
ー諸概念の深化、拡張、適用に挑むー

企 画： 滑田明暢（静岡大学大学教育センター）
宮下太陽（株式会社日本総合研究所）
土元哲平（中京大学心理学部）

会員企画シンポジウム 1 1	10 月 20 日（日）	13:00-15:00	721 教室
----------------	--------------	-------------	--------

**ASD・NT 間の共生的な規範的行為形成を目指す支援
ー当事者視点の対話的理解を足場としてー**

企 画： 山本登志哉（発達支援研究所）

会員企画シンポジウム 1 2	10 月 20 日（日）	13:00-15:00	722 教室
----------------	--------------	-------------	--------

**「ゲームをつくること」による関係性のあみなおし
ー「クロスロード」をめぐる近年の展開を中心にー**

企 画： 石田喜美（横浜国立大学教育学部）

会員企画シンポジウム 1 3	10 月 20 日（日）	15:30-17:30	711 教室
----------------	--------------	-------------	--------

言説分析と社会的課題ー三人連句読みつなぎ（3）

企 画： 川野健治（立命館大学）
ハッ塚一郎（熊本大学）
岡部大祐（順天堂大学）

会員企画シンポジウム 1 4	10 月 20 日（日）	15:30-17:30	721 教室
----------------	--------------	-------------	--------

**アロマセラピー実践の可能性
ー治療的効用論を越えてー**

企 画： 檜田 美雄（摂南大学現代社会学部）

会員企画シンポジウム 1 5	10 月 20 日（日）	15:30-17:30	722 教室
----------------	--------------	-------------	--------

メディア芸術作品のマルチモーダル投射論

企 画： 阿部廣二（東京都立大学人文社会学部）

会員企画シンポジウム 16	10月20日(日)	15:30-17:30	723 教室
---------------	-----------	-------------	--------

**「土地の力」を感じる
ーショートビデオエスノグラフィーの試みー**

企 画： 村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）
伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

会員企画シンポジウム 17	10月20日(日)	15:30-17:30	732 教室
---------------	-----------	-------------	--------

**特別支援教育を「あみなおす」ための方法論
ー学びの実践×ニューマテリアリズム×現象学ー**

企 画： 海老田大五朗（新潟青陵大学）

【一般研究発表(ポスター)】

10月19日(土)

優秀賞選考セッション

731教室

P19A-1 なぜ日本の保育者はすべての子どもに「当番活動」を課すのか

加藤 望 (名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部)

肥田 武 (一宮研伸大学 看護学部)

内田 千春 (東洋大学 ライフデザイン学部)

ポーター 倫子 (北陸学院大学 教育学部)

中坪 史典 (広島大学大学院 人間社会科学部)

P19A-2 子どもの「声」を探究する保育カンファレンスの検討～2歳児のエピソードの分析を通して～

上山 瑠津子 (福山市立大学教育学部)

古和 友子 (作陽短期大学音楽学科幼児教育専攻)

P19A-3 四川大地震被災者の喪失体験によって受けた傷と心の成長の共存—旧北川県域における被災者に着目して—

崔 月瀕 (茨城大学 人文社会科学研究科)

P19A-4 大熊町フィールドワーク研究(2): 原子力災害によって長期避難となった女性の心の動き

鈴木 祐子 (東京医療学院大学 保健医療学部)

日高 友郎 (福島県立医科大学 医学部)

本間(照井) 稔宏 (福島県立医科大学 医学部)

春日 秀朗 (福島県立医科大学 医学部)

各務 竹康 (福島県立医科大学 医学部)

川本 静香 (京都精華大学 共通教育機構)

サトウ タツヤ (立命館大学 総合心理学部)

P19A-5 震災からの地域復興を支える関係人口の創出条件に関する研究—福島県楢葉町に関わる人々のライフストーリーに着目して—

劉 毓禧 (茨城大学大学院 人文社会科学研究科)

**P19A-6 語りの形式の違いによるナラティブの時間の特徴—東日本大震災の被災者の語り
を例に—**

鈴木 ミチル（九州大学 共創学部）
杉山 高志（九州大学 大学院人間環境学研究院）
安斎 聡子（青山学院大学 コミュニティ人間科学部）
佐藤 由紀（玉川大学 リベラルアーツ学部）
杉浦 彰子（JA 共済総合研究所）
宮前 良平（福山市立大学 都市経営学部）
山田 修司（東日本大震災・原子力災害伝承館）
静間 健人（東日本大震災・原子力災害伝承館）

**P19A-7 ソーシャルメディアにおける「境界知能」のディスコース ——名づけをとりいれ
る人の語りの分析を中心に**

中島 由宇（東海大学 文化社会学部）
櫻井 未央（杏林大学 保健学部）

P19A-8 気づきあいの先にある新しい療育方法の可能性

大内 雅登（発達支援研究所）

P19A-9

（発表取り下げ）

**P19A-10 精神疾患の親をもつ子どもからみた家族、精神疾患、社会の関係性—家族イメー
ジ法を用いた検討—**

岩根 由佳（お茶の水女子大学大学院）
平野 真理（お茶の水女子大学）

P19A-11 先天性心疾患患者の自己概念の構造—思春期と青年期に焦点を当てて—

遠藤 晋作（名古屋市立大学 大学院看護学研究科）
上田 敏丈（名古屋市立大学 大学院人間文化研究科）

P19A-12 相談室以外で相談できる場所をつくるには？

竹宮 彩香（愛媛大学大学院 教育学研究科）

P19A-13 女子大学生における友人への援助要請の生起モデルの検討

鎌田 真実（北翔大学大学院 臨床心理学研究科）

入江 智也（北翔大学 教育文化学部 心理カウンセリング学科）

P19A-14 「困りごとの認知」は何をもたらしたか ―聾学校卒業生の語りからみる自立活動授業実践の検討―

西垣 正展（立命館大学大学院 人間科学研究科）

P19A-15 ナラティブから考える小児がん経験者のきょうだいの「適応」——Aさんの語りから

早川 真桜子（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科）

P19A-16 日常の場が癒しの場になることの意義：ホグシーランドに参加した保護者へのインタビューから

土元 哲平（中京大学 心理学部）

伊東 美智子（神戸常盤大学 保健科学部看護学科）

中坪 史典（広島大学大学院 人間社会科学研究科）

澁谷 雪子（神戸常盤大学 保健科学部医療検査学科）

高松 邦彦（東京工業大学 企画本部）

松浦 由典（ピップ株式会社）

P19A-17 オンライン・コミュニティの共同性とは何か？—ROM 専の視点から

尾石 智美（九州大学大学院 統合新領域学府 ユーザー感性スタディーズ専攻 博士課程）

杉山 高志（九州大学大学院 人間環境学研究院）

P19A-18 ビデオゲームに親しむ視覚障害者のプレイ経験分析：TEM（複線径路等至性モデリング）を用いて

長谷川 綾音（立命館大学 人間科学研究科）

サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）

P19A-19 問題観モデルを用いた生徒指導に関する省察的実践の質的検討① ——中学校教師により構成された問題観モデルの変化プロセスの検討

杉山 陽香（中京大学大学院 心理学研究科臨床発達心理学専攻）

川島 大輔（中京大学 心理学部）

P19A-20 なぜナイチャーの若者が辺野古に座り込むのかー政治活動への参加と政治的発達のプロセス

新原 将義（武蔵大学 教職課程）

P19A-21 大学進学時の進路選択に求められる自発的学習経験の分析—社会人院生として学びの場に戻ってきた人の語りをもとに—

近藤 百玲（青山学院大学大学院 教育人間科学研究科）

P19A-22 人生の育て方を見つけ、自分の人生にワクワクし始めるまでのプロセス

新田 莉生（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）

P19A-23 バングラデシュ IT 人材のキャリア意識の形成プロセス—— 複線径路等至性モデリング（TEM）による分析

小山 多三代（立命館大学大学院人間科学研究科）

安田 裕子（立命館大学総合心理学部）

P19A-24 公立小学校教員間の協働的な省察的実践プロセス ～授業者である新卒若手教員と観察者であるベテラン先輩教員の二者間の関係性に着目して～

林 直哉（四日市市立三重小学校）

P19A-25 理科の実験における子どもの科学的知識の構築 —小学3年「磁石の性質」の実験場面における物質の操作と発話に着目して—

庄野 俊平（横浜市立もえぎ野小学校）

P19A-26 教師の意図（目的）と実践のジレンマを生成する教室談話の構造分析（仮説実験授業の比較調査より）

匠 英一（（有限会社）認知科学研究所）

P19A-27 何がインタビュアーの問いを変えるのか—相互行為としての対話的インタビュー

松尾 純子（千葉県スクールカウンセラー）

P19A-28 リフレクティング・プロセスによって他者の視点を獲得

清田 敦彦（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

永田 素彦（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

谷口 泰子（医療法人清清会 清田クリニック）

P19A-29 性格を時間と関係性によって捉える質的研究：—TEMを用いて—

齋藤 優希（トクセン工業株式会社）

サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

P19A-30 支援者の傷つきとはどのような経験か—メタエスノグラフィーによる検討

森 美緒（一橋大学大学院 社会学研究科）

梅井 尚美（常磐大学看護学部・一橋大学大学院社会学研究科）

P19A-31 レジリエンスの関係性要因の探索的検討

平野 真理（お茶の水女子大学）

P19A-32 ワークショップ「きもち翻訳」による「しんどさ」の分かち合い——民間セクターにおけるケアの一つとして

南 摩周（早稲田大学大学院 人間科学研究科・任意団体 yoriai.）

P19A-33 中国におけるオンライン監査構造にみるレッドラインと遊び

宋 蘇安（東京都市大学大学院 環境情報学研究科）

岡部 大介（東京都市大学 メディア情報学部）

P19B-1 災間の社会における過去の災害体験の言語実践：阪神・淡路大震災から「30年目の手記」

高森 順子（情報科学芸術大学院大学 産業文化研究センター）

P19B-2 大熊町フィールドワーク研究（1）：移境に留まる経験としての故郷喪失

日高 友郎（福島県立医科大学 医学部）

鈴木 祐子（東京医療学院大学 保健医療学部）

照井 稔宏（福島県立医科大学 医学部）

春日 秀朗（福島県立医科大学 医学部）・

各務 竹康（福島県立医科大学 医学部）

川本 静香（京都精華大学 共通教育機構）・

サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）

P19B-3 川の記憶とまちづくりのナラティブ

伊藤 哲司（茨城大学 人文社会科学部）

杉浦 彰子（JA 共済総合研究所）

李 勇昕（日本学術振興会 茨城大学地球・地域環境共創機構）

奥村 かえで（茨城大学人文社会科学部）

馬場 紗矢香（ひたちなか市地域福祉課）

佐川 雄太（茨城大学 未来共創学環）

P19B-4 被災想定に関する共同想起のアクションリサーチ

杉山 高志（九州大学 大学院人間環境学研究院）

梁 梓超（九州大学 大学院統合新領域学府）

大本 航（九州大学 大学院統合新領域学府）

P19B-5 地域間交流によるインターローカリティの生成に関する研究

李 フシン（日本学術振興会・茨城大学 地球・地域環境共創機構）

P19B-6 「子育て」を通じた自文化への異議申し立てへの反応と日本における子育て観の考察

安井 琴音（立命館大学院 人間科学研究科）

P19B-7 4 歳児クラスにおける帰りのあいさつルーティンの生成～子どもたちと保育者により要素が決定した事例に着目して～

鈴木 幸子（常葉大学短期大学部 保育科）

青山 昌子（静岡大学教育学部附属幼稚園）

P19B-8 共生社会に向けた就学前教育における多文化共在実践の探究

横山 草介（東京都市大学 人間科学部）

山本 登志哉（一般財団法人 発達支援研究所）

周 念麗（華東師範大学）

P19B-9 心理専門職の職業倫理に関する発達プロセスの検討

慶野 遥香（筑波大学 人間系）

P19B-10 建設系大学院英語プログラムから日本の建設会社への移行の経験—建設技術に関わる語りの分析に基づいて—

柴山 俊也（千葉大学大学院 人文公共学府）

P19B-11 出産を経験した女性のキャリア展望の変化：分岐点分析による検討

中田 友貴（立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構）

福山 未智（立命館大学大学院 人間科学研究科）

安田 裕子（立命館大学 総合心理学部）

サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）

P19B-12 自殺念慮のある自傷行為者の主観的世界—「リストカッター」南条あやの最後の寄稿の分析から—

新井 素子（立教大学 文学部）

P19B-13 看護大学4年生の「寄り添う看護」に関する分析

石井 俊行（兵庫大学 看護学部）

P19B-14 クラスメイトによる特別支援教育の支援対象児へのサポータビュウモア

黒住 早紀子（駒澤大学 総合教育研究部）

P19B-15 がん闘病におけるどのような「つながり」の体験が、生きることの意味の再構築をもたらしうるのか：ある青年の闘病記ブログの分析から

宮原 契子（筑波大学大学院 人間総合科学研究科）

P19B-16 聴覚障害のある人と聴者との間の解釈のズレとその修復

広津 侑実子（東京都立学校スクールカウンセラー）

P19B-17 人の育ちにおける「目に見えないもの」の意義を探る

藤井 真樹（名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部）

西村 美佳（金城学院大学 人間科学部）

勝浦 眞仁（同志社女子大学 現代社会学部）

P19B-18 探究学習の担当教員は指導上の課題にどのように対応しているのか

小山 義徳（千葉大学 教育学部）

P19B-19 作曲家による音楽作品の評価プロセス(2)-インタビュー調査と SCAT による分析-

多賀 秀紀（富山大学学術研究部教育学系）

P19B-20 衣服としてのコスプレコスチューム

福山 未智（立命館大学 人間科学研究科）

サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）

P19B-21 PrEP 薬を通してつながる人々：ピアサポートグループのエスノグラフィー

首藤 真由美（早稲田大学大学院 人間科学研究科）

石井 友恵（早稲田大学大学院 人間科学研究科）

金 智慧（東京大学 多様性包摂共創センター）

鈴木 勝己（早稲田大学人間科学学術院）

辻内 琢也（早稲田大学 人間科学学術院）

P19B-22 SST-VR コンテンツによる客観的現実性の必要の有無：メタオートエスノグラフィ

村松 秀樹（放送大学大学院 文化科学研究科）

P20A-1 2名の木工作家のモノづくりのヒストリー：インタビューデータを軸にして

山本 尚樹（弘前学院大学 文学部）

P20A-2 「レゴで街をつくろう」をテーマとしたワークショップはどのような場だったのか？——集合的な創造性の観点から——

稲嶺 美祈（立命館大学 人間科学研究科）

川野 健治（立命館大学 総合心理学部）

P20A-3 防災活動が地域コミュニティに与えた影響についての分析—高知県四万十町興津地区を事例に—

大西 祐輔（京都大学大学院 情報学研究科）

矢守 克也（京都大学 防災研究所）

P20A-4 地域社会における絵本環境に関する研究 —絵本環境づくりに携わる自治体や各種団体へのインタビュー調査から考える—

仲本 美央（白梅学園大学 子ども学科）

小屋 美香（育英短期大学）

P20A-5 別の家が居場所になる —出入り自由な家のフィールドワークを通して—

寺山 千智（茨城大学 人文社会科学研究科）

松本 光太郎（茨城大学 人文社会科学部）

P20A-6 アオテアロア・ニュージーランド在住の日本人移住者に関する研究(3)

石盛 真徳（追手門学院大学 経営学部）

イゴール エマヌエル デ アウメイダ（京都大学 人と社会の未来研究院）

中尾 元（追手門学院大学 経営学部）

P20A-7 重症心身障害児と保護者の相互関係に関する研究 ～重症心身障害を持つ子の「笑い」の意義～

横堀正枝（山梨大学大学院 医工農学総合教育部）

豊田 隼（山梨大学大学院医工農学総合教育部・日本学術振興会）

尾見 康博（山梨大学大学院総合研究部）

P20A-8 医療的ケアが必要なわが子を妊娠期から育む母親の経験 ―わが子との身体のまじわりの意味―

佐々木 由佳（大阪大学大学院）

P20A-9 重度知的障害者を子に持つ親が抱く障害児・者像のうつりかわり ―ライフストーリーに基づく検討―

梶原 佐保（東京大学大学院 教育学研究科 臨床心理学コース）

P20A-10 音を身体に還す技法 ―指揮者とオーケストラによる創造的行為の分析―

丸山 慎（駒沢女子大学 人間総合学群 心理学類）

P20A-11 大学院生の文章指導者としての経験は、書き手としての学びにどう寄与したか

千 仙永（国際基督教大学 教養学部）

平松 友紀（早稲田大学 グローバルエデュケーションセンター）

後藤 大輔（東京海洋大学 海洋生命科学部）

坂本 麻裕子（早稲田大学 グローバルエデュケーションセンター）

佐渡島 紗織（早稲田大学 国際学術院）

P20A-12 共感から創造的飛躍につなぐデザイン実践 ～現象学的記述・分析の試み

角 めぐみ（東京工業大学 環境・社会理工学院）

P20A-13 自己責任モードから関係性モードへ 「開かれた学習観」から「キャリア自律」を問いなおす

佐藤 達実（成城大学大学院 社会イノベーション研究科）

P20A-14 認知症と共に生きる人のポジティブ変容の要因：インタビュー調査を通して

山中 綾華（NTT 人間情報研究所）

小野 明日香（NTT 人間情報研究所）

瀬古 俊一（NTT 人間情報研究所）

松川 尚司（NTT 人間情報研究所）

P20A-15

(発表取り下げ)

P20A-16 身体障害をもつ在日コリアン女性の交差性

宋 知潤 (大阪府立大学 人間社会システム科学研究科 社会福祉学専攻)

P20A-17 双極症患者の「遊びの記憶」から見る家族経験：自由記述の分析から

松元 圭 (新潟医療福祉大学 心理・福祉学部 社会福祉学科)

三品 拓人 (筑波大学 人文社会系)

P20A-18 ADHD 当事者の片づけにまつわる主観的な体験の分析——半構造化インタビューを用いて——

山口 莉絵 (東京大学 教育学部)

P20A-19 障害者の自己形成：難聴者のオートエスノグラフィの対話的自己論に基づく検討

勝谷 紀子 (東京大学 先端科学技術研究センター／放送大学 教養学部)

P20A-20 「総合的な学習の時間」の指導に携わる中学校の若手教師の力量形成に関する一考察

太刀川 祥平 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 自然系教育講座 (院生)／三田国際学園中学校高等学校 数学科教諭)

川畑 翼 (聖ドミニコ学園中学校高等学校)

P20A-21 CEFR を日本語教育実践に活かすために —学習支援ボランティアの語りにみられた Mediation に着目して—

原野 恵子 (東京都立大学 都市環境学部)

P20A-22 アンコンシャスバイアス解消に向けた教員の学びのプロセス—「実践コミュニティ」と「繋がり」に焦点をあてた質的検討—

上山 賢太郎 (宝塚市立長尾小学校)

山中 一英 (兵庫教育大学大学院 学校教育研究科)

P20A-23 性カテゴリー観の(再)構成：LGBT 活動に連帯しない当事者とのかかわりから

宮尻 琴実 (公立はこだて未来大学大学院 システム情報科学研究科)

坂井田 瑠衣 (公立はこだて未来大学 システム情報科学部)

P20A-24 ポルノとして描かれたレズビアン表象—日活ロマンポルノ「百合族」シリーズの分析から—

島田 樹里（お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻）

P20A-25 市民映画館の成員としての共創デザイン活動に向けた現場理解

小林 陽昭（公立はこだて未来大学 大学院 システム情報科学研究科）

坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学 システム情報科学部）

P20A-26 Twitter（現 X）における〈出会い〉の相互行為分析

藤田 華奈（公立はこだて未来大学 システム情報科学研究科）

坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学 システム情報科学部）

P20A-27 移動販売の「店じまい」におけるドライバーと利用者の相互行為

酒井 晴香（東京国際大学）

坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

P20A-28 待遇コミュニケーション能力習得に差をつける要因 TEA と関係学の融合による事例研究

ウォーカー 泉（シンガポール国立大学）

P20A-29 フィリピンの若者が職業訓練校で学び直し自立する過程

金井 貴佳子（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）

井庭 崇（慶應義塾大学 総合政策学部）

P20A-30 昆虫の保存技法：自然・科学・社会のハイブリットな集合体から記述する虫屋の世界

阿部 廣二（東京都立大学 人文社会学部）

大山 星馬（青山学院大学大学院 社会情報学研究科）

P20A-31 ダンサーとしてのアイデンティティの多義性と踊ることの意味をめぐって

小林 海愛（成城大学大学院 社会イノベーション研究科）

P20A-32 フォトボイスに重なる声—ミュージアムの編集機能を考える

川野 健治（立命館大学）

高田 すず（立命館大学 人間科学研究科）

中山 佐代（立命館大学 人間科学研究科）

橋本 光理（立命館大学 人間科学研究科）

浜崎 爽子（立命館大学 人間科学研究科）

稲嶺 美祈（立命館大学 人間科学研究科）

P20A-33 生成 AI とインタビューを用いた顔のリアリティ判断に関わる規範的特徴の探索

岡田 心（大阪大学 生命機能研究科）

新川 拓哉（神戸大学 人文学研究科）

西田 知史（情報通信研究機構 未来 ICT 研究所 脳情報通信融合研究センター）

P20A-34 視線計測結果を基にした協働分析による「読み」の認識変化—視線計測機を用いた数学の学習支援の事例から—

信夫 智彰（東北大学大学院 教育学研究科）

P20A-35 Kelly, G. A. の代替解釈 (constructive alternativism) をパラダイムとした質的研究方法論の検討及び開発—コンストラクトの現象学, 解釈学, プラグマティズム, 構成主義的側面に着目して—

火ノ口 史野（九州大学大学院 人間環境学府 実践臨床心理学専攻）

P20A-36 「共感しすぎる」ことへのエコロジカル・アプローチによる接近

石渡 美穂子（立教大学 文学研究科）

P20A-37 「学校と学習塾の連携」の日本的特質

鈴木 繁聡（名古屋大学大学院 国際開発研究科）

P20A-38 歯科における名もなき子育て支援—歯科スタッフおよび歯科利用者の子育て支援観—

鈴木 光海（東北大学大学院 教育学研究科）

P20A-39 空想他者との対話実践に関する一人称研究空想他者との対話実践に関する一人称研究

遠藤 友咲（筑波大学大学院 人間総合科学学術院人間総合科学研究群博士前期課程 情報学学位プログラム）

松原 正樹（筑波大学図書館情報メディア系）

P20A-40 中国残留邦人の自己形成における葛藤－再会した家族の眼差しから生じる揺らぎ－

曾谷 美華（京都大学大学院 人間環境学研究科）

P20B-1 ひきこもり青年の関係性の変容プロセス —事例研究における複線径路等至性モデリングと関係学の融合—

廣瀬 太介 (立命館大学人間科学研究科)

P20B-2 コーダはどのように当事者になり、それを対象化し続けるのか—コーダがコーダを研究する過程の探索—

中井 好男 (大阪大学 人間科学部)

中津 真美 (東京大学 多様性包摂共創センター)

P20B-3 ADHD 女性の生きづらさ

河原 希美 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

P20B-4 幼児の試行錯誤を支える保育者の援助と環境構成の工夫

松原 未季 (大阪信愛学院大学 教育学部)

P20B-5 幼稚園は2歳児の生活面の自立をどう促しているか

古賀 松香 (京都教育大学)

P20B-6 爪切り初めにおける手の微視的分析

松本 光太郎 (茨城大学 人文社会科学部)

P20B-7 対話の性質を明らかにするための指標や分析方法の検討

北村 篤司 (昭和音楽大学)

P20B-8 複線径路等至性アプローチを用いた大学生の自分磨きの様相の検討

木戸 彩恵 (関西大学 文学部)

P20B-9 難民日本語教育は学習者=難民的背景を持つ人々の幸福に貢献可能か ——複線径路等至性モデリング(TEM)による事例の検討

伴野 崇生 (慶應義塾大学 総合政策学部)

P20B-10 不登校という病みの価値を転換させる当事者：場と時間の中で却来する意味をめぐって

俣賀 勇人 (成城大学大学院 社会イノベーション研究科)

P20B-11 みんなが寄り合う場の「おしゃべり」 — 大学サークル「九州大学放送研究会」における「話の輪」の生成と成り行き

拜藤 真梨（株式会社中海テレビ放送）

木下 寛子（九州大学大学院 人間環境学研究院）

P20B-12 未知の「本」と「人」に出会う場 ——読書会において読書体験を言葉にすることと受け取ること——

福田 珠希歩（株式会社秀英予備校）

木下 寛子（九州大学大学院 人間環境学研究院）

P20B-13 ファン活動としてのスマホいじり：上映会における相互行為分析

千田 真緒（千葉大学大学院融合理工学府）

岡部 大介（東京都市大学メディア情報学部）

P20B-14 看護管理者へのインタビューを通して生じた研究者の個人的側面の考察—オートエスノグラフィーを用いて—

渡邊 優那（広島大学大学院 人間社会科学研究科）

服巻 豊（広島大学大学院 人間社会科学研究科）

P20B-15 EPA 看護師・介護福祉士の受け入れ 17 年：長期滞在に伴う意思決定

浅井 亜紀子（桜美林大学リベラルアーツ学群）

P20B-16 出来島の学習支援教室に通う外国にルーツを持つ子どもたちの居場所の考察

後藤 ガブリエラ（大阪大学大学院 人間科学研究科）

宮本 匠（大阪大学大学院 人間科学研究科）

P20B-17 小学校の個別支援級の質的調査

小池 星多（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）

江原 繁光（東京都市大学 メディア情報学部）

佐藤 優哉（東京都市大学 メディア情報学部）

P20B-18 ヴィゴツキーの「回り道」の概念によるインクルーシブな授業の分析

司城 紀代美（宇都宮大学大学院 教育学研究科）

P20B-19 現代日本における心および超自然的存在を感じる対象に関する調査

森山 徹（信州大学）

小林 一樹（信州大学社会基盤研究所）

P20B-20 断片を集めて、編む-日常のなかの記憶の継承

安斎 聡子（青山学院大学 コミュニティ人間科学部）

P20B-21 シアターワークの自己変容プロセスに関する一人称研究～自ずから動きが生まれるとき～

松原 正樹（筑波大学 図書館情報メディア系）

7. 抄録

招待講演	10月19日(土)	16:00-17:30	732 教室
------	-----------	-------------	--------

アートベース・リサーチとソーシャルフィクションのパワーと可能性

The Power and Possibility of Arts-Based Research and Social Fiction

本講演では、質的心理学におけるアートベース・リサーチ (Arts-Based Research ; ABR) の可能性について、パトリシア・リーヴィー氏が取り組むソーシャルフィクションの具体的事例を交えて議論します。リーヴィー氏は、従来の質的研究手法では十分に捉えきれなかった側面を、フィクションなどのアート表現を通じてどのように描写できるかを提示します。本講演で取り上げる事例として、リーヴィー氏の小説『Low-Fat Love (やせ細った愛)』と『Shooting Stars Above』が紹介されます。前者は、女性たちが直面する関係性やアイデンティティ、身体イメージ、自尊心の問題をテーマにし、後者は、トラウマによる心理的影響とその回復過程を描いています。



パトリシア・リーヴィー
(Patricia Leavy, Ph. D.)

ABR は、データ生成、分析、表現といった研究の各段階において柔軟に適用できる方法論であり、研究プロジェクトの一部または全体として活用可能です。リーヴィー氏のソーシャルフィクションの制作過程においても、ビジュアルアートを含むアート形式が使用されています。さらに、ABR は学術界を超えて、一般の人々にも研究成果を親しみやすい形で届け、さらに研究にも参加できるという「パブリックスカラーシップ (公共性の高い学問)」の観点からも大きな意義を持ちます。リーヴィー氏の ABR の成果がどのように人々に受け止められたかについてもお話いただきます。

本講演では、ABR が質的研究においてどのような新しい可能性をもたらすのか、またアート手法を通じて複雑な人間の経験を豊かに表現し、新たな洞察や共感を引き出すための手段としてどのように活用できるかについて探っていきます。

▶司会：岸 磨貴子 (明治大学国際日本学部)

▶言語：英語 (字幕あり)

▶流れ：ABR の概要説明 (10 分)

リーヴィー氏のビデオ講演 (40 分)

リアルタイムオンラインで会場と質疑応答 (40 分)

パトリシア・リーヴィー博士 (Patricia Leavy, Ph. D.) について

パトリシア・リーヴィー氏は、受賞歴のあるベストセラー作家です。かつてはストーンヒル・カレッジの社会学准教授、社会学・犯罪学学科の学科長、ジェンダー研究プログラムの創設ディレクターを務めていました。これまでに 40 冊以上の著書を発表し、その作品は多くの言語に翻訳されています。また、USA ベストブック賞、インディペンデントプレス賞、国際インパクトブック賞、ナショナル・インディ・エクセレンス賞、ファイアバードブック賞、国際ブック賞、ニューヨークシティ・ビッグブック賞、アメリカフィクション賞など、100 を超える賞を受賞しています。さらに、アメリカ全国美術教育学会、ニューイングランド社会学会、アメリカ創造性学会、アメリカ教育学会、および質的研究の国際会議でも賞が授与されています。2018 年にはアメリカ女性殿堂 (National Women's Hall of Fame) にて表彰され、ニューヨーク州立大学ニューパルツ校の The School of Fine and Performing Arts には、彼女の名誉を称えて「アートと社会正義のためのパトリシア・リーヴィー賞 (The Patricia Leavy Award for Art and Social Justice)」が設けられています。彼女はロンドンのアートベース・リサーチセンターの理事も務めています。

ウェブサイト : <https://patricialeavy.com/>

パトリシア・リーヴィー博士の関連書籍

リーヴィー氏の著書は多数ありますが、リーヴィー氏が講演で紹介した書籍のみを紹介します。

Patricia Leavy (2025) *Shooting Stars Above: A Celestial Bodies Romance (1)*, She Writes Press

Patricia Leavy (2022) *Re/Invention: Methods of Social Fiction*, Guilford Press; 第 1 版

Patricia Leavy (2020) *Method Meets Art, Third Edition: Arts-Based Research Practice*, Guilford Press (パトリシア・リーヴィー (著) 岸磨貴子・東村知子・久保田賢一 (訳) (2025 年刊行予定)『研究法がアートに出会うーアートベース・リサーチの実践(仮)』, 福村出版)

Patricia Leavy (2019) *Handbook of Arts-Based Research*, First Edition, Guilford Press (パトリシア・リーヴィー (編著) 岸磨貴子・川島裕子・荒川歩・三代純平 (監訳) (2024)『アートベース・リサーチ・ハンドブック』, 福村出版)

Patricia Leavy (2016) *Low-Fat Love Stories (Social Fictions Series)*, Sense Publishers

日韓若手研究者による質的研究の展開

ーボーダーを超えた協働の可能性を追求してー

企画： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）
司会： 金智慧（東京大学多様性包摂共創センター）
話題提供： 土元哲平（中京大学心理学部）
話題提供： 杉浦彰子（J A 共済総合研究所）
指定討論： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

企画趣旨

本企画は、日本質的心理学会常任理事会による国際シンポジウム企画であり、第18回大会（日韓合同のオンライン大会）で生まれた日韓若手研究交流の動きをあらためて喚起するものである。お互い多くの共通点を有しつつ、異なる社会文化的なバックグラウンドのある日本と韓国では、それぞれ質的研究を独自に発展させてきた。いずれもなお発展途上であるがゆえに、そこにボーダーを超えた協働があれば、互いの飛躍的な発展も期待できるだろう。今回は、特徴的で優れた質的研究を展開しつつある日韓それぞれの若手研究者に、そのユニークなテーマと方法論を発表してもらい、相互に学びあえる機会とする。発表は、それぞれの母語を尊重して日本語・韓国語で行い、逐次通訳を入れる。コーディネートを担う司会は、日本で活躍している金智慧が担う。韓国側の参加者は基本的にオンラインでの参加となり、韓国の関係する質的研究者たち（第18回大会をともに行った韓国心理測定評価学会の会員等）もオンラインで参加できるようにする。企画時点では、韓国側の発表者および指定討論者は確定していないが、誰がそれを担うかについては、シンポジウム当日に明らかになる。ご期待いただきたい。今回のこの企画をきっかけに「The First Trans-Asian Meeting on Psychological Methods」と位置づけた第18回大会の次の企画も、日韓の枠だけにとどめず広げ考えていきたい。

話題提供1：理論的な問いと対象者への問いの交差点：離島におけるキャリア発達についての調査から（土元哲平）

発表者（以下、私）は、鹿児島県三島村硫黄島の義務教育学校におけるエスノグラフィーの一貫として、同校の生徒を対象とした質問紙調査を行ってきた。本発表では、質問紙調査における研究者の「問い」の違いに着目したい。私が初めて硫黄島に研究滞在した2021年、はじめて実施した質問紙調査は、詩や絵を用いて「未来のわたし」について描くものであった。ただし、生徒からの回答には「自由に生きる」「お金を使う」といった、ある種の社会的言説が反映された記述が散見された。

このような記述は、離島における子ども達にとって、生きられた社会的文脈の一側面を示していると考えられる一方で、私が理論的に探究したいと考えていた、キャリアの情感的(affective)な記述とはかけ離れたものであった。そこで、翌年(2022年)の調査では、子ども達にとってのキャリアの転機としての「島立ち」(島を離れ、異なる土地で生活することを意味する)に焦点を当てた調査を実施した。その結果、質問紙への回答には、生徒のキャリアにおける「現在の境界線上の未来」とも言うべき経験が詩的に表現された。「島立ち」

というキーワードは、生徒、教員、地域住民との会話を通して明確化されたものであった。以上の調査プロセスは、理論的な問いと対象者に向けられる問いの交差点を探る試みでもあり、対象者の実存性を重視しつつ、いかに対象者の経験の再構築を方向づけるかという、研究デザインに関わる示唆を含んでいる。

話題提供 2 : 語りを集め・重ね・広げるプロセスとその活用: 水害にあった地域の「川の記憶」を伝承する取り組みをととして (杉浦彰子)

令和元年東日本台風(2019年10月)によって大きな被害を受けた茨城県水戸市飯富地区をフィールドに、住民の対話をととした災害・地域レジリエンス向上とまちづくりを目指し、今年で4年目となる。本研究ではこれまで、住民個々の土地や水害体験を含めた川とともに生きる人々の記憶を集めるためライフストーリーインタビューを実施し、住民の「川の記憶」を集約した。さらにその語りに位置情報をつけて可視化することで住民間の記憶を共有しやすくするオリジナルデジタルマップ「語りマップ」を考案し、住民ワークショップに活用した。ワークショップでは、マップに集約された語りに触発され、新しい語りが生まれた。4年目となる本年は、個人の語りとワークショップで得られた語りを地域外で展示する活動を行い、「川の記憶」の語りを地域外に広げる活動をととして、さらなる語りを生むこととなった。本研究の個人の語りを集め、地域住民が語りを重ね、広げるという一連のプロセスに着目し、その活用展開について模索したい。

話題提供 3・4 : 韓国側発表者

韓国側の話題提供者は、上記の通り企画段階では未定であるが、気鋭の若手研究者にオンラインで登壇してもらえるよう準備を進める。韓国には、質的研究に特化した学会はないと聞いており、そうした点での質的研究を進める困難さも抱えているかもしれない。若手研究者同士のボーダーを超えた連携から、そのような困難さも超えていける可能性があるのではないか。なお指定討論者には、日本側から伊藤哲司が登壇するが、韓国側にも経験を重ねた研究者に登壇を依頼する予定である。ここから始まる日韓若手研究者の協働、さらには日韓の枠を超えたコラボに、ぜひ参画していただきたい。

Development of Qualitative Research by Young Researchers in Japan and Korea: Pursuing the Possibility of Cross-border Qualitative Research Collaboration

Pursuing the Possibility of Collaboration Beyond Borders

ITO Tetsuji (Ibaraki University), Organizer

KIM Jihye (University of Tokyo), Moderator

TSUCHIMOTO Teppei (Chukyo University), Presenting Author

SUGIURA Shoko (JA Kyosai Research Institute), Presenting Author

ITO Tetsuji (Ibaraki University), Discussant

Language: Japanese and Korean with interpretation

『コンフリクト』と向き合う

企 画： 上手由香（広島大学）・綾城初穂（駒沢女子大学）

司 会： 上手由香（広島大学）

話題提供： 奥本京子（大阪女学院大学）

話題提供： 綾城初穂（駒沢女子大学）

話題提供： 藤田裕一（神戸学院大学）

指定討論： いとうたけひこ（和光大学名誉教授）

企画趣旨

本シンポジウムは2025年度の質的心理学研究第26号特集『コンフリクト』と向き合う」のキックオフ企画となる。

コンフリクト（conflict）という言葉には、葛藤・対立・紛争などの個人の内的世界から国家までの多様な文脈における二つ以上の立場間の摩擦が含まれている。個人や集団、あるいは人と社会との間で生じるさまざまなコンフリクトは、異なる立場による衝突、多層的で複雑な背景を持つものであり、そして時に人や社会が発展する機会をもたらすこともある。本シンポジウムでは、国家・民族レベルのコンフリクトとして「紛争」、対人関係や集団におけるコンフリクトとして「いじめ」、社会と個人内の葛藤として「障害者」の3つの話題提供を行う。これらをもとに、コンフリクトが生じる社会・文化的な構造、和解へのアプローチ、また研究者としての立ち位置など、さまざまな観点からコンフリクトに対する議論を深めたい。

話題提供1：東北アジアの歴史的コンフリクトと向き合う（奥本京子）

平和紛争学においては、暴力を削減し平和を創造するために、コンフリクトをどう転換・変容するかが重視される。マクロレベルの東北アジアにおける歴史的コンフリクトに如何に対応するかを、東北アジア地域平和構築インスティテュート（NARPI）の例を通じて考えてみたい。市民社会の構成員である教師、NGOスタッフ、アクティビスト、宗教家、企業人、学生など多岐に亘る世代の数十人が、毎夏東北アジアのどこかで開催されるこの研修に各地から集う。そこではマクロの視点に加え足元の平和創造について、共に考察し行動に繋げていくためのトレーニングが提供され、修復的正義や紛争転換、芸術アプローチ等を通じ、自分ごととして関わる市民として国境を超えて信頼を構築する人々の営みが見られる。

話題提供 2：遊び心を通して『いじめ』の政治学と向き合う（綾城初穂）

認知件数が毎年過去最高を更新するなど、現代日本社会においていじめ問題は喫緊の課題であり続けている。いじめの理解や対策において広く共有されている暗黙の前提の一つが、児童生徒の内面に焦点を当てる本質主義（essentialism）である。この視点は常識的にも心理学的にも首肯しやすいものである一方で、個人を超えたいじめ構造と個人の中にあるいじめ解決への思いとの両方を過小評価してしまうリスクもある。本話題提供では、本質主義に代わる視点の一つとして、ナラティブ・セラピーに基づくいじめ対策の事例を取り上げ、中井久夫によるいじめの政治学と絡めながら、プレイフルなアプローチの有用性を論じる。また、私たち大人が『いじめ』とどう向き合うべきかについても議論したい。

話題提供 3：先天性身体障害者とコンフリクト（藤田裕一）

筆者は自身の研究の 1 つとして、先天性の身体障害を伴う二分脊椎症者のライフストーリー研究を行ってきた。先天性身体障害者は後天性身体障害者の人と異なり、生まれながらに障害を生き、そのため自身の障害の部分に対する葛藤をある時期までは抱えてこなかった当事者も少なくないようである。しかしながら、例えば就職活動を契機に「障害があるために希望する仕事に就くことができない」等の現実と直面し、葛藤を抱えるケースがあることが筆者のライフストーリー研究から明らかになっている。本話題提供では、先天性身体障害者が就職活動のような社会に出て自立しようとする、社会参加をしようとする機会を通して生じる個人内の葛藤を、筆者のライフストーリー研究の一端から紹介したい。

Engaging with Conflicts

Yuka Kamite (Hiroshima University), Moderator

Kyoko Okumoto (Osaka Jogakuin University), Presenting Author

Hatsuho Ayashiro (Komazawa Women's University), Presenting Author

Yuichi Fujita (Kobe Gakuin University), Presenting Author

Takehiko Ito (Wako University, Emeritus professor), Discussant

Language: Japanese

研究者の偶然性と当事者性

- 企 画： 北尾良太（大阪歯科大学看護学部）
町田奈緒士（奈良女子大学大学院人文科学系）
松浦李恵（宝塚大学 東京メディア芸術学部）
- 司会・企画： 郡司菜津美（国士舘大学文学部）
- 話題提供： 大倉得史（京都大学大学院人間・環境学研究科）
話題提供： 藤森裕紀（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）
話題提供： 田中雅美（関西医科大学看護学部）
話題提供： 松嶋秀明（滋賀県立大学人間文化学部）・
保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）

企画趣旨

本企画は、質的研究における「調査者」について改めて議論の俎上に載せることを意図するものである。質的研究では、研究者自身が現象を記述するいわば分析装置であるがゆえに、自らの思考や存在と、協力者やフィールドとの関係性を考慮に入れざるを得ない。この時、研究者が研究課題を選ぶ段階から、ある種の偶然性と当事者性について語らなければならない前提を孕むだろう。研究者はなぜそのフィールドに入り、研究をするのか。現場で偶然に研究課題を設定する時もあれば、何らかの当事者として課題設定し、そのテーマに取り組み続けることもあるだろう。本シンポジウムにおいては、こうした点についてみなさまと議論を深め、調査者にまつわる問いを拓きたい。

話題提供1：「私」について記述することの意味—語り合い法の立場から— （大倉得史）

近年、質的心理学研究においては、研究者のあり方が研究に対してどのような影響を及ぼしているのか—自分自身が誰なのか、なぜその研究テーマを設定したのか等々—を再帰的（reflexive）に記述することが重視されている。しかし、個別具体的な諸特徴を備えた研究者の「固有性」について再帰的に記述することが、そこで見出される知といかなる関係にあるのかは、これまで必ずしも具体的に明らかにされてこなかった。一般的には、APAスタンダード等に示された研究が備えるべき形式的要件であるとか、「客観性」を目指す上で必要となるバイアスの意識化・自覚化のために必要な作業であるといった見方が多いようだが、私見では研究者の固有性を提示することには、質的研究で見出される知と深く関連したより積極的な意義があると考えられる。

今回の拙論では、筆者が提案してきた「語り合い法」について、その案出の経緯や方法論を示しながら、この点について検討したい。具体的には、語りの「意味」は、協力者と研究者双方の〈身体〉—固有の文脈と感受性を有した—が響き合ったり、すれ違ったり、軋み合ったりするその最中に浮かび上がること、そうした〈身体〉の交差を描出する必要性があることを明らかにする。

話題提供2：日記的な記述による振り返りは途中でやめると積み重ねが失われるのか—授業日誌を用いた日常的な授業改善の支援に求められる条件の探索的検討（藤森裕紀）

筆者である私は 2018 年度から 2022 年度にかけて東京都内の私立高校の英語科非常勤講

師として勤めていた。担当授業の改善を目指して、私は2021年度から日々の授業を振り返る授業日誌の作成と自己省察を日々継続してきた。本特集号では、私が授業者として継続して実践してきた授業日誌の作成を途中で中止することで、授業日誌を記述する観点や方法がどのように変化するかを偶然性と当事者性の観点から探求した。授業日誌を継続する中で、私の省察内容は生徒の具体的な姿や授業中のエピソードをもとにした一連の記述形式へと変化していった。しかし、ワクチン接種に係る市や大学院とのやり取りへの対応をきっかけに、私は授業日誌の作成に負担を感じ始め、年度の途中で授業日誌の作成を中止してしまった。2022年度は週4日勤務で18時間分の授業を担当することになり、各授業の進捗や様子を整理する必要性を感じ、授業日誌の作成を再開した。6ヶ月の中止期間を経て再開した授業日誌の記述は、中止する以前の観点や方法を継承していた。授業の当事者である私と生徒との協働とその振り返りを行き来する中で構成された観点や方法は、途中でやめても無くなるわけではなく、必要があればいつでも再開しても良い可能性が推察された。本シンポジウムでは、日々の営みを日記的な記述で振り返る取り組みについて、対話を通じて深めていきたい。

話題提供3：エスノグラフィーという営みは如何なるものか（田中雅美）

看護師たちは、看護の知の発展のために人々の理解を目指し、人々と共に居ることを願う。一方で、この共に居るという看護の営みが、結果として人々への思い込みを生み、人々の理解を阻むこともある。看護師たちの中には思い込みからの脱却を目指し、「わたし」でも「あなた」でもない「第3の視点」によって人々の理解を目指す、エスノグラフィーを採用する者もいる。ただし、その誰のものでもない「第3の視点」を、果たして看護師たちは獲得することができるのだろうか。看護師たちのフィールドは、日々変化し、複雑で不確実性を帯びている。看護師たちは、人々と共に居ようとすればするほど、その状況に巻き込まれ振り回されていくこととなる。ならば、看護師たちは、状況から距離を置き「第3の視点」で人々を眺めるよりも、敢えて状況に巻き込まれながら、人々が見ているその景色を共に見つめることの方が、思い込みからの脱却が図れるのではないだろうか。

以上の事より、看護師たちがフィールドで必要とされる視点とは如何なるものかについて、エスノグラフィーの営みを手掛かりに検討することを本論文の目的とした。

話題提供4：私たちにとって「子どもの居場所」とは何なのか？—2人の研究者の居場所との関わりをめぐる自己語りから（松嶋秀明・保坂裕子）

筆者らはこれまで、それぞれの子ども・若者の「居場所」に関わりつつ研究をおこなってきた。子ども・若者の居場所には、多様な形態があるが、筆者らは貧困や家庭環境の問題（虐待やヤングケアラーなど）をかかえる子どもにとっての居場所となることを志向して設立されたものをフィールドとしてきた。本特集号では、私たちがそれぞれの「居場所」といかに出会い、その現場とどのような関係を構築してきたのか、自分がその場で何者であろうとしてきたのかを、それぞれの「自分語り」を記述することを通して探究した。居場所との出会いは、2人ともに偶然のきっかけによるものだが、そこでつくられていく関係性のなかに自分自身の「研究者」としての意味を見出そうとしていた。松嶋は居場所Aにおいて自らの存在意義をみつけては失うことの繰り返しを経験し、自分がどんな研究者であるのかを十全に語れる立場をえられないでいた。一方、保坂は、居場所Bに身をおくことを通して、実践者の「気づき」を自らもわかるようになったという経験をふまえて、現場に内在的に「在る」という立場から発信することを研究者の役割として見出すようになった。本シンポジウムでは、フィールド研究における＜研究者＞の行う＜研究＞の意味について問うてみたい。

未来に向けたナラティブの力

ーナラティブを用いたまちづくりー

企画・司会・話題提供： 杉山 高志（九州大学大学院人間環境学研究院）

企 画： 安齋 聡子（青山学院大学コミュニティ人間科学部）

企 画： 佐藤 由紀（玉川大学リベラルアーツ学部）

企 画： 杉浦 彰子（JA 共済総合研究所）

話 題 提 供： 西村 優美（黒潮町役場企画調整室）

指 定 討 論： 上田 洋平（滋賀県立大学地域共生センター）

指 定 討 論： 高森 順子（情報科学芸術大学院大学 産業文化研究
センター）

企画趣旨

本企画は、未来構想するナラティブの力に注目して、ナラティブを用いたまちづくりの方法を検討するものである。ナラティブとは、社会を構成する要素であり、Engeströmの「活動理論」や杉万の「夢を描く技法」などに代表されるように未来構想をするためにも重要な役割も果たす。本企画では、ナラティブを使って未来構想、とりわけ、まちづくりに資するナラティブの利活用の手法や学術的探求の可能性について、実務家をまじえて検討する。

本企画の特徴は、複数の事例を参照してナラティブが持つ力を、学術的な意味合いのみならず実務的な領域にも広げて議論する点にある。例えば話題提供者として、高知県・黒潮町役場でまちづくりに携わっている西村氏を招聘し、太平洋沿岸地域にて住民主体で行われているまちづくりの事例を紹介していただく。西村氏は長年、砂浜美術館と呼ばれる活動に携わり、「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」という印象的なナラティブとともにまちづくりを推進しており、ナラティブが持つ実務的な意義をまちづくりの最前線で発信し続けている第一人者である。また指定討論者として、滋賀県立大学の上田氏を招聘し、上田氏が開発した多世代共創型まちづくりの手法「心象図法」を軸にしたまちづくりの新たな可能性について議論いただく。さらにもう一人の指定討論者として、情報科学芸術大学院大学の高森氏に登壇いただき、発災から30年目を迎えるようとしている阪神・淡路大震災の手記集を基にした復興まちづくりのポテンシャルにつ

いて論議いただく。加えて、本企画は双葉町で開催した2024年度・大会前企画とも接続しており、大会前企画の報告も交えて未来構想するナラティブの力について討議する。

話題提供 1：空想をカタチにする町 ―日本一の高さの津波が想定された高知県・黒潮町のまちづくり―（西村 優美）

黒潮町は高知県西部の太平洋に面した、約 1 万人の人口の町である。黒潮町は、砂浜美術館をはじめとしたコミュニティデザインに先駆的に取り組んできた自治体であり、話題提供者は、まちの DESIGN 室・地域プロジェクトマネージャーとして黒潮町のまちづくりの中心的な役割を担ってきた。黒潮町は、2012 年に内閣府から発表された南海トラフ地震の想定で 34m という日本一の津波高が発表された町で、豊かな自然の恵みと共に災いの両側面に注目したまちづくりを進めてきた。近年では「空想（もうそう）をカタチにする町」というキーワードで未来のまちづくりを構想しており、その最新の動向を報告する。

話題提供 2：東日本大震災・発災前後の地図から未来のまちを構想する ―帰還困難区域の一部が解除された福島県・双葉町を例に―（杉山 高志）

双葉町は、東日本大震災による原発事故で全住民の避難が続いていた福島県内最後の自治体である。2022年8月30日に特定復興再生拠点区域の避難指示が解除されたが、今なお町の大半を帰宅困難区域が占めている。そのような状況の双葉町で、震災前後の記憶を「日常記憶地図」という手法によって住民間で共有する企画を2024年度の大会前企画で実施し、ナラティブが双葉町の未来を構想するポテンシャルについて話題提供する。

Power of Narratives for the Future

SUGIYAMA, Takashi (Kyushu University), Organizer, Moderator & Presenting Author

ANZAI, Akiko (Aoyama Gakuin University), Organizer

SATO, Yuki (Tamagawa University), Organizer

SUGIURA, Shoko (JA Kyosai Research Institute), Organizer

NISHIMURA, Yumi (Kuroshio Town Hall), Presenting Author

UEDA, Yohei (The University of Shiga Prefecture), Discussant

TAKAMORI, Junko (Institute of Advanced Media Arts and Sciences), Discussant

Language: Japanese

道具と身体

—プラクティスの構造化の考察の精緻化—

企画・司会：飯田奈美子（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）
 話題提供：大和田裕美（静岡県立大学看護学部助教）
 話題提供：加戸友佳子（摂南大学現代社会学部特任助教）
 話題提供：松浦智恵美（立命館大学大学院先端総合学術研究科）
 指定討論：檜田美雄（摂南大学現代社会学部教授）

企画趣旨

本シンポジウムでは、私たちの行為遂行が、自己/他者の身体と道具をいかに認識し利用しながら、活動の目的を達成しようとしているかについて、ビデオデータを用いた相互行為分析によって明らかにしていくことを目的としている。特に、実践において状況からの要請や身体の歴史的経験との繋がりにより、実践者が想定していない、もしくは意識していない道具使用や身体ふるまいのプラクティスの把握を精緻化していくことを目的としている。

話題提供1では、助産師の医療道具を用いた行為は、専門職の技能として認識されるが、実践においては、専門職の一方的な道具使用が行われているのではなく、妊婦との共同的な相互行為により、道具使用の想定外の目的を持つことになることを報告する。

話題提供2では、高齢者は身体と道具の歴史的つながりを構造化することによって目的の活動を達成させている。高齢者が買い物で初めて使用する高齢者向けカートを用いて、従来から使用している諸道具への熟練性を利用しながら、追加された機能を環境に接続し構造化することで「安全でスムーズな買い物」という活動を達成していることを報告する。

話題提供3では、看護教育において、指導看護師の吸引実践は、ただ手順を示すだけでなく、自身の身体を道具として提示することで、シミュレーションを行っていることを際立たせている。手順書をもとに指導を行っているが、指導者は身体と道具の使用によって「見せるための行為」を行っている。しかし、それを超える行為も内在していたのである。

話題提供4では、通訳を介した医療コミュニケーションにおいて、看護師が説明のために指し示した書面を通訳者が資源として訳出行為に利用しているが、通訳者は看護師の模倣をして書面をただ指し示すだけでなく、書面を資源としてジェスチャーを行い、身体を用いたより精緻化した説明をいれた訳出を行っていることを報告する。

このように道具と身体プラクティスは、基本的には環境の中で互いに構造化することで、ある特定の活動の達成を志向している。しかし、その実践は状況の要請や身体歴史的経験に結びついていることで、思いもかけない目的や使用方法とも構造的に結びついていく。本企画では、個別具体的な実践場面を詳細に記述することで、想定されていないもしくは意識されていない道具使用や身体ふるまいを再発見し、私たちが当たり前に行っている道具と身体活動の規範的秩序を従来よりも精緻化された形で明らかにしていく。

話題提供1「妊婦健診場面における道具と身体関係の再発見」（大和田裕美）

助産院での妊婦健診場面を観察された、様々な道具を介した相互行為を取り上げる。妊婦の身体に助産師が超音波診断装置のプロブをあて、モニター画面に胎児が映し出される。

このとき、超音波診断装置と妊婦・助産師の身体の関係は、他の道具とのそれとは異なるものとしてあらわれていた。超音波診断装置を介した相互行為において、妊婦と助産師は、互いの身体を胎児を映し出すためのいわば道具として利用していた。このことにより、妊婦と助産師による胎児の状態の共有が達成され、胎児を（医療上の目的を越える形で）相互行為の場に組み込むことが可能となっていた。

話題提供2「ショッピングカートの『車両感覚』とはいかなるものか」（加戸友佳子）

買い物をリハビリとして行う「ショッピングリハビリ」において、高齢者は通常のショッピングカートとは異なる、歩行器に近い形状の専用カートを使用する。歩行の際は安全となるものの、カートの機動性は低下する。高齢者はこの専用カートを使う際にどのような工夫を身体化させているか、その様相を検討したい。それは、通常のカートから専用カートへの「車種変更」に伴って、新しい「車両感覚」の形成がいかになされるかという問題として考察することができるだろう。

話題提供3「シミュレーション教育場面におけるトラブループラクティスの新構造化—」（松浦智恵美）

病院の新人看護師教育に対して吸引行為のシミュレーション教育を行う場面で、指導看護師は「いつものやり方」で吸引行為を始めた。しかし、その直後自ら修正したかのようにくると新人看護師に見えるように身体の向きを変えたのである。新人看護師からの要求があったわけでもないのにである。自分の身体をプレゼンの道具として扱い、「手順書通りのプレゼン」に加えて「手順書通り」を超えた解説も人は行ない、実践の現場は志向性の複雑さを表現しているともいえる。

話題提供4「通訳者による資源を利用した非模倣的訳出行為」（飯田奈美子）

通訳を介した医療コミュニケーションにおいて、看護師が数値の書かれた検査結果表を用いて説明する場合、その数値を指し示しながら説明を行っており、その通訳を行う通訳者は、同じようにその書面を指し示しながら訳出を行っている。しかし、通訳者は、看護師が書いた身体の図を指し示すだけでなく、その図を背景にジェスチャーを用いることで、より立体的に身体を表し、患者に鮮明に認識させる行為を行っていることを観察した。通訳者は、看護師の模倣をするだけでなく、資源と身体を有効に使用しながら、相互行為を組み立て、訳出行為を行っていることがわかった。

指定討論：榎田美雄（摂南大学現代社会学部教授）

Tools and the Body— Elaboration the Structuring of Practice

Namiko IIDA (Ritsumeikan University), Moderator, Presenting Author

Hiromi OWADA (University of Shizuoka), Presenting Author

Yukako KADO (Setsunan University), Presenting Author

Chiemi MATSUURA (Ritsumeikan University), Presenting Author

Yoshio KASHIDA (Setsunan University), Discussant

Language: Japanese

対人支援における支援者の質的変容

ーナラティブ・アプローチの導入で支援者と臨床現場はいかに変容したかー

企 画： 田代 順（ナラティブ・アプローチ研究室）

司 会： 田代 順

話題提供： 大西郁子（スクールカウンセラー）

話題提供； 西澤有喜子（NPO 法人 碧き水の里）

企画主旨；支援・治療効果の高いナラティブ・アプローチの導入による臨床スタイルの変容-専門知（客観）から体験知（主観）へ-

本企画は、精神保健福祉士や臨床心理士／公認心理師、それと協働する看護師や教師によって実践されたナラティブなアプローチによる「現場」の質的変容について報告するものである。

より具体的に言えば、リフレクティングやオープンダイアログという「対話実践」をベースとして行われるナラティブ・アプローチを対人支援の現場で応用実践することにより生じた、その場を構成する支援者、被支援者の変容について述べる。その変容に伴い「場」自体のもつ臨床文化の変容についても検討考察する。そして、これまで対人支援の現場でメインとなって展開されてきた一対一の相談関係、専門的役割、専門知／専門性を基軸としたアプローチによる、これまでの対人支援対応（≒対人支援の臨床文化）がいかに支援者と支援対象者を疲弊させ、治療／支援を行き詰らせてきたかを、ナラティブ・アプローチの話し合い技法である、リフレクティングを応用したスーパービジョン、カウンセリング、グループワークの例をとりながら報告・検討する。

以上をふまえて、それぞれの現場（学校現場／緩和ケア病棟現場）に合わせて応用実践されたナラティブなアプローチが、いかににより支援的、互助的／共助的に支援者側も含めて、より楽に、ストレスを緩和させる方向に現場を変えていったかについて検討・考察して、本学会に集う対人支援者の支援に寄与することを企画主旨とする。

話題提供 1：スクールカウンセラーによる学校現場へのナラティブなアプローチ実践（大西郁子）

大西は東京都のスクールカウンセラー（以下 SC とする）として、小学校に勤務している。そこでのスクールカウンセリング実践として、リフレクティングをベースとするナラティブなアプローチでの話し合い方をセッティングし、児童と教師への支援効果を上げている。クラス内の児童同士のトラブルなど、学校社会で生起する「臨床対応」事例に関し、リフレ

クティングの多声的対話実践というナラティブなアプローチでもって対応したことを事例として挙げ、そのナラティブな支援を通して、児童、教師、SCである大西はいかに動き、いかに支援的に変容していったのかについて述べる。また大西がこれまで自分が持っていた「臨床観」が、ナラティブ・アプローチを通してどのように変化・変容したかについて語る。

話題提供 2：緩和ケア病棟における精神保健福祉士によるナラティブなアプローチ実践（西澤有喜子）

西澤は総合病院緩和ケア病棟で精神保健福祉士（以下 PSW とする）として患者とその家族の支援を行っている。緩和ケア病棟では、患者が亡くなるまでの病棟生活をメインに支える看護師が医師に代わり患者の前面に出てくる。当然ながらそこでは、看護的ケアに伴う患者やその家族、同僚に対する「主観的思いと気持ち」が湧き出る。しかし、強固な医学モデルとそれに伴う専門的役割遂行が徹底されるこれまでの病棟社会においては、その「主観的思いと気持ち」は、どこにも出せなかった。この自分の主観的気持ちや思いを「出せないこと」が、自分の心身への強烈なストレスとなって看護師を苛んできた。看護師としての専門的役割が看護師に口を閉ざさせるからである。こうして、死にゆく患者とその家族に関わることの「つらさ／大変さ」とそれに伴って湧き出てくる主観的感情や思い／気持ちはこれまで誰にも言えてこなかった。当然である。それを放つ／話す場が病棟社会ではないのだから。

看護師の主観的「つらさ／ストレス」、そして看護に関わる思い／気持ちと感情を「語り合う／書いて発表する」場を医療現場に設定しようとするのがナラティブ・メディスンである。客観的な記述が求められるカルテや看護記録ではなく、自分の主観的気持ちや辛さを「吐露」できる場を設定して、そこで話し合う／書き合い発表し合う。いわゆるパラレルチャートやナラティブ・オンコロジーの実践である。当該病棟では、ナラティブ・オンコロジーの簡易版である、医師も含めた病棟スタッフがツイートのように自分の主観的思いや気持ち、日常の出来事を気軽にかけるノート（→つれづれノート）が作られ、それが結果として看護師や医師など病棟スタッフ、そして患者とその家族をも巻き入れて多方向に病棟を構成する人々を大きく「楽」な方向に変えていった。また、この「つれづれノート」がもとになって病棟で行われるようになった支援者支援の会や家族支援の会の活動も同時に紹介して、ナラティブ・アプローチがもたらした緩和ケア病棟における、看護師を中心とした支援者のストレス低減と共支援的変容について述べていく。

Qualitative transformation in interpersonal support

How has the introduction of the narrative approach transformed clinical practice

Tashiro Jun (Narrative Approach Laboratory), Moderator

Oonishi Ikuko (school counselor), Presenting Author

Nishizawa Yukiko (NPO aoki mizu no sato), Presenting Author

悩み方の作法

－日常体験に対する臨床的アプローチの学際的模索－

企 画： 角南なおみ（帝京大学文学部）

司 会： 角南なおみ（帝京大学文学部）

話題提供： 角南なおみ（帝京大学文学部）

話題提供： 堀畑佳宏（米子工業高等専門学校教養教育部門）

話題提供： 能智正博（東京大学大学院教育学研究科）

指定討論： 石黒広昭（立教大学文学部）

企画趣旨

一般的な悩みに対する考え方として、どうしたら悩みが解決されるのか、悩まないためにどうしたらよいのか等悩みを負の情動体験として位置づけ、その体験から遠ざかるための方向で検討されることが多い。すなわち、悩みをなくすという観点からその”対応方法”が検討される傾向にあるといえる。ただし、人の悩みがすべて解消されることはない。悩みが生じることから避けられないのならば、いかに付き合っていくのかも検討する必要があると考えられる。そもそも悩むとはどのようなことなのか、どのような悩み方があるのかについて、これまでと異なる観点から、異分野間で思索しながら議論していくことが、本シンポジウムの目的である。

ディスカッション形式を取り分野の違うシンポジストと指定討論者がそれぞれの専門的立場から多様なコメントを出し合い、テーマを拡張・深化させていく予定である。このような正解のない問いを丁寧に議論していくことこそ、情報に溢れた現代に求められる課題への向き合い方の一つであり、多様な見方を促す契機になり得るだろう。逆説的であるが、悩むという行為を多層的に深め、これまで考えてこなかった捉え方に触れることで、悩むことに対する姿勢がほんの少し変化する可能性も同時に提示していきたい。また、異分野で活躍するシンポジストの深い思索と生きた言葉に触れ、学問的に触発されながら、心の根底が揺さぶられる体験をしていただくことも本シンポジウムのもう一つの目的である。

話題提供 1：カウンセリングの立場から見た悩み（角南なおみ）

これまでカウンセリングでは、相談者の悩みをお聴きすることを重視してきた。多くの心理療法において、関係性を形成しながら、語りを注意深く傾聴し共感する過程で、相談者の気づきを促すことはある程度共通しているだろう。その目的は、悩みを解決することだけにとどまらない。これまで抱えてきた悩みを数回語るることにより、完全に解決することは難し

い。そのため、ともに悩むというあり方も重要だと考えられる。ただし、カウンセリングでは、悩む相談者をどのように支えるかという方向性は持っているものの、悩むことをどう捉えるかという問いには十分な解答を持っていない。本シンポジウムではこのような正解のない問いである悩むことについて新たな視点から検討していきたい。

話題提供 2：障害をもつ人における「悩み」と対処のナラティブ（能智正博）

近代以降の社会において「悩み」の本質を捉えたとしたら、多様なレベルにおける自由の感覚の喪失と考えられる。竹田（2004）によれば自由は、欲望と能力の間の相関意識であるという。そして欲望は社会の中で他者の欲望として、能力は幻想的な身体の可能性としてこちらも社会的に構築されるが、悩みはこの相関関係のズレとして立ち現れてくると考えられる。私の話題提供では、障害をお持ちの方のライフストーリーを取り上げる。近年は障害を社会の問題として捉える社会モデルの障害観が広がっており、彼らの悩みに対して物語りの1つを提供しているが、そういった物語りを持つことが「悩み」の体験に対してどういう意味をもっているか考察する。

話題提供 3：数学的態度からみた悩みの捉え方（堀畑佳宏）

数学は自由を大切に作る学問である。とくに公理（一般には仮説や仮定）の設定の自由さは他の学問と比べ際立つ。例えば三角形の内角の和が 180° の幾何学もあれば、そうでない幾何学（非ユークリッド幾何学）もある。数学では、無矛盾であれば公理の設定は自由である。様々な公理（視点、とも言える）を行ったり来たりできるのが数学における自由さの1つである。「悩み」の要素にはある種の「差異」あるいは「固執」が含まれているのではなかろうか。例えば前者は「理想と現実」、後者は「先入観」が挙げられる。これらは即否定的なものとはならない。前者は成長や視野の拡張の契機を与え得る、後者は相対化、あるいは徹底することで新しい世界観に迫り着き得る。つまり悩みには、仮説の拡張や新しい仮説への移行の可能性がある。

数学的な自由な態度を基に、悩みの解消や悩みの解釈の変更を通じた「悩みとの付き合い方」を議論したい。

The Manner of Worrying

-An interdisciplinary search for a clinical approach to everyday experience-

Naomi SUNAMI (Teikyo University), Moderator

Naomi SUNAMI (Teikyo University), Presenting Author

Masahiro NOCHI (The University of Tokyo Graduate School), Presenting Author

Yoshihiro HORIHATA (Yonago National College of Technology), Presenting Author

Hiroaki ISHIGURO (Rikkyo University), Discussant

TEA（複線径路等至性アプローチ）の可能性

ー移境態・関係学・個体化・ナノエスノグラフィー

企画・司会： サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

話題提供 ： 廣瀬太介（立命館大学人間科学研究科）

話題提供 ： 鬼頭弥生（名古屋短期大学保育科

／立命館大学人間科学研究科）

話題提供 ： 福山未智（立命館大学人間科学研究科）

話題提供 ： 上川多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）

企画趣旨

TEA（複線径路等至性アプローチ）は、研究設問となる現象を等至点に設定することによって研究者が関心を持つどのようなことについても研究することを可能にした。TEA のフラッグシップである TEM（複線径路等至性モデリング）は、非可逆的時間の次元と「実現したことー実現しないこと」という次元の二つの次元を用いて人生径路を描くものである。これまでに多くの研究を生み出してきたが、（１）生成や変化が伴わない現象を記述しづらかった、（２）複数の人物が集団として行う活動の記述が難しかった、（３）自身を対象にする Auto-TEM において真正性（Authenticity）の確保が難しかった、（４）粗大な文化とは異なる小さい文化を捉える視点をもちにくかった、という課題が浮き上がってきた。今回は、こうした課題に立ち向かうために、移境態・関係学・個体化・ナノエスノグラフィを TEA（複線径路等至性アプローチ）に融合させる試みについて紹介する。

話題提供 1：移境態(liminality)概念の導入による TEM の拡張（廣瀬太介）

通過儀礼は、分離、過渡、統合の３段階に分類される。そのなかでも、過渡での移境態的な経験は、新しい境界に移行することを可能にする一時的な境界の停止を意味する。そのため、移境態では、「何か」が「なる」過程である瞬間に新しさが出現する。それに対して、移境態熱処(liminality hotspots)とは、永続的となった移行の状況のなかで、人々が宙づりになっていると感じる機会のことである。今回の話題提供では、ひきこもりを経験している青年の心理過程を TEM(複線径路等至性モデリング)で分析した結果を、通過儀礼のメタファーを用いて解釈する。TEM では、これまで、必須通過点(地図のメタファー)、等至性(生物学のメタファー)など、さまざまなメタファーが用いられてきた。本発表では、新たに通過儀礼のメタファーを取り込むことで、TEM を臨床心理実践に応用する可能性を検討する。

話題提供 2：TEM と関係学の融合による保育における子どもたちの関係性の可

視化（鬼頭弥生）

TEM には、非可逆的時間とともに「人間のライフ(生命・生活・人生)のあり方について、時間軸上の変容・安定に着目し、その変容や安定を描く」という特徴がある。関係学の特徴には、「かかわり」(関係) 構造の分析をすすめて、人間の根源的な自己・人・物の接在共存関係状況を究明し、複雑な人間諸現象をその状況の顕在化の過程においてとらえ、関係発展の実践活動を促進する理論的枠組みを提供しているところにある。サトウ(2022)は、TEA と関係学を融合することで、TEM における分岐点の前後の関係を円を用いて「見える化」する可能性が拓かれると述べており、本発表では TEM と関係学の融合を提案する。TEM では、相互作用する他者は、社会的助勢・社会的方向づけとして背景になる傾向があるが、内在・内接・接在・外接・外在の 5 つのかかわり方の枠組みを用いて関係構造を分析していく関係学を取り入れることで、集団として捉え、関わり合う子どもは集団の成員として可視化することが可能となる。

話題提供 3：TEM における時期区分と個体化のクロスチェック表の使用の提案

（福山未智）

TEM は、記号論的文化心理学に基づく質的研究法であり、その特徴は研究者の恣意性や主観性を管理するためのツールが組み込まれていることである。本発表ではフランスの哲学者ジルベール・シモンドンの個体化理論を基に、TEM における時期区分の真正性を確保する「時期区分と個体化のクロスチェック表」を提案する。個体化を用いた分析を行うには、TEM において個体の前段階（前-個体）から新たな状態に移行するプロセスに着目する。これにより、人の発達やその渦中にある葛藤する様を明らかにすることが可能となる。更に、クロスチェック表を用いることにより、時期区分ごとに前-個体から活動を経て、個体化に至るプロセスを可視化することが可能となり、個体化が正しく行われているかを検証できる。クロスチェック表は、TEM における時期区分と個体化の設定が正しく行われているかを確認するためのツールとして有効であり、研究の真正性を高める重要な手段である。

話題提供 4：「今、ここ」を切り取るナノエスノグラフィ（上川多恵子）

本発表では、TLMG(発生の三層モデル)とズウィットンのイマジネーション理論を援用したナノエスノグラフィの提案を行う。本発表者が提案するナノエスノグラフィとは、日常にある自明的な行為に着目し、BFP(分岐点)に焦点を当てて「文化」(記号による調整)をエスノメソドロジ的視点によって追求し分析するものである。ここでは、ナノエスノグラフィの理論的背景を紹介するとともに、異なる文化を理解するツールとして活用することを目的とした分析事例を用いて、「今、ここ」における事象をどのように切り取って分析することが可能であるかどうかを考えたい。また、森岡(2022)が「日常の微細な出来事の発見と共有」は他者と今を作り出すことであると指摘するように、発表者は日常生活におけるその微細な出来事の発見と共有を他者とともに行うことで、異なる文化を理解する新たな発見をしていきたいと思う。

質的研究をあみなおす

ー『アンラーニング質的研究』の回折的読みー

企画・司会： 楠見友輔（信州大学）

話題提供： 緒方亜文（東京大学大学院）

話題提供： 小田郁予（早稲田大学）

話題提供： 久保田裕斗（びわこ学院大学）

企画趣旨

企画者は、『アンラーニング質的研究：表象の危機と生成変化』（楠見, 2024）を出版した。本書では、表象の危機後の質的研究の動向と、近年のドゥルーズの哲学、ポストヒューマニズム、ニューマテリアリズムという現代思想の質的研究への影響を説明した。また、「慣習的な人間中心主義的な質的方法論からの転回」（St. Pierre, 2019: 3）という運動が、どのような問題系の中で生じているのかを議論した。そこで取り上げたテーマは、「表象の危機を経て質的研究者がポストモダニズムを受容したこと、監査文化に対する多くの研究者の抵抗、関係的倫理とサバルタンへの配慮、人新世における問題系、科学における認識論と存在論の新たな転回」（楠見, 前掲書: 186）である。

本書のタイトルに含まれる「アンラーニング」は、読み手が質的研究の型をほぐすことと、学会の中で蓄積されている型をほぐすことの両方を含意している（楠見, 前掲書: 12）。このことを踏まえると、日本質的心理学会という質的研究に関心のある研究者が集まる学会において本書を検討することは、アンラーニングを通して社会科学研究の未来をひらくことに貢献できると考える。

若手研究者である 3 名の登壇者は、本書で記されたテーマのうち、1 つないし複数の章で示されたテーマについての話題提供を行う。その際に期待するのは、「本書と一緒に考える」という「回折的読み」（Barad, 2007; Hultman & Lenz Taguchi, 2010）である。回折的読みとは本書から学ぶことでも、本書を通して既知の考えを深めることでもない。それは、本と読み手の重なり合いから新しい知識を生み出すことである。

本シンポジウムでは、参加者からの自由なコメントや意見を期待することから、指定討論者を立てない。シンポジウムの語源である「シンポジオン（共に飲む）」とは、食事や飲み物を愉しみながら議論を自由に行う場である。本企画は、そのような場を提供することで、参加者にとっての新しい質的研究のアイディアを持ち寄り、それらを「あみなおす（reassemlage）」を試みる。

話題提供 1：ディスコース分析・会話分析を活用することは可能か（緒方亜文）

話題提供者は、博士課程に在籍する研究者である。これまで、自閉スペクトラム症（以下、

ASD) の子どものコミュニケーションに関心を持ち、中学校の特別支援学級におけるフィールドワークを行ってきた。具体的には、ASD の子どもへのインタビューや、教師・支援員・周囲の子どもなどのやり取りの観察を行ってきた。その分析の際に用いている方法に、ディスコース分析や会話分析がある。これらは、社会構成主義に基づく分析のツールと見なされている (Burr, 2015/2018)。翻って、本書で提示されている回折的な読み、ポスト質的研究といった視点から、ディスコース分析や会話分析をいかに用いることができるのか。あるいはそもそも用いることが可能なのか。いくつかの具体的な事例やデータに基づいて、議論を行いたい。

話題提供 2 : 監査文化と向き合う : 教師研究の前提を問い直す (小田郁予)

報告者の専門は教師研究である。多様な課題に直面しながら学校がなぜ機能破綻しないのかに関心を持ち、その背後で機能している教員文化の特徴を継続的な観察と教師の語りの分析から検討している。本報告では、現職経験を有する若手研究者として、教師研究を巡る課題について話題提供し、参加者と共に「アンラーニング」していきたい。

議論の契機となるものとして、報告者からは教師教育研究で展開されている議論の概観を示し、研究者が教師の道具化に寄与し、教師の脱専門職化に意図せず加担している危険性があることを示す。その上で、楠見 (2024) が危惧する「監査文化」について、1) 監査文化が学術研究や教師の実践にいかなる影響を及ぼしているか、2) 監査文化の浸食を阻止するために研究者／実践家は何をし得る／すべきか、参加者と議論していきたい。

話題提供 3 : アンラーニング障害学 (久保田裕斗)

話題提供者はインクルーシブ教育や特別支援教育に関心を持ち、その実践を主に教育社会学的な観点から検討してきた。インクルーシブ教育を既存の学校秩序の変革のプロセスであると考えられる場合、重要になるのは個人化 (身体化) された問題を社会化し返すことであり、その際に障害学の蓄積を無視することはできない。

すでに日本の障害学においては、ディスアビリティ／インペアメントの二項対立的前提を批判的に検討した研究や、障害以外の観点も含めてジェンダー・セクシャリティ、移民等との交差性を論じた研究など、既存の障害学が立脚してきた枠組みを批判的に検討する「批判的障害学」と称される新しい研究動向が存在する。当日は、こうした障害学の動きを、本書でも言及されていた「(新しい) マテリアルターン」という観点をもとにアンラーニングする話題を提供してみたい。

Reassembling Qualitative Research

Reading “Unlearning Qualitative Research” Diffractively

KUSUMI, Yusuke (Shinshu University), Organizer & Moderator

OGATA, Amon (Graduate School, The University of Tokyo), Presenting Author

ODA, Ikuyo (Waseda University), Presenting Author

KUBOTA, Hiroto (Biwako-Gakuin University), Presenting Author

Language: Japanese

アートベース・リサーチが拓く質的研究の可能性

ードキュメンタリー演劇を中心にー

企 画： 青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

話題提供： 萩原健（明治大学国際日本学部）

話題提供： 川島裕子（関西大学総合情報学部）

話題提供： 岸磨貴子（明治大学国際日本学部）

指定討論： 東村知子（京都教育大学教育学部）

企画趣旨（青山征彦）

従来の心理学における量的な記述を批判してきた質的心理学にとって、記述、分析の枠組みをどのように考えるのかはもっとも重要な課題の一つである。本シンポジウムでは、アートベース・リサーチ（Arts Based Research：以下 ABR）の一つであるドキュメンタリー演劇を取りあげ、新たな記述、分析の可能性について議論する。質的心理学を含め、従来の研究では、研究者がデータを分析するプロセスと、結果を発表するプロセスは別物であったが、ABR では分析のプロセスと発表のプロセスとが密接に結びついている。こうしたプロセスが、研究者と研究対象、オーディエンスが互いに関わりながら進んでいくのも、ABR の特徴と言えるだろう。本シンポジウムでは、こうした ABR のありかたが、質的心理学をどのように拓いていけるかを考えたい。

話題提供 1：ドキュメンタリー演劇とは（萩原健）

ドキュメンタリー演劇は、非日常・非現実の世界へ観客を引き込もうとする演劇とは逆に、日常の現実の再発見や再認識を促す。本発表ではドキュメンタリー演劇の概念と歴史的展開について整理する。

1960 年代の西ドイツで、ドキュメンタリー演劇（記録演劇）の概念が確立された。近過去や当時進行中の事件が扱われ、その事件の記録文書がテキストに使われたり、スナップショットや記録映画が並行して示されたりした。

その一世代後、ドキュメンタリー演劇は新たに展開する。近過去や当時進行中の事件が扱われる点は変わらないが、その事件の当事者が出演する例が目立ち始める。また並行して、当事者が自分たちの経験に基づいて制作する演劇（ワークショップ）の実践が盛んになる。

発表では以上の流れを、主にドイツと日本の事例を引き合いに出しながら示したい。

話題提供 2 : 「他者を演じる」実践とインタビュー（川島裕子）

本発表では、ドキュメンタリー演劇の制作・公演過程のなかでも、役者が「他者を演じる」実践に着目し、その研究手法としての可能性を考察する。ドキュメンタリー演劇とは、実際にあった社会的出来事をさまざまな素材をもとに上演する演劇であり、当事者へのインタビュー調査は重要な役割を担う。川島がゼミ活動として取り組む演劇制作では、学生である役者らがインタビューを行い、台本制作に携わった。その際、役者が当事者の語りを話し方のパターンを掴みながら一言一句演じる「ヴァーベイトム・インタビュー演劇」の手法を用いた。パフォーマンス練習を行いその表現方法を模索するなど演劇公演に向けた活動を行うなかで、役者らは当事者であるインタビュー対象者とどのように向き合い、理解を深めていったのか。本発表では、研究者と研究参加者の関わりや関係性に着目しながら、質的研究の新たな分析、表現方法として、「他者を演じる」実践の内実と意義を考察する。

話題提供 3 : ドキュメンタリー演劇を通じた教師の探究プロセス（岸磨貴子）

高等学校における探究学習に関する教育実践研究を、ドキュメンタリー演劇として発表した事例を取り上げる。脚本・演出は、その教育実践に中心的に取り組んできた教師ら3名である。これらの教師は地域と連携したプロジェクト型の探究学習のコーディネータを担当し、筆者はそのアドバイザーとして参加した。研究テーマは、探究のための教育環境デザインで、教師らは多様な生徒の多様な学びや学び方を捉えることを通して、生徒の主体性が発揮される要因を明らかにするための手法とその結果を研究としてまとめた。本研究の成果報告会では、スライドを活用した発表を予定していたが、このフォーマットでは、生徒の多様な学びや学び方に対する教師の分析と考察を十分に描くことができなかった。また、3人の教師による多様な解釈を交差させていく中で深い洞察が生まれていったがそのプロセスも描くことができない。そこで、研究発表において、生徒の多様な学びと学び方および教師の多様な解釈を描くために演劇手法を用いた。教師らが研究成果をまとめた際、スライドと脚本のフォーマットでそれぞれ含まれた内容や示し方は大きく違った。その違いは何か、なぜかについて検討し、質的研究のデータ生成と発表方法として可能性を議論したい。

How Qualitative Research Will be Opened Up by Arts-Based Research

Focus on the Documentary Theatre

AOYAMA Masahiko (Seijo University, Faculty of Social Innovation), Moderator

HAGIWARA Ken (Meiji University, School of Global Japanese Studies) Presenter

KAWASHIMA Yuko (Kansai University, Faculty of Informatics) Presenter

KISHI Makiko (Meiji University, School of Global Japanese Studies) Presenter

HIGASHIMURA Tomoko (Kyoto University of Education, Faculty of Education)

Discussant

Language: Japanese

AI が質的研究をどう変えていくか

ーその②ー

企画・話題提供者・司会： 薛海升（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供： 堀内多恵（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供： 大橋英永（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供： 中田友貴

（立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構）

指定討論： 尾見康博（山梨大学大学院総合研究部）

指定討論： 川野健治（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

本企画は、昨年続き、AI が質的研究に与える影響と今後の可能性に焦点を当てる。昨年度の企画からわずか一年の間に、生成 AI の発展が凄まじく、音声や画像も含めて処理できる Chat-GPT4o や、高度な推理能力を持つ Claude 3.5 Sonnet などのモデルが次から次へと登場した。本企画では、質的研究に携わる者がこれらの技術をどう活用してきたか、また今後の展開について議論する場を提供する。

話題提供 1：AI が拓く新たな質的研究（薛海升）

AI の発展によって、世界が大きく変化するだろう。その中に、質的研究はいかにかわっていかをここで論じたい。まず、AI が社会全体への影響によって、質的研究の対象は変化する。今までなかった、人間と AI の相互作用や AI そのものを対象とした質的研究が今後増えるはずである。次に、質的研究自体への直接的な影響として、データ収集や分析、論文執筆において、AI による補助がより一般的になっていくと考えられる。最後に、身体性問題、倫理問題といった AI の限界について論じる。

話題提供 2：心理臨床家における AI（堀内多恵）（大橋英永）

日進月歩で発展していく AI は、心理臨床実践の場にどのように影響しているのだろうか？ 本発表では、生成 AI を活用した心理教育プログラムのクラスデザインや、AI を用いたカウンセリングサービスを例にとりながら、心理臨床実践に対する AI の影響や、AI 活用の実態を論じる。特に「仕事を奪うもの」としての AI と「仕事を補助するもの」としての AI を対比しながら、AI 時代の心理学研究における人間の在り方について考察していく。

話題提供 3 : AI を用いたインタビューから見たヒトによるインタビューの再考

(中田友貴)

本報告では、AI 技術を用いたインタビューとヒトによるインタビューの比較分析を通じて、従来のインタビュー手法の再考を行う。近年、自然言語処理技術の進展により、LLM などによる AI を用いたインタビューが可能になってきた。AI インタビューは、バイアスの排除、迅速なデータ収集、コスト効率性などの点で優れた特性を持つ一方、ヒトによるインタビューが持つ直感的な理解力や共感性に欠けるとの指摘もある。本研究では、学生に対する AI によるキャリアインタビューから調査者や協力者が持つ違和感について検討を行う。その上で、インタビューという手法の再考を行う。

Title of symposium:

How AI will change qualitative research: Part 2

Haisheng Xue (Graduate School of Education, The University of Tokyo),
Moderator/Presenting Author

Tae Horiuchi(Graduate School of Education, The University of Tokyo), Presenting
Author

Hidenaga Ohashi (Graduate School of Education, The University of Tokyo),
Presenting Author

Yuki Inoue Nakata (Ritsumeikan Global Innovation Research Organization,
Ritsumeikan University), Presenting Author

Yasuhiro Omi (Graduate Faculty of Interdisciplinary Research, University of
Yamanashi), Discussant

Kenji Kawano(College of Comprehensive Psychology Department of
Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese

複線径路等至性アプローチにおける分岐点の捉え方

－対人援助に関わる研究を例とした考察－

企 画： 上川多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）

司 会： 上川多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）

話題提供： 吉田さとみ（梅花女子大学看護学部）

話題提供： 横山直子（立命館大学大学院人間科学研究科）

話題提供： 林田一子（兵庫県立大学看護学部）

指定討論： 安田裕子（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

本シンポジウムの目的は、複線径路等至性アプローチ（以下、TEA）における「分岐点」の捉え方について考える場を設け、分岐点を捉えることによって得られた知見をもとに議論を展開することである。TEA における分岐点は「ある経験において、実現可能な複数の径路が用意されている状態」であり、「複線径路を可能にする結節点（ノード）のこと」である（サトウ 2009）。そして、「本来的には時間経過の中で生起する緊張状態を内包する有り様（安田 2015）」として概念化されている。本シンポジウムでは対人援助に関わる研究を行う 3 名の話題提供者が TEA を用いて分析する中で、どのように悩みながら「分岐点」の分析の視点を工夫していったのか。また、それぞれの工夫からどのような新たな気づきや研究としての増分を得ることができたのかを報告する。

話題提供 1：介護保険施設における看護職の組織再社会化のプロセス（吉田さとみ）

特別養護老人ホームで働く看護職の仕事満足度は低い傾向にあり（高山ら, 2015）、約 3 割が 1 年未満に退職している（独立行政法人福祉医療機構, 2023）。本研究において看護職は介護現場の現実と直面する中で自身に定着した価値観を再認識し置かれた立場に葛藤しながら組織再社会化のプロセスを辿っていた。そのプロセスにおいて看護職が表出する意志（意思）に着目し分岐点を捉えたが、頻発する意志（意思）に果たして分岐点といえるのかという疑問は解消されず、幾度も TEM 図を描き直している。当日は議論を通じて分岐点である所以を再考していきたい。

話題提供 2：脳卒中後遺症者の長期生活変容過程の複雑さ（横山直子）

本研究では、脳卒中後遺症者の生活変容過程の複雑性を捉えることを目的とし、長期にわたる A 氏の生活について複線径路等至性モデリング（TEM）で分析している。TEM 図では、A 氏が「心身の揺れ動きから再度生活へと向かう」現象が何度か確認された。しかし、このような一連の現象を分岐点（BFP）に絞ることが困難であった。本研究は自宅生活という長時間軸の事象を扱っており、分岐「点」より「域」と位置づけた方が分析に広がりを持つ可能性があると考え、分岐域（BFZ）という概念について導入を試みている。この TEM 図作成における試行錯誤から「分岐点・域」をどう定めたかを共有し、議論を通じて再考したい。

話題提供 3：医療的ケア児に関わる学校看護師の初期定着要因（林田一子）

本研究では、医療的ケア児に関わる学校看護師が勤務を継続するプロセスを、TEA を用いて明らかにし、初期段階における定着要因について検討している。学校看護師として勤務を始めた初期段階では、役割や組織文化が分からず、TEM は右肩下がりとなっていた。そこから右肩上がりに転じる際に影響した社会的諸力（SD、SG）・個人的諸力（PD、PG）に着目し、分析を行った。それらの諸力が働く径路には分岐点があると捉えられるが、どのポイントを分岐点とするかの決定は二転三転している。TEM を描く過程で二転三転した経緯と、最終的にどのように分岐点を同定したかを紹介し、皆さんと共に分岐点について考えたい。

How to Analysis Bifurcation Points in Trajectory Equifinality Approach

Consideration of research related to interpersonal assistance as an example

Taeko Kamikawa (Ritsumeikan University), Moderator

Satomi Yoshida (Baika Women's University), Presenting Author

Naoko Yokoyama (Graduate School of Human Sciences, Ritsumeikan University),
Presenting Author

Kazuko Hayashida (University of Hyogo), Presenting Author

Yuko Yasuda (Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese

ビジュアル・ナラティヴとメタファーの力

企 画： 横山草介（東京都市大学 人間科学部）

やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）

話題提供： やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）

話題提供： 山本一成（滋賀大学 教育学部）

話題提供： 横山草介（東京都市大学 人間科学部）

企画趣旨

ビジュアル・ナラティヴは、人々の経験や世界における諸現象を視覚的なイメージを介しても語る行為ならびにその所産を糸口として人間や世界についての多様な理解を試みるアプローチである。企画者らはこのアプローチの可能性について、いくつかの学会で研究報告を重ねてきた。視覚的なイメージを介した語りは「シニフィアン（記号表現）」と「シニフィエ（記号内容）」とのむすびつきにおいて、多義性を1つの特徴としている。言葉を換えて言えば、表現されているところと指示されていることとの間に多様な解釈可能性が残されている。今回のシンポジウムでは、この問題を「比喩の力」という観点から捉え直してみたい。比喩には、原事象との連関が明示的な「直喩 simile」、原事象との連関が非-明示的な「隠喩 metaphor」、原事象との連関を、喩えの関係項によって指示する「換喩 metonymy」、原事象との連関を、喩えの部分-全体関係によって指示する「提喩 synecdoche」、原事象との連関を人間や事物に喩えて指示する「擬人」「擬物」といった方法が知られる。ただし、これらは言語を用いたレトリックの手法として整理されたものであり、視覚的なイメージを用いた比喩にそのまま適用可能であるとは限らない。こうした点も含め本シンポジウムでは、ビジュアル・ナラティヴと比喩の力との関係について探究を行いたい。

話題提供 1 時空を超えて共に見る「月」（やまだ ようこ）

私は、「詩的現実とビジュアル・ナラティヴ」の理論化をこころみてきた。古くから「花鳥風月」といわれ詩歌の題材になってきた「月」の意味を、次のような多重の視点から考えてみたい。①ビジュアル・ナラティヴでは、言語が対話的「二項関係」であるのに対して、ビジュアルを媒介に共同注意的「三項関係」をむすぶことに特徴がある。「月」は、三項関係の媒体としての「ビジュアル」となる。②「月」は、今ここに居る自己と離れた場所（あ のとき、あそこで見た月）をむすび、不在の場所や不在の他者をむすぶ媒体となり、時空を超えた「メタファー（原義は移動）」となる。③「月」は、天上の月と地上の自己をかさねて自己を振り返る「鏡」となり、ライフ（人生・いのち）を眺めるリフレクションの媒体となる。④「花鳥風月」（移ろうもの）のなかでの「月」の位置づけを、半具象的な「場所（トポス）」モデルを生成することによって明確にする。

話題提供2 「発酵」メタファーによる協同的保育実践理解（山本 一成）

筆者は全国私立保育連盟による委託研究「Life（生活・人生・生命）を深める保育実践理論の探求」のなかで、「発酵」メタファーで保育実践を記述することを試みている。「発酵」は関係的な概念である。有機物を分解するのは人間ではなく微生物であり、人間は微生物が活動しやすい環境をつくるにすぎない。発酵の「担い手」は、微生物—人間—環境（温度や水分）の系であり、個体ではない。関係のなかで、人間以外の存在の手も借りながら、時間をかけて「良さ」を生み出していくのが発酵である。

保育を発酵のプロセスとして捉えてみると、どのようなことが見えてくるだろうか。育つことを「発酵」として見ることと、「発達」として見ることには、どのような違いがあるだろうか。本発表では、研究協力園の保育者と協同的に探求してきた、「発酵」メタファーを通じた保育実践理解の試みを紹介し、発酵的保育論の可能性を検討したい。

話題提供3 視覚的なイメージが照らし出すもの（横山 草介）

視覚的なイメージによって表現されたものが一体何を指示しているのか、という問いは「シニフィアン（記号表現）」と「シニフィエ（記号内容）」とのむすびつきをめぐる興味深い探究のトピックを引き出す（ロラン・バルト，2005）。筆者は保育者が自らの実践について抱く実践観を視覚的なイメージを通して明らかにする研究に取り組んできた（横山・関山，2020，2022）。保育者はときに自らを太陽や大地、風雨に喩えて表現する。あるいはまた、保育の実践を植物や樹木の栽培に喩えて表現する。視覚的なイメージは、さまざまな具象、抽象によって描かれ、それぞれが実践についての何らかの価値観や信念を明らかにするものとなっている。そこには、保育という社会的な実践に関わる保育者の個人的な価値観や信念に留まらず、社会—文化—歴史的に構築された価値観や信念までもが照らし出される。本発表ではこれらの視覚的なイメージが明らかにしているものについて検討することを通して、ビジュアル・ナラティブの可能性について探究を進める。

Visual Narrative and the Power of Metaphors

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Moderator

Yoko Yamada(Ritsumeikan University), Moderator

Yoko Yamada(Ritsumeikan University), Presenting Author

Issei Yamamoto(Shiga University), Presenting Author

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Presenting Author

Language: Japanese

記号論的文化心理学の理論的展開の議論

ー諸概念の深化、拡張、適用に挑むー

企画・司会・話題提供：滑田明暢（静岡大学大学教育センター）

企画・話題提供：宮下太陽（株式会社日本総合研究所）

企画・話題提供：土元哲平（中京大学心理学部）

指定討論：ヤーン・ヴァルシナー（オールボー大学）

指定討論：サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

本企画は、ヤーン・ヴァルシナー（Jaan Valsiner）の記号論的文化心理学で提案されている諸概念を深化、拡張、適用することに挑戦する試みである。ヴァルシナーの記号論的文化心理学は、個人が記号を介して社会環境を意味づけ、その意味づけによって個人が影響を受ける過程を文化として捉え、文化の過程の理解をすることによって人間理解を行う心理学であると考えることができる。個人が記号を介して社会環境を意味づけ、それによって影響を受ける過程には、記号の概念を始めとして、様々な概念が関わっている。本企画は、記号論的文化心理学に関わる諸概念を切り口として、記号論的文化心理学の理解を深めるとともに、記号論的文化心理学の理論を発展させる方向性での議論を展開したい。

本企画の話題提供者は、『An Invitation to Cultural Psychology(文化心理学への招待)』（Valsiner, 2014, SAGE 社）の翻訳や監訳に関わったメンバーである。翻訳や監訳の作業を進めるなかで、ヴァルシナーの記号論的文化心理学に関わる様々な理論的概念にふれてきた。翻訳チームのメンバーは、これまでも記号論的文化心理学に関わる概念の理解や今後の可能性を検討するシンポジウムを企画し、議論を進めてきた。今回のシンポジウムでは、ヤーン・ヴァルシナー（Jaan Valsiner）先生にも参加をいただく形で、訳書をつくりあげるなかで得られた成果を議論する。

なお本シンポジウムは、日本語を使用するとともに英語を使用して一部の議論を進めていく。

話題提供 1：環世界と記号圏のダイナミクス（宮下太陽）

ヴァルシナー（2014）は、環世界と記号圏を文化的構築の主要なメカニズムである内化・外化プロセスの背景として設定している。記号圏とはユーリー・ロトマンにより提唱された概念であり、人と記号との相互作用が機能するための必要不可欠な領域と捉えることができる。また、環世界とはヤーコプ・ファン・ユクスキュルが提唱した生物学の概念であり、すべての動物はそれぞれに種特有の知覚世界をもって生きているという見方である。本セッションでは、ターナーの移境態（リミナリティ）概念およびモーンスの個人的環世界概念を念頭に、環世界や記号圏が動態的に生成、維持、移行されるありようについて検討する。

話題提供 2：集合的文化から考える社会的行動の変容（滑田明暢）

ヴァルシナー（2014）の記号論的文化心理学では、各個人によって表現された文化と社会的表象とが交渉される形で集合的文化が構築され、その集合的文化が個々人の個人的文化に入り込んでいくことが示されている。ここでの集合的文化は、交渉によって常に変化し続けている共有された意味や社会的規範等が想定される。本シンポジウムの話題提供では、記号論的文化心理学の集合的文化形成過程の観点から、現実世界の社会的行動の変容過程の理解を試みる。

話題提供 3：階層か異層か？：更一般化された記号領域における身体感覚（土元哲平）

ヴァルシナー（2014）の「記号の階層モデル」に基づけば、記号は抑制的な関係を通じて階層を構築し、更一般化された記号領域が創発する分岐点に至ることがある。発表者は、階層(hierarchy)モデルの拡張として、異層(heterarchy)モデルを提案し、人生径路全体にわたる存在発生的プロセス（すなわち、更一般化された記号領域における志向性の転換）を説明する。本発表で提案するモデルは、必ずしも身体的感覚が更一般化された記号領域よりも「低次」（「自然な」「原初的な」プロセスと仮定される）ではないことを強調している。

Discussions for theoretical development on Jaan Valsiner's semiotic dynamic cultural psychology

Nameda, Akinobu (Shizuoka University), Moderator, Presenting Author

Miyashita, Taiyo (The Japan Research Institute, Limited), Presenting Author

Tsuchimoto, Teppei (Chukyo University), Presenting Author

Valsiner, Jaan (Aalborg University), Discussant

Sato, Tatsuya (Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese and English

ASD・NT 間の共生的な規範的行為形成を目指す支援

ー 当事者視点の対話的理解を足場としてー

企画司会： 山本登志哉（発達支援研究所）
話題提供： 高木美歩（立命館大学先端総合学術研究科）
話題提供： 大内雅登（発達支援研究所）
指定討論： 渡辺忠温（発達支援研究所）

企画趣旨

自閉症児・者と定型発達児・者はその特性の違いを足場として、それぞれに異なる性質の対人的行為を生成する。従ってその対人的行為をガイドする規範意識の在り方にもズレが形成され、その結果としてお互いのコミュニケーションに独特の調整のしにくさや困難が生まれることは、日常生活でも支援の現場でも普通に体験されることである。これまでその困難は「自閉」の問題として一方向から理解されて対処が模索されることが多かったが、実際にはお互いの視点や感じ方、発想の仕方にズレがあるため、定型発達者にとってわかりやすい規範は自閉児・者にはわかりにくく、その逆も然りという双方向的な関係がそこにある。

これはディスコミュニケーション論の視点（「ディスコミュニケーションの心理学」東大出版会 他）からは、異なる文化間、異なる役割間、異なる世代間など、相互に異なる規範的媒介項によって関係を調整しようとするもの同士の間にはどこでも普通に生じる、典型的な対人葛藤事態の顕在化の一種として理解可能である。ではそのように異質な規範的視点を持つもの同士が、どのように関係調整を可能にしていけるのだろうか。

本シンポジウムでは、自閉当事者が定型発達者との間に抱える様々な困難について、自閉当事者の立場から定型発達者との対話的な関係調整のための支援や共生関係の模索を継続し、定型的な規範感覚からの一方的な「矯正・訓練・教育・指導」を超えた新しい質の成果を上げ始めている高木さん（「狂気な倫理」所収「カサンドラ現象」晃洋書房）と大内さん（共編著「自閉症を語りなおす」新曜社）という、二人の支援/研究者の話題提供を受け、さらに定型発達者が定型発達者の振舞の意味を理解する能力を開発するための「逆 SST」の手法を開発・実践してきた定型発達者の渡辺さんに、その観点から当事者視点を踏まえた今後の支援の在り方について論点を提起していただき、全体の討論につなげていく。

話題提供 1：ASD の子どもたちが社会の「ルール」や「マナー」を共有する過程 （高木美歩）

発表者の高木は 20 歳で診断を受けた ASD 者である。その後博士号を取得した社会学者であり、先駆者の取り組みを参考に自分自身を「療育」した経験を活かし、施設で発達のハンデをもつクライアントをサポートする支援者でもある。

昨今、非定型発達の在り方が知られるようになり、その過程で定型発達者による一方的な「矯正」ではなく、対話的な教育も目指されるようになってきた。特に発表者は、定型発達者が多数派を占める社会において、ASD 者がいくつかの重要な規範に沿いながら自己の感覚や表現を尊重できること、つまり、折り合いをつけられるようになることが大切であると考えている。

具体的には、「ルール」と「マナー」という分類を用いて規範をわかりやすく示してクライアントの理解を支援すると共に、発表者も先生として「ルール」や「マナー」を実践する

ことでクライアントとの関係を確立している。そして、「ルール」や「マナー」によって構造化された関係の下で協力して活動することを経験したクライアントは、行動が変化するだけでなく、自分を「大人」として誇らしく感じるなど、規範を守り実践することに前向きな姿勢を見せるようになった。関連する文献や発表者の実践を紹介し、抑圧的でない形で ASD 者が社会規範を学び実践できるようになるプロセスと支援の在り方について議論してみたい。

話題提供 2：規範感覚の違いに注目をしたルール解釈の模索の必要性（大内雅登）

定型発達者と自閉症者では、言動に質的な違いが見られるとされている。振る舞いが違うということは、動機となる規範感覚にも質的な違いがあるということになる。

定型発達者は、自身の規範感覚とルールの間に乖離が少なく、幼少期に教え込まれたルールに遵守した生き方が自然なものとして獲得されやすい。他方、自閉症者においては自身の規範感覚が多くのルールになじみにくく、怒られるなどの結果によって自身の振る舞いがルールに適っていなかったことを知る構造になりやすい。自然と「怒られたからやめる」「怒られるからやらない」という態度が周辺者の目にとまるようになり、コールバークの道徳性の発達に照らしたときに、幼い子どもの道徳性で足踏みをするような解釈がなされることが多くなる。もちろん、これはルールに違反することだけではなく、よりよい人間関係を構築しようとするような好ましい態度においても同じことが言える。褒められて初めて自身の言動が成功であったと思えるのでは、主体的に生きているとは言いがたい。

ギリガンの道徳性の発達に照らしても似た誤解が生じる。自閉症者にとって道徳が社会から課される拘束以上の意味を持たないことは、ときに規範感覚の差から生じる葛藤であったとしても、「すべき＝したい」の段階にとどまっている状態としてしか評価されない。

自閉症者の規範感覚に照らしながら、ルール解釈を一緒に模索していく必要がある。

指定討論：逆 SST から考える対話・合意形成・規範（渡辺忠温）

高木・大内両氏の支援実践からは、支援の中で「規範」が、一般的な社会における規範の抑圧的なあり方とは違った可能性を持つことがうかがえる。よりローカルな個と個の関係の中で、規範は互いを相互に抑制的に調整するもの、というだけではなく、新しい相互行為・人間関係のあり方を創発することへと開かれており、そのきっかけを与えてくれるものでもある。同時に、そうしたローカルな規範の形成が、両氏の実践の中ではコミュニケーションを通じた双方向的な合意形成のなかで行われている点も重要だと思われる。これまで実施してきた逆 SST（SST-R: Social Skills Training-Reversed）（渡辺・大内，2022；大内・山本・渡辺，2023）の中では、さまざまな領域で背景を異にする自閉症児・者と非・自閉症児・者の間での、理解と合意形成の、楽しさとともに難しさも痛感してきた。

逆 SST をこれまで実践してきた立場から高木氏・大内氏の実践報告を受けて、規範の面から今後の支援の在り方を議論してみたい。

Support for Coexistence and Norm Formation between ASD and NT

From the perspectives of dialogical adjustment between the parties involved

YAMAMOTO, Toshiya (Developmental Research Support Center), Moderator

TAKAGHI, Miho (Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences), Presenting Author

OHUCHI, Masato (Developmental Research Support Center), Presenting Author

WATANABE, Tadaharu (Developmental Research Support Center), Discussant

Language: Japanese

「ゲームをつくること」による関係性のあみなおし

ー「クロスロード」をめぐる近年の展開を中心にー

企画・司会： 石田喜美（横浜国立大学教育学部）

話題提供： 李勇昕（日本学術振興会・茨城大学）

話題提供： 松井かおり（大同大学教養部）

指定討論： 岸磨貴子（明治大学国際日本学部）

企画趣旨

本シンポジウムでは、ゲーム——特に、過去に起きた出来事や、現在生じている出来事を題材としたゲーム——をつくることによってもたらされる、人々の関係性の「あみなおし」に着目する。「ゲームをプレイすること」による関係性の変容については、矢守(2010)が、ゲーミングシミュレーション・ツール「クロスロード」を事例とし、インターローカリティという観点から、媒体としてのゲームを意義づけている。過去・現在に生じる出来事の中で人々が感じた葛藤に基づいてつくられる「クロスロード」は、「防災」「災害」といった元来のコンテクストを越えて、「食のリスク」や「感染症」など、過去・現在（あるいは未来）のさまざまな危機的出来事によって生じる葛藤を記録・集積し、それをゲームというかたちで開くことで、人々が語りあう場をつくるためのツールとして、さまざまなコンテクストのなかで転用・専有（appropriate）されるようになってきているとすら言える。このような「クロスロード」の特徴は、「クロスロード」の「つくり手」を専門家（研究者やゲームデザイナー）から、市井の人々へと転換することをも可能にしてきた。過剰な復興支援ゆえに自らの「主体性」を奪われてしまっている被災地の住民自身が自らの経験や語りに基づき「クロスロード」を作成し、それをを用いたゲームプレイを行うという試み（李ほか、2019）は、その好例であると言えよう。本シンポジウムでは、このような「クロスロード」の2010年代以降の展開に着目し、その実践・研究に関する話題提供を踏まえ、「ゲームをつくること」によって、いかなる人間関係のあみなおしが可能であるのかを考える。はじめに「クロスロード：大洗編」をはじめとした複数の場で「クロスロード」を作成する活動を行ってきた李勇昕氏、および、外国につながる子どもたちの支援・教育に関わる人々にとっての「クロスロード」の可能性に着目し、作成やプレイの場を設けてきた松井かおり氏が話題提供を行う。その後、「アートベース・リサーチ（Arts-Based Research）」を中心に、研究成果のさまざまな発信の仕方、教育や社会へのつなぎ方を研究してきた岸磨貴子氏が指定討論を行う。当日はこれらに基づき、フロアとともに「ゲームをつくること」による「あみなおし」について議論したい。

本シンポジウムは、科学研究費課題 20K02877・24K06256 の一環で実施されるものである。

話題提供 1 :

「クロスロード：大洗編」から生まれるインターローカリティとは（李勇昕）

本発表では、発表者が「クロスロード：大洗編」の取り組みおよびその後のインターローカリティの展開について報告する。発表者は2014年に東日本大震災の被災地である茨城県大洗町の住民とともに、住民の被災体験・復興体験に基づいて「クロスロード：大洗編」を作成した。住民は当時、風評被害に関するジレンマや葛藤を抱えていたが、これらの問題を「言っても変わらない」、「理解してもらえない」と感じていた。しかし、「クロスロード」を作成することで、地域同士が問題に共に向き合うようになった。その後、発表者は日本と台湾の防災教育の現場で、単に受講者と「クロスロード」をプレイするだけでなく、「クロスロード」を作ってもらうことにした。また、台湾の行政と協力して地域防災リーダー向けの「土石流編」や小中学校教員向けの「防災教育編」を作成した。「クロスロード」を作成するインターローカリティは、個人や地域コミュニティの独自性を表現すると同時に、他者からの理解やコミュニケーションを促進することである。

話題提供 2 : ゲーム製作でつくる私のことば、私たちのことば（松井かおり）

本発表は、学校や地域で外国につながる子どもたちの教育や支援に携わる人たちが、「クロスロード：外国につながる学習支援員編」のカード製作とその自作カードを用いたプレイ会を通して、どのように自分を振り返り、また場を共有する人たちとどのような関係性を創ったのかを報告する。本発表に先立って行われた類似カードゲームとこのゲームのプレイ会の比較では（松井、石田、半沢、2023）、本ゲームのプレイ会における参加者の発話量の多さや発話行為の多様さが目立つ結果となった。具体的には、ゲームマスターからの指名をうけず、参加者同士で質問をし合いカードの内容を確かめようとする、カード製作者ではない参加者が、あたかも自作のカードであるように説明を行う、などである。類似ゲームのプレイ会では見られなかったこれらの参加者の振る舞いには、カード製作を通し、それまで声にならなかった自分の思いをことばにする場を共有する者同士が、他者のジレンマと自身のジレンマを区別なく受けとめ考えたいという態度が見てとれた。

Reconstitution of social relationship by making games

Gaming-simulation tool “Crossroad” and its development in recent years

ISHIDA Kimi (Yokohama National University, College of Education), Moderator

LEE FUHSING (JSPS・Ibaraki University), Presenting Author

MATSUI Kaori (Daido University, college of general education), Presenting Author

KISHI Makiko (Meiji University, School of Global Japanese Studies), Discussant

Language: Japanese

言説分析と社会的課題—三人連句読みつなぎ(3)

企画・分析者1：川野健治（立命館大学）

企画・分析者2：八ッ塚一郎（熊本大学）

企画・分析者3：岡部大祐（順天堂大学）

企画趣旨

本企画は、2021年度から継続している「言説分析と社会的課題—三人連句読みつなぎ」と題して行ってきた、言説分析のシンポジウムの最終章となる。後述するように、本企画に連なる過去のシンポジウムでは、薬物乱用、いじめ、自殺をはじめとする、いわゆる社会病理とも呼ばれる事象をテーマとして言説分析の可能性を探究してきた。本年度は企画最終章として、多くの社会病理にも通底する要素と考えられる「コミュニケーション」をめぐる言説群をテーマとしてこれを行う。「コミュニケーション」は、人を癒し、救い、生かすものであり、また、人を困惑させ、悩ませ、時に命を奪うものでもある。さらには「コミュニケーション」言説そのものが病的な様相を呈しているとも見ることができよう。

本企画の背景をごく手短かに示せば、その源流は2019年度から2021年度までの3回にわたって開催した「言説分析と社会的課題—三人三様よみ比べ」である。「句会」になぞらえ共通の分析材料を「お題」として設定、専門も背景も異なる3人が、それぞれの関心と方法に基づいて分析を行う。当日お互いが分析を披露し合うとともに、フロアも加わって意見を出し合い、その「俳味」を批評しつつ、方法としての洗練を目指してきた。分析者、フロアを交えた3回の連続セッションで示された多声的な「よみ」は、言説分析が社会病理とされる問題にどのような知をもたらしうるのか、方法論上どのような困難を有するのかといった問いを分析者（そしてフロア）に提起するものとなったと振り返る。

しかし、本企画のメタファーである俳句は、単独の句が他の句との連関の中で生み出される多層的な意味の生成があることが、限られた字数による表現の制限があるにも関わらずその豊かさを担保しているといえよう。言説分析研究の近年の動向においても、単独のテキストではなく、言説間の連なり、間テキスト性を射程に含めた分析が要請されるに至っている。このような言説分析研究の流れを踏まえた上で、本企画が提示する新たなイメージは「連句」である。前年度抄録から引用すれば、「連句とは、詠者が読んだ最初の句に対して、その情景から次の句を連ねていく文芸である。最初の句を発句、第二句以下を付句、付句をつけることを付合などと呼ぶ<中略>現代の読み手が付句を連ねていくとき、この付合の手法の多様さと連なる句の響き合いに俳諧を感じる」とされる。前年度のシンポジウムでは、文部科学省による「教師のバトン」の企画を分析材料（発句）とし、そこから派生するテキストを分析者が選び、教育現場をめぐる言説間の連関性を読み解くことを試みた。本年度も同様に、3名の登壇者がそれぞれの視点と手法で発句に連なる付句を言説分析としてよみ、そのよみもまた新たな付句として提示していく。この付句が、既存の流通する言説群に対して新たな共鳴を生んでいく、あるいは不協和音となることもあろう。加えて、本年度は一連の「句会」の総括として、3回の連句的分析からそれぞれの分析者が得た洞察、質的心理学

研究や社会的課題についてもつ潜在力も併せて議論できればと考えている。

今回も、具体的な分析のテキストはシンポジウム当日にご披露する予定である。セッションでは、3名の登壇者が見出した間テキスト連鎖を披露し、これまでの企画と同様に、フロアと共にテキストの読みの可能性を探索する。分析にあたり、分析者の立場性を明らかにしておくことは、質的研究の方法論上も意味があると思われるため、これまでと同様に3人の分析者の基本的なスタンスを簡単に紹介しておく。

分析者1の川野は、近年はメンタルヘルス、特に自殺にかかる研究に従事してきた。必要に応じて、言説分析を選択してきたのであり、特定のスタンスがあるわけではない。に応じて、言説分析を選択してきたのであり、特定のスタンスがあるわけではない。2023年度はまずマルチモーダルな分析視点をとり、発句であるチラシでのアドレスと内容を制御する姿勢と、期待しなかった連句の方向「教師の気持ちを語る」への展開を指摘した。ただし、さらに「背景の理由」へと広がったことで連句はトラウマケアに擬え得る構造をもち、集合的主体性を編みなおせば、これらの言説が現場への支援となる可能性を提示した。

分析者2の八ッ塚は、集団力学を専攻し、広義の社会構成主義を理論的基盤としている。パーカーの「ラディカル質的心理学」を糸口に、アクションリサーチとしての言説分析を模索、近年は「いじめ」など教育問題の検討を続けている。2023年度は、「教師のバトン」言説の連鎖に古代歌謡に似た呪術的・詠嘆的な語り口の存在を指摘し、その構造と影響を分析した。そのうえで、発信者の意図やアイテムの含意をむしろ拡張し、メッセージを多重化することで現場を鼓舞する、前向きな言説実践の可能性を提案した。

分析者3の岡部は、社会言語学や社会心理学のディスコース研究の影響下で、主にがんにまつわるディスコース分析を行ってきた。2023年度は、分析テキスト内に顕著に観察できる反復構造に注目し、直近のコンテキストから離れたマスターナラティブが喚起され、「不遇の教員＝現場の声＝本物」という等式的構造が構築されていく過程を分析した。発句のメッセージがわかりやすい形で喚起するコンテキスト「ではなく」、「役所・管理／現場」や「(悪い) 権力／非抑圧者」という「わかりやすい」コンテキストを現前させ、教育以外でも観察される特定の声の特権化されていく事例として考察した。

Discourse analysis and social problems:

Three types of intertextuality inspired by "Renku" (Japanese poetic dialogue) 3.

Kenji Kawano (Ritsumeikan University), Presenting Author

Ichiro Yatsuzuka (Kumamoto University), Presenting Author

Daisuke Okabe (Juntendo University), Moderator, Presenting Author

Language: Japanese

アロマセラピー実践の可能性

ー治療的効用論を越えてー

企画・司会： 榎田 美雄（摂南大学現代社会学部）

話題提供： 榎田 美雄（摂南大学現代社会学部）

話題提供： 畑 亜紀子（国立病院機構京都医療センター）

話題提供： 石井 友恵（早稲田大学大学院人間科学研究科）

首藤 真由美（早稲田大学大学院人間科学研究科）

辻内 琢也（早稲田大学人間科学学術院）

指定討論： 余語 琢磨（早稲田大学人間科学学術院）

企画趣旨

アロマセラピーは、日本の「補完代替医療」の中で最もよく実施されているものの一つである。本シンポジウムは、この「アロマセラピー実践」の社会的意味をよりよく確認するために、非医学的（非治療論的）観点からの評価をも積極的に試みようとするものである。

第一報告（榎田報告）では、アロマセラピーを実施する「施術者側」に注目して、「アロマセラピー実践がどのような意味を持つものなのか」、という検討を行う。

第二報告（畑報告）では、アロマセラピーの利用者が、施術から直接的な身体的安寧を得ること以上の利益を得ている可能性に注目する。とりわけ嗅覚の刺激で過去の記憶が鮮明に蘇る「プルースト現象」が、利用者の生活環境を変えている側面を検討する。

第三報告（石井報告）では、アロマセラピーがもたらす「共有体験」（セラピーの効用は、施術者と利用者の二者関係の外側に及び、利用者の死後にも影響しうる等々）に注目する。3報告からアロマセラピー実践が時空間的に巨大な広がりを持ち得ることを確認したい。

話題提供1：施術者の願望充足の観点からみたアロマセラピー（榎田美雄）

榎田の前任校は関西の看護単科大学であり、榎田は、選択科目「健康とビジネス」の担当者であった。この科目では「アロマセラピスト」という生き方が、看護師のセカンドキャリアの候補であるという立場で授業が組み立てられていたが、実際に、多くの看護師がアロマセラピストになっている。そこで、元看護師のアロマセラピスト3名にインタビューを行った。本報告のテーマは、アロマセラピーが、その施術者側において、どのような意味を持ち得るものなのか、という点である。結果として、「より看護師らしくなるために、アロマセラピストになった」という言説(A)や「定年退職後の仕事としてアロマセラピストを選んだが、各施術と施術の間に30分間の時間間隔を置くことで、利用者の語りを十分に引き出すことができ、看護師時代よりも満足している」という言説(B)を入手することができた。また諸事例から、老年社会学における「段階的撤退論」が応用可能であることも判明した。

話題提供2：アロマセラピーで使用する精油の香りで喚起された記憶をきっかけに精神的苦痛の軽減が図れた2症例の報告（畑 亜紀子）

本症例では緩和ケア病棟で植物の自然な香りを抽出した精油を使用した穏やかなマッサージ様の施術であるアロマセラピーを行っていた。アロマセラピーは身体的安寧を図れる

事に加え、語りの時間と場を提供する機会になる事が多く⁽¹⁾、香りによる過去の記憶の喚起により、会話がさらに活発になり語りが深化していく機会にもしばしば遭遇する。嗅覚の刺激で過去の記憶が鮮明に蘇る事はプルースト現象と呼ばれ、その際懐かしさが伴う事も知られている。人は懐かしさを感じる時、人生の意味付けを行ったり自尊心が高まったりする事に加え、現実のつらさが軽減され、過去のつらい記憶がポジティブに変化されるなどの報告もある。そのため、終末期患者が抱える精神的苦痛、人生や存在の意味を問うスピリチュアルな苦痛を軽減できる可能性があると考ええる。

今回アロマセラピー中のプルースト現象により、患者の人生で大切にしていた事を再確認したり、秘めていた人生の苦労を開示出来たりした事により、苦痛の軽減を図る関りが出来た2症例を報告する。

(1) 畑 亜紀子. 緩和ケア病棟におけるアロマセラピストの役割. 2015. 病院図書館 35 (1) : 9-14.

話題提供 3 : 緩和ケアの現場におけるアロマトリートメントの「共有体験」 (石井 友恵, 首藤 真由美, 辻内 琢也)

緩和ケアの現場では、主に病室や患者の居室でアロマセラピーが行われる。アロマセラピー実施時には患者とアロマセラピストの二者だけでなく、家族や医療スタッフが居合わせる場合がある。

発表者はこれまで、アロマセラピーが施術を受ける患者以外の周囲の人々も含めて、どのような効用をもたらすか検証した。患者とその周囲の人を対象とした参与観察およびインタビュー調査では、患者の家族や医療スタッフも精油の香りや施術の心地よさを間接的に享受したり、残り香や患者の表情の変化からアロマセラピーの余韻を感じたりすることが示唆された。これらを、アロマセラピーの「共有体験 (石井, 大園, 小野, 2021)」と位置づけ、アロマセラピーの効用は患者・アロマセラピストの二者を超え、周囲の人々にも広がると考えられた。また、患者は選んだ香りに名前を付けて家族に印象付けようとしたり、香りに自らの存在を委ねようとしたりすることで、香りを介した記憶の共有を試みた可能性が示唆された。本発表では、これらについて事例とともに紹介する。

Possibilities for Aromatherapy: Beyond the medical benefits debate

Yoshio KASHIDA (Setsunan University), Moderator

Yoshio KASHIDA (Setsunan University), Presenting Author

Akiko HATA (National Hospital Organization Kyoto Medical Center)

Tomoe ISHII (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

Mayumi SHUDO (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

Takuya TSUJIUCHI (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

Takuma YOGO (Faculty of Human Sciences, Waseda University), Discussant

Language: Japanese

メディア芸術作品のマルチモーダル投射論

企 画： 阿部 廣二（東京都立大学人文社会学部）

話題提供： 細馬 宏通（早稲田大学文化構想学部）

話題提供： 高梨 克也（滋賀県立大学人間文化学部）

話題提供： 阿部 廣二（東京都立大学人文社会学部）

企画趣旨

映画やアニメなどは映像中心、音楽は聴覚中心というように、表現メディアは異なるものの、ある部分までの内容や展開から後続部分について視聴者に予測させ、その予測を利用して新たな効果を生み出すという仕組みが用いられているという点は共通している。本シンポジウムではこうした進行中の出来事に対するリアルタイムでの予測を生み出す仕組みのことを会話分析に倣って「投射 projection」と呼ぶ。

日常会話における投射は、例えば発話中のある表現や文法などからその発話が「あとのぐらいで完結するか」が予測でき、それによって円滑な順番交替が可能になるというように、受け手による予測がなるべくうまくいくようにデザインされていることが多い。これに対して、メディア芸術作品に見られる投射のしくみは、後続部分に対する視聴者の興味や集中力を高めるだけでなく、こうして生みだされた予測を「裏切る」ことによって効果を生み出すという方向でも用いられている。

本シンポジウムは、相互行為の微視的分析を専門としている登壇者が、対象として、メディア芸術作品を取り上げることによって、日常行動と芸術作品との間の共通点と相違点の両方に目を向けた議論を展開することを目指している。

話題提供 1：繰り返し、予期と裏切り –G. W. グリフィス『Lonely Villa』 (1909) を捉え直す–（細馬宏通）

1895 年のリュミエールの『工場の出口』以来、映画はさまざまな形で、繰り返しを用いてきた。とりわけ、複数のショットが連鎖するようになってからは、ショット長、各カットにおける構図、人物のフレームへの出入り、動きのタイミングなど、さまざまなアスペクトにおいて、繰り返しと変異が埋め込まれてきた。あるアスペクトにおいて複数のショットで同じことが繰り返されようとするとき、観客は知らず知らずのうちにその繰り返しの始まりに注意を惹かれ、前のショットにおける人物や事物の動きから、次のショットにおけるできごとの内容やタイミングを予期する。一方、作り手は、観客の注意を引きつけながら、あるときは繰り返し、あるときは観客の予期を途中から裏切ることによって、笑いや驚きを生み、さらなる注意を惹く。こうした映画の諸相を考えるべく、この発表ではサイレント期に活躍した G. W. グリフィスの『Lonely Village』を取り上げ、この作品のどのようなア

スペクトルにおいて、繰り返しと予期、裏切りが顕在化するかを考える。

話題提供2：ポップミュージックにおける視点の投射と裏切り（高梨克也）

多くのポップスの歌詞ではさまざまな描写が作者＝歌手の視点から展開されていく。そのため、歌が進むにつれて、聴き手はある種の情景の展開をイメージするよう誘われるが、こうしたイメージの展開は常に聴き手の予想通りに進むわけではもちろんない。この点について、本話題提供では、下田逸郎「雪だより」、井上陽水「白い一日」などを対象として、歌詞の文法構造から生み出される時制に関する投射（日本語従属節の従属度に関する南不二男(1974)のモデルに基づく）が後続部分において裏切られることによって宙づり感が生みだされ、それによって「作者＝歌手」が立っていた視点とその視点からの情景内の焦点要素に関する再イメージ化が聴き手に要請されるのではないかという点を論じる。

こうした特徴は言語という線状的に展開するメディアを用いている小説などにもある程度の部分までは当てはまるものの、歌詞は短く、また音楽に乗って進んでいくという特徴も持つ。そこで、歌は通常の会話よりも発話の進行速度が遅いため、その分通常の会話よりも「過剰」な予測を生みやすいという性質があり、この点がメロディの音楽的展開によってさらに促進されているのではないかという観点からの分析も行いたい。

話題提供3：ゲーム「クロノ・トリガー」における未来の理解とその仕掛け（阿部廣二）

本報告では、ゲーム内における「未来」の理解可能性について、ゲーム「クロノ・トリガー」を事例として考察を試みる。具体的には、まず未来の理解を作り出す仕掛けとして、ゲーム内に「接続デバイス」および「切断デバイス」が配置されていることを示す。これらのデバイスは、キャラクターおよびプレイヤー両方に対して、ゲーム内の空間的同一性と時間による差異を理解可能にする。クロノ・トリガーにおいて、キャラクターたちは、ある出来事を通して崩壊した未来に到着する。この未来には、現在と未来の空間的同一性を示す接続デバイスがなく、キャラクターたちはそこが自分たちの星の未来であることを理解できない。事実、あるキャラクターは、到着した未来が自分たちの現在とあまりにかけ離れていることから、その場が他ならぬ自分たちの星の未来であるにもかかわらず、「まるで別の星に来ちゃったみたいだね。」と、違う星に来てしまった可能性を仄めかし、周辺の探索を開始する。すなわち、プレイヤーに対して、降り立った地が「違う星」であることが仄めかされることで、キャラクターたちが今後行う振る舞いは「違う星の探索」であることが投射されるといえる。しかし、キャラクターたちが過去に起きた厄災の映像を閲覧すること（接続デバイス）で、これまでのプレイヤーに投射されていた「違う星」の部分が裏切られ、キャラクターたちが探索していたのは他ならぬ自分たちの星の未来であることが示される。一方、時を超える「ゲート」という切断デバイスや、そのゲートを用いて未来に行く前に過去に行っているという文脈情報から、プレイヤーには到着した地がキャラクターたちの未来であることが理解できる可能性もあるだろう。したがって、キャラクターとプレイヤーの現在地の理解がズレる可能性もあるといえる。こうしたズレはゲーム内に特有の緊張感を導入するように思われる。以上の分析を題材にして、キャラクター側の理解と観察者であるプレイヤーの理解、およびそのズレの効果について議論を行いたい。

「土地の力」を感じる

ーショートビデオエスノグラフィーの試みー

企画・話題提供： 村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

企画・司会・話題提供：伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

話題提供： 大城凌子（名桜大学人間健康学部看護学科）

話題提供： 河野暁子（岩手県立大学宮古短期大学部・
立命館大学大学院）

話題提供： 薛海升（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供： 曾谷美華（京都大学大学院人間環境学研究科）

話題提供： 張亦瑾（馨思クリニック）

企画趣旨

企画者は、東日本大震災以後、それぞれの土地に根差した力が復興を支えていることを実感し、「土地の力」と名づけた。近代化に伴い人類は土着を喪失し、心理学もそれを排除し人類を抽象化してきたと言える。分離独立した個人でなく、自然・文化・歴史の中に含まれる人々をホリスティックに描き出す質的心理学の可能性に期待し、過去6年にわたり、「土地の力」を鍵概念にしたシンポジウムを開催してきた。「土地の力」を言語のみで定義するには限界を感じ、映画や文学などアートにも眼を向けてきた。今回は、メンバーが「土地の力」を感じる場面を切り取ったショートビデオをポリフォニックに再構成したものを提示することで、参加者との共有を図ろうとする試みである。「土地の力」の概念とともに、新たな研究方法についての議論を重ねたい。

話題提供1：離れがたい土地、そしていずれ土の一部になる（伊藤哲司）

子どもたちが成長し都会へ出ていっても、最後まで山中の田舎暮らしを貫いた祖母。半世紀以上前に土葬された祖母らの墓も、まもなく墓じまいになる。祖母がその土地を離れがたく一人で留まったのはなぜなのか。文字通り土の一部になった祖母に想いを馳せる。

話題提供2：古酒を育てる沖縄の風土と受け継がれる技（大城凌子）

シャム王国（タイ）との交易から生まれた蒸留酒「泡盛」を造る黒麹菌の独自性を生み出した沖縄の風土と「仕次ぎ」の文化。技に込められた想いに土地とのつながりを映す。

話題提供3：岩手県気仙地域における土着とは（河野暁子）

幾度も災厄を経験してきた岩手県気仙地域では、民俗芸能や祭り、お茶っこ等の慣習が根

付いている。これらは風土の影響を受けながら、地域で継承されてきた。東日本大震災後には、このような土着の文化が地域をつないでいた。その一部を紹介する。

話題提供 4：国境を渡ると共に変化する日本のイメージ（薛海升）

中国人である発表者が、日本の土地を踏み始めてから、この国に関するイメージをどのように構築してきたのかを、ビデオを通して表現する。それは、日本で暮らすことを通して得た身体感覚を用いて、既存の日本像を少しずつ修正していくプロセスである。

話題提供 5：中国重慶における土地とのつながり（曾谷美華）

「山城」という異名を持つ中国の都市、重慶。起伏の激しい土地とのつながりから、人々は様々な試みを通して生活を豊かにしてきた。その暮らしの一部をとらえる。

話題提供 6：平和を望むための軍事訓練（張亦瑾）

台湾有事の懸念が高まる中、多くの市民が自費で「黒熊学院」という民間団体の軍事訓練を受けている。攻撃の技ではなく、情報リテラシー、全国民による防衛や避難方法を学びたいなど、台湾人の想いを伝える。

話題提供 7：ボリクア、土地とのつながりを取り戻す（村本邦子）

「ボリクア（プエルトリコ）」では、先住民のタイノ、アフリカ、スペインという3つの根を持つ独自のアイデンティティと文化を構築してきた。ヒップホップ音楽が土地とのつながりを回復することで脱植民地化を目指そうとするワンシーンを切り取る。

Feeling "the Power of the Land"

A trial at short video ethnography

MURAMOTO Kuniko (Ritsumeikan University), Organizer, Presenting Author

ITO Tetsuji (Ibaraki University), Organizer, Moderator, Presenting Author

OSHIRO Ryoko (Meio University), Presenting Author

KONO Akiko (Iwate Prefectural University, Ritsumeikan University), Presenting Author

ZHANG Yijin (Ritsumeikan University), Presenting Author

XUE Haisheng (University of Tokyo), Presenting Author

SOTANI Mika (Kyoto University), Presenting Author

Language: Japanese

特別支援教育を「あみなおす」ための方法論

ー学びの実践×ニューマテリアリズム×現象学ー

企 画・指定討論： 海老田大五朗（新潟青陵大学）

司 会・指定討論： 横山草介（東京都市大学）

話題提供： 引地達也（フェリス女学院大学）

話題提供： 楠見友輔（信州大学）

話題提供： 呉文慧（田園調布学園大学）

「あみなおす」ための方法とは

日本質的心理学会第21回大会の大会テーマは「あむ、あまれる、あみなおす」と掲げられ、従来の心理学の「人間の主体性を個人に閉じたものとして考え」、閉じた見方への反省が促されている。こうした本学会の提案に対してはおおむね同意する一方で、問われてしかるべきは、人びとの「あむ、あまれる、あみなおす」を明らかにする研究方法論ではないだろうか。私たちはどのような研究方法によって、「あむ、あまれる、あみなおす」実践を明らかにすることができるのか。あるいはこのような方法論を問うということ自体が、どこか誤った方向づけなのであるか。さらにいえば、「あむ、あまれる、あみなおす」実践は、研究者の問いである以前に、実践にかかわる人びとたちの問いでもあるはずである。

そこで本シンポジウムでは、研究対象領域を特別支援教育的な実践に絞り、学びの実践を報告しつつ、研究方法論についての主張をぶつけ合うことで、学びをあむ、学びがあまれる、学びをあみなおす実践を明らかにするための方法論を提案することを目的とする。

話題提供1：みんなの大学校における学びの実践（引地達也）

みんなの大学校とは、各種障がいのある方や疾患等で支援が必要な方のためのウェブ上を基本とした「学びの場」である。18歳以上の方で障害者手帳を所持する人もそうでない人も、「学びたい」気持ちのある人が入学可能である。国が行う福祉サービス事業でもなく、公的な教育事業ではないが、現代の支援が必要な方の学びたいというニーズを研究し、新しい学びの形を実践する中で、生まれた新しい学びの形である。

みんなの大学校における提供する学びは、「高等」教育機関として、ケアの思想を備えた深く広い教養を目指している。ウェブ上でつながり、学び、時にはスクーリングで交流をしながら、教員と学生、スタッフやボランティアが交じり合いながら、共生社会における「インクルーシブ」な学びを実現している。

今回は、みんなの大学校における学びの実践を報告することで、学びの「あみなおし」を明らかにするための方法論的議論の基盤を提供する。

話題提供 2 : 物と人の対称性への注目 : ニューマテリアリズムから (楠見友輔)

マイノリティを通して見えてくる社会の抑圧の問題は、多くの質的研究者が取り組んでいる重要なトピックの一つである。私も、知的障害のある子どもの排除の問題に関心を持っており、その問題をどのように解決するかについて検討してきた。これまで質的研究者は、マイノリティが直面している局所的で複雑な事実に向けるために、声、言説、物語、アイデンティティなどに注目してきた。しかし、最近私は、これらのデータが含意する人間中心主義が、マイノリティへの抑圧をむしろ再生産している恐れがあると考えようになっている。本シンポジウムでは、社会における差別や不平等を解消するための方法として、伝統的な質的データが持つ限界を指摘する。その上で、現在私が行っている「教材」に関する研究を紹介しながら、物と人を対称的に捉えるニューマテリアリズムを用いて、人間中心主義のデータを再考することを試みる。

話題提供 3 : 特別支援教育におけるポスト／現象学の展望 (呉文慧)

本報告では特に自閉スペクトラム症 (以下、ASD) 教育実践に焦点を当て、教師が彼／彼女らのコミュニケーションにおいて発揮した実践知を探究する。ASD のある子どもは定型発達の「我々」に比して異質な経験構造を有する「他者」として表象されることが多い。こうした「他者」とのコミュニケーションは、それを成立させている実践者自身にもはっきり自覚できないような前意識的な領域、つまり〈身体〉の次元で行われることが多い。そこで本報告では〈身体〉を扱う現象学が、多様な「他者」と関わる特別支援教育において重要な方法論であると提起する。さらに本報告では特別支援教育、とりわけ特定のモノにこだわることの多い ASD 教育において、モノが子どもや教師に媒介し、彼／彼女の〈身体〉をモノと人間とのハイブリッドを創発するという考えに着目する。そしてこのようなハイブリッドな存在様態を探究するポスト現象学が、今後重要になると主張する。

Methodology for 'reassembling' special needs education

Learning practices x New Materialism x Phenomenology

Daigoro Ebita (NIIGATA SEIRYO University), Planner, Discussant

Tatsuya Hikichi (FERRIS University), Presenting Author

Yusuke Kusumi (SHINSHU University), Presenting Author

Bunkei Kure (DEN-EN CHOFU University), Presenting Author

Sosuke Yokoyama (TOKYO CITY University), Moderator, Discussant

Language: Japanese

一般研究発表(ポスター)

P19A-1 なぜ日本の保育者はすべての子どもに「当番活動」を課すのか

加藤 望（名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部）・**肥田 武**（一宮研伸大学 看護学部）・
内田 千春（東洋大学 ライフデザイン学部）・**ポーター 倫子**（北陸学院大学 教育学部）・
中坪 史典（広島大学大学院 人間社会科学部）

日本の保育・幼児教育実践において、園児は給食の配膳や掃除、生き物の世話などの「当番活動」を行う。本研究では、日本の幼稚園で自明のこととして行われているこうした「当番活動」について、なぜ保育者はすべての子どもに「当番活動」を課すのか、その理由と方法を明らかにすることで、教育的意義を検討する。

研究方法論は、多声的ビジュアル・エスノグラフィー（Tobin et al. 1989）である。日本のある幼稚園で撮影された飼育当番活動の映像を、フォーカス・グループ・インタビュー時に視聴することで、話のきっかけとした。収集した音声データは文字起こし後、Steps for Coding and Theorization（大谷 2019）にて分析した。

結果として、日本の保育者は入念なお膳立てをして「当番活動」を実施する場合と、あえて葛藤が生じるような状況を作って実施する場合とがあることがわかった。

P19A-2 子どもの「声」を探究する保育カンファレンスの検討～2 歳児のエピソードの分析を通して～

上山 瑠津子（福山市立大学教育学部）・**古和 友子**（作陽短期大学音楽学科幼児教育専攻）

保育現場では、乳幼児期の子どもの生活や遊びの姿をエピソードや写真に記録し、保育者同士で語り合う保育カンファレンスが行われ、子どもの姿から実践を改善し、保育の質の向上が図られている。保育カンファレンスでは、子どもの姿、思い、欲求などが子どもの「声」として保育者によって様々に語られ、吟味され、保育者は子どもの「声」から発見や学びを得ていく。本研究では、私立保育園A園で実施された0～2歳児クラスのエピソードを用いた保育カンファレンス映像の分析を通して、保育者は子どもの姿をどのように語り、保育者同士で共有しながら、次の保育の構想や展開につなげていくのかについて検討する。そして、子どもの「声」を探究する保育者の協働的な実践知の生成過程について考察する。

P19A-3 四川大地震被災者の喪失体験によって受けた傷と心の成長の共存—旧北川県城における被災者に着目して—

崔 月瀬（茨城大学 人文社会科学研究科）

2008年5月12日14時28分（現地時間）に、中国四川省でマグニチュード8.0の四川大地震が発生した。この地震は多くの命を奪い、甚大な被害をもたらした。当時、全国民が被災地に深い関心を寄せていた。私も「被害の大きかった地域の被災者は、どのような思いでその後を過ごし、今どのようにしているのだろうか」とか「被災者はどのように立ち直り、新たな生活を築いているのだろうか」といったことに強い関心を抱いていた。このようなことから、国家から発信される大きな物語の中で、各被災者の小さな物語に耳を傾け、彼らの現状や心の成長の様相を明らかにすることを研究の目的とした。私は、被災者の心の成長を、地震を経験してから15年の間に生じたさまざまな経験や状況に焦点を当てて調査し、心の成長に関するモデル図を作成する予定である。以上のような研究を通じて、被災者の心の成長と現状を深く理解し、共有していきたいと考えている。

P19A-4 大熊町フィールドワーク研究(2)：原子力災害によって長期避難となった女性の心の動き

**鈴木 祐子（東京医療学院大学 保健医療学部）・日高 友郎（福島県立医科大学 医学部）・
本間(照井) 稔宏（福島県立医科大学 医学部）・春日 秀朗（福島県立医科大学 医学部）・
各務 竹康（福島県立医科大学 医学部）・川本 静香（京都精華大学 共通教育機構）・
サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）**

2011年3月11日に発生した東日本大震災とその後の福島第一原子力発電所（福島原発）事故により、突然の避難を余儀なくされ、その後長期にわたり地元へ戻ることなく、福島県内の他の自治体で生活をしている人々が多くいる。本研究はこのような長期避難者のうち、女性に注目し、長期避難がどのように意味づけられているのか明らかにする。対象者は、福島原発が立地している福島県大熊町の住民であり、家庭を持つ一方で、住み慣れた我が家やコミュニティを喪失し、長期的な展望の不在に見舞われている60代～70代の3名の女性であった。複数回の半構造化インタビューを通じ、3名の心理的背景、社会的背景を過去・現在・未来を時間の流れに沿って整理し、女性の立場での心の動きを分析することで、女性にとっての長期避難の意味づけを検証した。結果から、被災者女性の避難先での人生を当事者ニーズに沿って支援する知見へと発展させたい。

P19A-5 震災からの地域復興を支える関係人口の創出条件に関する研究—福島県檜葉町に関わる人々のライフストーリーに着目して—

劉 毓禧（茨城大学大学院 人文社会科学研究科）

福島県檜葉町は、東日本大震災後に全町避難を経験した町のひとつである。そこにある一般社団法人ならはみらいと大学の連携事業では、各大学がチームでの町内視察や、事前学習、インタビュー調査を通して、檜葉町の現状や課題を把握し、檜葉町だからこそできることを提案することを目指している。筆者が在学している茨城大学でも、「茨城大学檜葉チーム」を組み、檜葉町に関わってきた。本研究では、この町に深く関わり、地域活動や交流を通じて継続的、かつ多様な関係を持ちながら、地域活性化に貢献している一人一人の語りに耳を傾け、ライフストーリーインタビューを行った。檜葉町とのかかわりは語り手のライフストーリーの中でどのように語られるのか、そしてどのように意味づけられているのか。語られたストーリーから、地域復興のために関係人口の創出に必要な条件を明らかにし、地域との関係構築の方法について考察する。

P19A-6 語りの形式の違いによるナラティブの時間の特徴—東日本大震災の被災者の語りを例に—

鈴木 ミチル（九州大学 共創学部）・杉山 高志（九州大学 大学院人間環境学研究院）・安斎 聡子（青山学院大学 コミュニティ人間科学部）・佐藤 由紀（玉川大学 リベラルアーツ学部）・杉浦 彰子（JA 共済総合研究所）・宮前 良平（福山市立大学 都市経営学部）・山田 修司（東日本大震災・原子力災害伝承館）・静間 健人（東日本大震災・原子力災害伝承館）

本研究は、東日本大震災の被災者の語りの時間に注目したものである。具体的には、福島県双葉町で被災し現在は双葉町に帰還して生活している A さんのナラティブを対象に分析した。本研究では、A さんが筆者らに座学形式で行った語り部活動のナラティブと、A さんが震災前に暮らしていた双葉町 B 地区を筆者らとまちあるきした時のナラティブの二種類のデータを収集し、それぞれのナラティブに内在する時間を分析した。その結果、座学形式の語り部活動のナラティブでは、発災直後の A さんの行動や周囲の状況について中心的に語られていた。一方で、まちあるき形式のナラティブでは、A さんが子ども時代に遊んでいたエピソードや B 地区の生活文化に関する説明といった発災前の語り、発災直後に B 地区で鳴り響いた防災無線や消防屯所についての語り、復興過程で建設した B 地区の神社や石碑に込めた語りなど多様な時間の語りが混在していた。

P19A-7 ソーシャルメディアにおける「境界知能」のディスコース ——名づけをとりいれる人の語りの分析を中心に

中島 由宇（東海大学 文化社会学部）・櫻井 未央（杏林大学 保健学部）

「境界知能」とは「一般的な知的能力の軽い欠陥」とひとまず定義される（Fernell & Gillberg, 2020）ものの、定義や位置づけに不明瞭さを残している（Wieland & Zitman, 2016）。心理発達や社会生活のリスクや支援の必要性が注目されつつある（Martínez-Leal et al., 2020）が、我が国では非行・犯罪の問題や特定のトレーニング技法と関連づけられることが目立ち、新たなレッテルとして差別的に用いられる例も見受けられ、慎重な検討が必要な段階にある（平田・奥住, 2023）。本研究では、「境界知能」のような精神医学的概念の、名づけをとりいれた当事者を含めた社会的構築性に注目し、「境界知能」がどのように語られているのか、特に自らの名づけとして自発的にとりいれる人にとってどのような意味をもたらしているのか、ソーシャルメディア上の言説を分析して明らかにする。

P19A-8 気づきあいの先にある新しい療育方法の可能性

大内 雅登（発達支援研究所）

自閉症者は、コミュニケーションのあり方に定型発達者とは質的に違いがあるとされている。支援者にとって、違いがあることは半ば常識的に「わかっている」のにも関わらず、自閉症者が何を意図して定型発達者と異なる言動をしているのかに「気づく」ことは難しい。結果的に、定型発達者にとって自然な振る舞いを自閉症者に対して強要してしまうことも少なくない。

本発表では、発達障がい児の支援現場において、徹底した対話姿勢を持ち続けることで、自閉症児の持つ「規範」を周辺者と共有できた事例を紹介する。こうした周辺者が、発達障がい児の言動の理由に「気づく」ことにより、発達障がい児の言動が問題行動とは思われないうものへと変化していくことが見いだせた。発達障がい児が周辺者との関わり方について新たに「気づく」ことができたことから、対話による双方の「気づきあい」の中に新たな支援方法の確立の可能性があると考える。

P19A-9

(発表取り下げ)

P19A-10 精神疾患の親をもつ子どもからみた家族、精神疾患、社会の関係性—家族イメージ法を用いた検討—

岩根 由佳（お茶の水女子大学大学院）・平野 真理（お茶の水女子大学）

精神疾患の親をもつ子どもは、親の症状等に振り回され自分が無くなるイメージを持つ場合や、親との関係性の変化により精神疾患や自らの人生に向き合える場合がある。そうした相互作用の中で生きてきた子どもは、精神疾患を抱える親との簡単には切り離せない関係をどのように捉え、成長しているのか。

本研究では、精神疾患の親に育てられた 20～30 代の子ども 6 名を対象に家族イメージ法を用いて調査を行った。子ども時代と成人した現在の 2 時点を描き、色鉛筆等を用いて各時点に精神疾患や社会のイメージを加えることで、子どもの捉える家族や精神疾患、社会の関係性とその変遷を目で見て分かりやすい形に示した。俯瞰的に示し振り返った結果みえてきた、精神疾患に侵食され社会から孤立していた子ども時代と、精神疾患の影響が弱まり社会に含まれるようになった現在との差異や変遷を考察する。なお本研究は所属大学の倫理審査委員会の承認を得ている。

P19A-11 先天性心疾患患者の自己概念の構造—思春期と青年期に焦点を当てて—

遠藤 晋作（名古屋市立大学 大学院看護学研究科）・上田 敏文（名古屋市立大学 大学院人間文化研究科）

本研究では先天性心疾患患者の自己概念の構造について、思春期と青年期の2時期から明らかにする。20代前半の男性患者1名に、ビジュアル・ナラティブを用いた非構造化面接を行った。病気と自分の関係性を描画してもらい、そこから病気をもった自分、家族や社会の中の自分について語ってもらった。語りをSCATで分析し、理論記述を得た。

自己概念について、中学生時は、病気に対して「自覚に基づいた順守的な自己」をもち、家族では「普通の家族の中にある依存的な自己」、社会では「安定領域を拠り所とした受動的な自己」を認識していた。一方、現在は「病気同一性が内在する進取的自己」をもち、家族では「普通の家族の中にある自立を見据えた自己」、社会では「安定領域を拠り所とした能動的な自己」を認識していた。患者が思春期から自己問題として病気と向き合い、自立を見据えられるように、医療者、家族、社会が連携した支援が求められる。

P19A-12 相談室以外で相談できる場所をつくるには？

竹宮 彩香（愛媛大学大学院 教育学研究科）

現代はユースの対人関係の希薄さが指摘されている。そこで私はユースが好きなことを通じて人とのつながりをつくり、相談的な会話を含む深い関わりが自然に生起する場を構築させることを目的としたアクションリサーチを開始することとした。具体的には、現在、私はA県のNPO法人が主催する、子ども食堂兼飲食店で音楽を中心としたイベントを企画運営している。イベントを通して様々な年齢の人々が集まっており、コミュニケーションを取ることができる場を作ることに成功しつつある。さらにこのイベントでは、段々と参加者の間で相談的な会話も見られている。これまで、居場所づくりを成功させる要因とそのプロセス、さらには相談的な会話が生起するための条件について明らかにした研究は私の知る限りない。本研究は、参加者がイベントの中で相談的な会話に至るまでのプロセスモデルを提案することをねらいとした。今回の発表では、その研究経過を報告する。

P19A-13 女子大学生における友人への援助要請の生起モデルの検討

鎌田 真実（北翔大学大学院 臨床心理学研究科）・入江 智也（北翔大学 教育文化学部 心理カウンセリング学科）

大学生は〈他者の手助けを得たい〉という考えを持ち、〈実際に援助を求める〉という分岐点へ向かうが援助要請をする場合、しない場合があると考えられる。高木（1997）によって大学生の援助要請の生起モデルが作成されているが、実際のプロセスのなかでの具体的なエピソードは明らかになっていない。そこでインタビューをした内容を KJ 法で分類し、援助要請の促進・阻害要因を明らかにすることを目的とする。

P19A-14 「困りごとの認知」は何をもたらしたか ―聾学校卒業生の語りからみる自立活動授業実践の検討―

西垣 正展（立命館大学大学院 人間科学研究科）

聴覚障害のある生徒は社会的障壁から生じる困難（困りごと）について認知しにくい状況がある。聾学校中学部の自立活動の授業で、「当事者研究」の視点を援用して自身が体験した困りごとについて話し合い、問題の背景や構造について認知を深めた。本研究では、卒業生（社会人）1名に当時の授業映像を見てもらい、中学部の時に受けた授業がその後の自身の意識にどのように作用したかを半構造化インタビューで語ってもらった。その内容について SCAT（大谷, 2008）を用いて、自立活動の授業での学びが対象者にとって卒業後どのように作用していたかを分析し、社会的障壁から生じる困難に対する態度（障害認識）の形成に向けて取り組んだ自立活動授業実践の有用性や課題について検討する。本研究の実施にあたり、実践校の校長より承諾を得ている。また、対象者には文面と口頭で研究の目的、録画の許可等について説明し、参加同意を書面で得ている。

P19A-15 ナラティブから考える小児がん経験者のきょうだいの「適応」——Aさんの語りから

早川 真桜子（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科）

小児がんに罹患した子どもの兄姉弟妹（以下、きょうだい）は身の回りに起こるさまざまな変化や沸き起こるさまざまな感情に適応することが求められる。ところで、きょうだいのどのような状態をもって適応とみなすのかは議論の余地があるだろう。「適応」の概念は、学問分野あるいはジャンルによって共通性があると同時に、その見方や適応範囲は多面的である（伊藤，2018）。本研究は、小児がん経験者の姉であるAさんが描いたライフ・ライン図における充足感の回復を、仮に《Aさんにとっての主観的な適応の過程》とみなしたとき、Aさんはいかにその過程を語るのかに着目し、Aさんの中にどのような発達の変化があったのか、スクリプトの中に繰り返し現れる「しょうがない」というナラティブを手掛かりに探索的に検討する。本研究は、お茶の水女子大学人文社会科学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した研究の一部である〔承認番号：2017-51〕。

P19A-16 日常の場が癒しの場になることの意義：ホグシーランドに参加した保護者へのインタビューから

土元 哲平（中京大学 心理学部）・伊東 美智子（神戸常盤大学 保健科学部看護学科）・中坪 史典（広島大学大学院 人間社会科学研究科）・澁谷 雪子（神戸常盤大学 保健科学部医療検査学科）・高松 邦彦（東京工業大学 企画本部）・松浦 由典（ピップ株式会社）

本研究では、ピップ株式会社が主体となってはじめて子育て支援の取り組みであるホグシーランド（以下、HL）の取り組みが、どのような意義を持つのかを探究する。HLとは、キッズパークや子育て施設等にマッサージの施術者が派遣され、子育て中の保護者が子どもを遊ばせながら施術を受けることができるというものである。本研究では、産学連携での実証実験の取り組みとして、神戸常盤大学子育て総合支援施設KITにてHLを開催し、その参加者10名にインタビューを実施した。本研究では、インタビューでの語りを、ナラティブ・アプローチの志向のもとで分析する。最後に、HLが保護者にとって馴染みのある環境において、身体の状態に気づく機会を提供することの実存的・社会的な意義を提案する。

P19A-17 オンライン・コミュニティの共同性とは何か？—ROM 専の視点から

尾石 智美（九州大学大学院 統合新領域学府 ユーザー感性スタディーズ専攻 博士課程）・杉山 高志（九州大学大学院 人間環境学研究院）

現代ではインターネット空間と対面空間が交錯し、人々の生活は両空間で営まれるようになっている。その中でも、オンライン・コミュニティ（ONC）は、共通の興味や価値観を持つ人々が集まり、時間や空間の制約を超えてつながる場となっている。本調査では、日常的に ONC に参加している働く母親の中から、ROM 専（Read only member：見てだけの参加者）数名の語りを用いる。なぜ参加をしているのか、実生活にどのような影響があるのか、対面のコミュニティと比較し、ONC だからこそ経験できたこと、対面にはないが ONC にはあると感じることなどについて尋ね、その特徴を分析した。共働き家庭の増加に伴い働く母親が ONC に期待する役割を探ることは、ソーシャル・サポートやエンパワメントの新たな手段になる可能性がある。本研究は、その新たな手段を明らかにし、働く母親にとっての ONC の意義を考察するものである。

P19A-18 ビデオゲームに親しむ視覚障害者のプレイ経験分析：TEM（複線径路等至性モデリング）を用いて

長谷川 綾音（立命館大学 人間科学研究科）・サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）

現在流通しているビデオゲームの多くは、視覚情報をプレイヤーに伝達することで、体験を成立させている。この点において、ビデオゲームは視覚障害者にとって利用しづらい娯楽メディアであると考えられ、先行研究でも視覚アクセシビリティの遅れが指摘されている。一方で、視覚障害者の中には娯楽としてビデオゲームを選択し、ビデオゲームに長年親しんできた人たちが少なからず存在する。こうした視覚障害者がビデオゲームという娯楽にどのように出会い、どういった困難と対峙し、どのような過程を通じて楽しみを得ているのかといった実態は十分に把握されてこなかった。本報告では、筆者が過去に視覚障害者に対して実施したインタビューのうち、日常的にゲームをプレイしていると回答した 7 名のデータを題材に、TEM（複線径路等至性モデリング）を用いて「視覚障害者がゲームに親しむまでの過程」について分析した結果について報告する。

P19A-19 問題観モデルを用いた生徒指導に関する省察的実践の質的検討① ——中学校教師により構成された問題観モデルの変化プロセスの検討

杉山 陽香（中京大学大学院 心理学研究科臨床発達心理学専攻）・川島 大輔（中京大学心理学部）

明確に定まった指導方法がない中で適切な生徒指導を行っていくために、実践の根幹となる教師の前提や考えである問題観の検討が求められる。この問題観について杉山・川島（2024）では、モデルによる整理を行い、問題観が流動的に変化するものであることを推察した。しかし、その変化プロセスを詳細に追うことはできていない。そこで、本研究は、教師によって構成された問題観モデルの布置から変化プロセスを探索することを目的とした。調査は中学校教師 11 名にモデル構成を含んだ半構造化インタビューを行い、モデル布置の移動の類型化を行った。その結果、モデル布置の移動の類型は〈【粘る】に移動〉、〈【諦める】に移動〉、〈移動が少ない〉、〈移動がない〉の 4 類型に分類された。本研究で構成された問題観モデルは、現場の文脈や個々の教師自身の背景を含み、エピソードや転換点によって移り変わっていく動的な問題観をとらえることが示唆された。

P19A-20 なぜナイチャーの若者が辺野古に座り込むのかー政治活動への参加と政治的発達のプロセス

新原 将義（武蔵大学 教職課程）

名護市辺野古区民らが結成した「命を守る会」（2015 年解散）によって始まった、辺野古新基地建設に反対するキャンプ・シュワブ前での座り込み活動は、2024 年 7 月で 11 年目に入った。近年では高齢化が課題となるこの活動であるが、現在でも現場には少数ながら若者の参加者が散見され、中には継続的に内地から辺野古を訪れ、座り込みに参加する若者も存在する。本研究ではこのような、辺野古での座り込み活動に継続的に関与する内地在住者（ナイチャー）の若者を対象にインタビューを行い、彼ら・彼女らの政治的発達のプロセスに、辺野古での座り込み及びそれを含む沖縄の基地問題を中心とした政治問題についての活動がいかに関連し、位置づけられているのかを検討する。特に、観光や移住、平和教育など多様な契機から関与し始めた沖縄での政治活動が、彼ら・彼女らの「知ることに頼らない成長」の場となっていくプロセスに注目する。

P19A-21 大学進学時の進路選択に求められる自発的学習経験の分析—社会人院生として 学びの場に戻ってきた人の語りをもとに—

近藤 百玲（青山学院大学大学院 教育人間科学研究科）

現代における複雑性の高い問題解決方法として知識創造がある。学習科学研究より、知識創造には具体的な目的・領域固有の深い理解・一人一人の自発的学習が必要だとされている。大学進学時の進路選択は教科の枠を飛び出して自分が知識創造していく分野を決定するプロセスといえるが、必ずしもその自発性は発揮されていない。本研究では、大学進学時は無目的進学をしたが、多様な経験を経て自発的に大学院進学に至った2人に対して進路選択過程に関するインタビューを実施し、対象者が自発的学習に至ったきっかけとしていかなる経験があったのかを詳細に分析する。またこの経験によって大学（院）へ進学すること自体の意味づけがどのように変容したのかを分析し、現実世界で求められる「答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく」問題解決能力の獲得要因を抽出することで、大学進学段階でこれらを獲得するために必要な学習環境について考察する。

P19A-22 人生の育て方を見つけ、自分の人生にワクワクし始めるまでのプロセス

新田 莉生（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）

本研究は、年齢、肩書き、生まれ育った環境等の差異に依らず、自分の人生にワクワクしている人たちの人生径路を描出する。本研究における「ワクワクする人生」とは、自分の特性に向き合い、それを活かす生業を構築し、中長期的に未来に希望を持って生きている状態と定義する。研究対象者の共通項は、既存の職業枠を超えて先例が(殆ど)ない生き方をしていく点である。周囲が期待する「普通」の生き方に何らかの違和感を抱いたことをきっかけに、どうにか自分が納得する道を切り拓き、現在のユニークな生き方に至る。「やりたいことがない」と悩む若者や、夢があっても「現実的でない」と諦める人が少なくない現代で、いかにして自分が「こうしたい」と思う生き方を実現し、長い人生で息長く続けていくことができるのか。本研究は、分野・領域、世代、性別等が異なる4名の人生径路をTEMで描き、人が自分の人生にワクワクし始めるまでの複線径路を描き出す。

P19A-23 バングラデシュ IT 人材のキャリア意識の形成プロセス—— 複線径路等至性モデリング (TEM) による分析

小山 多三代 (立命館大学大学院人間科学研究科)・安田 裕子 (立命館大学総合心理学部)

本研究の目的は、バングラデシュ IT 人材のキャリア意識がどのように形成されていったのかを明らかにすることである。近年、日本は高度外国人材の受入れを拡充するため、入管法の改正により在留期間が無期限の在留資格を整備するなど、高度外国人材の永住を促す政策をとっている。このような中、高度外国人材のキャリア意識を「いかに働くか」に留まらず、「いかに生きるか」という人生の観点から幅広く理解することはますます重要となるだろう。そこで、本研究では、バングラデシュから来日して 10 年以上就業している IT 人材を事例として半構造化インタビューを行い、「複線径路等至性モデリング (TEM)」によるデータ分析を通して、キャリア意識の形成プロセスの解明を試みた。その結果、仕事や家族に対する考え方、宗教的アイデンティティ、来日前から形成されてきた日本観などが、日本で過ごすことへの意味づけに深く結びついていることが示唆された。

P19A-24 公立小学校教員間の協働的な省察的実践プロセス ～授業者である新卒若手教員と観察者であるベテラン先輩教員の二者間の関係性に着目して～

林 直哉 (四日市市立三重小学校)

本研究では、公立小学校における授業づくりにおいて、若手教員と指導的立場の教員との二者による協働が成立せず、若手教員の授業づくりを支援する関係が構築できない現場の実態に問題意識を持った。そこで、授業づくりによる若手教員支援が求められているベテラン教員と新卒若手教員の二者が協働で省察しながら授業をつくりあげていくプロセスを解明することを目的とした。4 月に着任したばかりの新卒小学校教員と小学校校長の経験があるベテラン教員各 1 名の 2 組を研究協力者とし、計 4 回の授業・協働省察の記録を研究対象データとした。二者による 4 回の協働省察場面の音声データ及び半構造化インタビューをもとに、エピソードを抽出し、複線径路等至性モデルによって分析を行った。本研究により、若手教員の授業づくりを支える関係構築への促進及び阻害要因が示され、若手教員に関わる先輩教員の支援のあり方の示唆を得ることができると考えられる。

P19A-25 理科の実験における子どもの科学的知識の構築 —小学3年「磁石の性質」の実験場面における物質の操作と発話に着目して—

庄野 俊平（横浜市立もえぎ野小学校）

本研究では、理科の実験における児童の科学的知識の構築過程について、児童の発話に加えて実験で扱う物質の操作にも着目したマルチモーダルな分析によって明らかにした。首都圏のK小学校3年生理科「磁石の性質」の実験場面の発話プロトコルを作成し、物質の操作の様子、静止画像を発話プロトコルに加えた。発話、操作の画像、ワークシートの児童の描画と記述から科学的知識の構築過程を検討した。その結果、以下の3点が明らかとなった。(1)児童が探索的に物質を操作することで生じる磁石やクリップの動きは、児童のもつ科学的知識の拡張を促す働きをもっていた。また(2)磁石やクリップの動きの背景にある物質の間に働く磁力について児童は比喻を用いて表現していた。最後に(3)児童は操作による物質の動きと他者との対話から自らの科学的知識を吟味し新たな科学的知識を構築していた。

P19A-26 教師の意図（目的）と実践のジレンマを生成する教室談話の構造分析（仮説実験授業の比較調査より）

匠 英一（（有限会社）認知科学研究所）

当研究では教室での談話過程を記録に録り、そこでの教師（K小学教諭とH中学講師）のジレンマとその正当化の働きを言説と媒体（黒板等）との相互行為の調査から明らかにする。そのために「仮説実験授業」の二人の教師の実践を調査し、「ディスコース心理学」（D, Edwards1996 / D, Tannen1993）を応用した「ナラティブ活動理論」（匠 2023）から談話構造を分析した。そこで明らかになったことは、学習の「押し付けしない」という教師の意図（目的）は二人とも同じであったこと。ただし、その教室文化の違いがあり、効果の高いK教諭の授業では、生徒の「何となく〇〇思います」や「いい意見だなあ」等の「吟味モード」の発話が多くみられた。他方のH講師側では生徒の「正答モード」が多く、教師側の「説明モード」を示す「きちんと〇〇と理解」やまとめの発話がジレンマを生んでいることが検証できた。

P19A-27 何がインタビュアーの問いを変えるのか—相互行為としての対話的インタビュー

松尾 純子（千葉県スクールカウンセラー）

インタビュー研究において、設問は研究者がその目的に応じて設定するとされてきた。〈原爆の語り〉の研究は、「原爆」「被爆者」の定義、また「平和」「反戦・反核」「継承」というディスコースを前提として聴き取られている。本研究の目的は、相互行為を通して設問は変化するとし、何がインタビュアーの設問を変えたかを探ることである。方法として、原爆孤児になった対象者に対話的インタビューを行い、問いに対するポジショニングの変化とインタビュアーの問いの変化を分析した。その結果、インタビュアーの前提にない対象者の応答—「原爆」「被爆者」の問いに、ディスコースを用いない I、セルフ・ナラティヴを語らない I が、「放射線の不安」を優生思想で乗り越える I になる—が、問いをオルタナティヴに変えていた。相互行為を通して共有された、定義上「原爆」被害ではない孤児の語りが、インタビュアーにセルフ・ナラティヴを意識させたと考えられる。

P19A-28 リフレクティング・プロセスによって他者の視点を得る

清田 敦彦（京都大学大学院 人間・環境学研究科）・永田 素彦（京都大学大学院 人間・環境学研究科）・谷口 泰子（医療法人清清会 清田クリニック）

本研究は医療、介護の多職種連携による患者支援を目指すアクションリサーチである。症例は 70 歳代の腎不全患者 A で、透析を施行している。リフレクティング・プロセス（RP）という心理療法を応用した会話の場を設定し、家庭内トラブルを起こしている患者 A とその妻、ケアマネジャー、看護師、院長らがこれに参加した。RP では院長と患者 A のグループ（CT）と妻、ケアマネジャー、看護師から成るグループ（AT）とに分け、まず CT が会話し、AT がそれを傾聴し、次に役割を交代するというように、互いの役割を交代しながら会話を進めるという実践を行った。妻がいかに患者 A のことで多大な迷惑を被ったかを患者 A の前で明らかにした。その結果、当初 A は妻の発言を否定したが、その後、A は気づきを認めた。そして高齢者施設の見学を承諾した。RP の実践により、A が他者の視点で状況を捉え直し、妻との距離を置くという解決の端緒が見いだされた。

P19A-29 性格を時間と関係性によって捉える質的研究：—TEMを用いて—

齋藤 優希（トクセン工業株式会社）・サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

本研究では、パーソナリティ尺度という量的研究と回答プロセスのTEM（複線径路・等至性モデリング）という質的研究の融合を目指し、TEMを用いて性格尺度の回答に向かうプロセスを検討した。4人の調査協力者にTIPI-Jに回答してもらい、その回答理由を聞く3回のインタビューを行い、調査協力者に他者と会話をしながら性格テストを3回実施してもらった。自身の性格についてのインタビューからTEM図を作成し分類した結果、一つの回答へ収集していく径路を複線モデル・単線モデルに表し、行動・認識・回答がそれぞれ変化していく様子が可視化された。本研究において明らかになったことは、個人特有の適応の径路と、人生の中で変化し進化する力動的な性格の存在である。TEMを用いて性格を記述することは、オルポートが唱える性格の定義を包括的に捉えるものであると考えられ、パーソナリティ研究において重要な分析方法であるといえる。

P19A-30 支援者の傷つきとはどのような経験か—メタエスノグラフィーによる検討

森 美緒（一橋大学大学院 社会学研究科）・梅井 尚美（常磐大学看護学部，一橋大学大学院社会学研究科）

本研究では「支援者の傷つき」がどのような経験なのかを分析するため、質的研究のメタエスノグラフィー(Nobit & Hare, 1988)を行った。Ciniiで「傷つき」「共感疲労」「バーンアウト」「二次的外傷性ストレス」「感情労働」に関わる質的研究論文を検索し、567本からスクリーニングした14本を対象とした。

職種や領域を問わず、支援者は被支援者と【困難に向き合う中で相互に影響し合う】。支援者自身が直接暴力などの【脅威にさらされる】ことは少ないが、困難な状況にある相手に【共鳴・共感し、巻き込まれる】、【支援の限界と無力感】に直面する、異なる立場や価値観の間で【他者と共有することの難しさ】を感じる、支援の行き詰まりによって【専門性が揺るがされる】ことが、傷つきの中核と考えられた。支援者は【感情の抑圧や回避】や【適応の努力】によって、傷つきの中で生き延びようとしていた。

P19A-31 レジリエンスの関係性要因の探索的検討

平野 真理（お茶の水女子大学）

個人のレジリエンスが発揮されるためには環境要因が重要な役割を果たすことが知られているものの、それらはソーシャルサポートの有無に議論がとどまりやすく、その個人が他者の存在やサポートをどのように体験することが、いかにレジリエンスに寄与し得るのか、に関する知見は乏しい。そこで本研究では25～44歳の成人を対象に「誰かとの関係をとおして、落ち込みや傷つきから立ち直ることができた体験」について記述してもらった585名分のデータについて、ソーシャルサポートの理論枠組みを基にしたテーマ分析を行った。その結果【回復に寄与した関係性要因】として既存の枠組みにあてはまらないネガティブなものも含む要因が見出され、その【寄与プロセス】についても受動的～授与的なものまで拡がりが見られた。さらに【内在化された要因】が時間を経て生じることも見出され、これらを含めてレジリエンスの関係性要因として認識する視点が検討された。

P19A-32 ワークショップ「きもち翻訳」による「しんどさ」の分かち合い——民間セクターにおけるケアの一つとして

南 摩周（早稲田大学大学院 人間科学研究科・任意団体 yorlai.）

実体が曖昧な心身の不調である「しんどさ」は、自身でも言語化しづらく、他者と共有することが難しい。本研究では、「しんどさ」を共有可能な形に表現する営みを「翻訳」と捉え、表現と対話のワークショップ実践を通して、「しんどさ」をめぐる相互行為を探索した。ワークショップでは、まず参加者が「しんどさ」を描画とオノマトペ表現に翻訳したのち、ファシリテーターである筆者と対話することで、表現に込められた「しんどさ」を紐解く共同翻訳を行った。2段階の翻訳の分析にあたっては、会話分析の「行為」・「連鎖」概念を拠り所とし、特徴的な連鎖——「深化連鎖」「誤訳連鎖」など——を発見した。連鎖の連なりにより翻訳は反復され、参加者と筆者は一時的に「しんどさ」を分かち合う関係を築いた。この翻訳を通した「分かち合い」を、多元的ヘルス・ケア・システムにおける民間セクターに位置づけ、新しいケアとしての可能性を考察した。

P19A-33 中国におけるオンライン監査構造にみるレッドラインと遊び

宋 蘇安（東京都市大学大学院 環境情報学研究科）・岡部 大介（東京都市大学 メディア情報学部）

本発表では、中国の短編動画プラットフォーム「抖音(TikTok)」におけるネット民による、社会的、政治的タブーを、連想や暗示、曖昧な隠語といったネタに変換して遊ぶさまを紹介する(例えば TikTok ライブ中に禁止されている酒 ji ŭ を、同音の九 ji ŭ から「8+1 を飲む」と書き表すことなどが挙げられる)。その上で、ジェンキンス(2009=2021)がファンダムの実践と企業の規制や構造との不可分性を示したように、中国におけるネット民の私的な楽しみもまた、中国特有の監査構造と切り離せないことを元監査員へのインタビューなどから示す。具体的には、中国のプラットフォーム企業に存在する世論管理のための内容監査部門の業務、AI のスクリーニングと人手による投稿内容、ライブ映像、コメント、弾幕などのチェック体制それ自体と、その体制がいかにネット民に身体化されているか、さらにBAN されるレッドラインの手前で遊ぶ技法を示す。

P19B-1 災間の社会における過去の災害体験の言語実践：阪神・淡路大震災から「30 年目の手記」

高森 順子（情報科学芸術大学院大学 産業文化研究センター）

1995 年 3 月から現在まで活動を行う「阪神大震災を記録しつづける会」と、神戸市の文化施設「デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)」が協働して行う、阪神・淡路大震災にかかわる手記募集事業「30 年目の手記」のプログラムの設計、および活動経過報告を行う。本プログラムは、東日本大震災から 10 年目に実施した「10 年目の手記」（主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団、企画制作：一般社団法人 NOOK）の活動を援用しながら、阪神・淡路大震災から 30 年を迎える神戸で 2024 年 1 月 17 日から約 1 年間に亘り展開している。本プログラムは、手記の募集内容を「阪神・淡路大震災にまつわる手記」とし、いわゆる「被災者」ではない人にも門戸を開いている。本発表では、先行研究として作家の早乙女勝元による「東京大空襲・戦災誌」など、ある一定の時間経過の後で災厄の記録・表現を行う活動と照らし合わせつつ、検討する。

P19B-2 大熊町フィールドワーク研究（１）：移境に留まる経験としての故郷喪失

**日高 友郎（福島県立医科大学 医学部）・鈴木 祐子（東京医療学院大学 保健医療学部）・
照井 稔宏（福島県立医科大学 医学部）・春日 秀朗（福島県立医科大学 医学部）・各務
竹康（福島県立医科大学 医学部）・川本 静香（京都精華大学 共通教育機構）・サトウ タ
ツヤ（立命館大学 総合心理学部）**

福島県大熊町は、福島第一原子力発電所事故後の除染作業で生じた放射性廃棄物の中間貯蔵施設の立地自治体である。町民は施設建設地の提供による半永久的な故郷喪失経験の渦中にある。本報告では、「自分の土地に中間貯蔵施設が建設される経験」に対する意味づけを明らかにする。町民４名への複数回のインタビューによりデータが収集され、複線径路等至性モデル／アプローチによって時間軸に沿って整理され、その時々における心理的苦痛と社会的状況との関連性が描出された。最終処分場の決まらない中での中間貯蔵は、移行期の宙ぶりの経験（移境経験＝liminal experience）である。一方で、住民票の維持等、町・土地との関係性を維持し続ける行動をとることで、あえて移境状態の中に身を置く選択が見られた。背景の心理的メカニズムと支援との連結を論じたい。本研究は福島県立医科大学倫理委員会の承認を得て実施された（一般 30193）。

P19B-3 川の記憶とまちづくりのナラティブ

**伊藤 哲司（茨城大学 人文社会科学部）・杉浦 彰子（JA 共済総合研究所）・李 勇昕（日
本学術振興会 茨城大学地球・地域環境共創機構）・奥村 かえで（茨城大学人文社会科学
部）・馬場 紗矢香（ひたちなか市地域福祉課）・佐川 雄太（茨城大学 未来共創学環）**

令和元年東日本台風（2019 年 10 月）によって大きな被害を受けた茨城県水戸市飯富地区や久慈郡大子町で、私たちは地域の人々のナラティブに耳を傾けてきた。そして、ビジュアル・ナラティブ・マッピング（VNM）の一種で住民の語りに位置情報をつけ可視化した「語りマップ」を活用し、一緒に語りあうワークショップも開きながら、ときに水害も引き起こす川と共に生きる人々の「川の記憶」と向きあってきた。4 年目を迎える本研究ではこれまでの成果として、茨城大学図書館や大子町の施設でナラティブを中心とした展示企画を行い、地域の中で共有されてきた「川の記憶」からさらにナラティブが生成されていく仕掛けの構築を試みた。本発表では、その実践についてレポートし、それが醸しだし創り出す「まちづくり」の基盤について議論を行う。さらに今後、この仕掛けを一過性のものにとどめず、どのように持続可能なものにしていけるかについて展望する。

P19B-4 被災想定に関する共同想起のアクションリサーチ

杉山 高志（九州大学 大学院人間環境学研究院）・梁 梓超（九州大学 大学院統合新領域学府）・大本 航（九州大学 大学院統合新領域学府）

本研究では、高知県黒潮町において「未来へのメモワール」と名づけた活動を実践し、その活動による長期的な効果を検証したものである。この活動は「災害が起きてしまった後、あなたは何を残したいですか」と質問でナラティブを収集する活動であり、黒潮町に在住・通学する住民や学生を対象に活動を展開し、活動過程で得られたナラティブを用いて効果を分析した。本研究の結果、多様なナラティブを収集し、教育効果を確認することができた。例えば、聞き取られた内容を例示すると「クラスの写真」「近所のFちゃん」「ピアノ」「風景」「おばあちゃんのお墓」「自分の家のパン屋」などのバラエティに富んだ語りを確認した。そして、それらの価値を再認識すると同時に、災害から守る方法について主体的に検討させることができていた。その他、ジオラマの上に高校生がナラティブをマッピングする活動も実施され、被災想定を共同想起する効果も確認できた。

P19B-5 地域間交流によるインターローカリティの生成に関する研究

李 フシン（日本学術振興会・茨城大学 地球・地域環境共創機構）

自然災害、少子高齢化、人口流出、産業の衰退などの課題は、各地域社会に共通する問題である。これらの課題を解決するためには、行政の画一的な政策や支援を受けるだけではなく、震災復興、防災、地域振興の取り組みを各地域が独自に実践することで、特有のローカリティが生まれている。このようなローカリティが他地域の課題解決に影響を与えることができるのか、地域間（ローカルとローカル）の知識の交換・移転を通じて、どのようなインターローカリティの知見が生成されるのかを検討する。具体的には、発表者が主催した2018年の被災地茨城県大洗町と未災地高知県黒潮町との防災交流会、2022年の高知県大正地区と台湾雲林県華山村との土砂災害防災プラス交流会、そして2024年の茨城県大洗町と台湾双鳳地区との防災川柳交流会を事例とする。これらの事例における実践プロセスおよび地域の変化を整理・比較する。

P19B-6 「子育て」を通した自文化への異議申し立てへの反応と日本における子育て観の考察

安井 琴音（立命館大学院 人間科学研究科）

本研究では、日本のテレビ番組「はじめてのおつかい」の全世界配信の開始に伴い、海外の視聴者から肯定的な評価だけでなく否定的な評価を呼び起こした事例に注目し、番組に対する日本と海外の視聴反応の比較を通して、日本における子育て文化を考察した。調査は、日本人8名に対して半構造化面接を行い、そこで得られた発話をKJ法で分析した。その結果、番組内で行われているおつかいがもつ側面と、子育てに関する6つの価値観の存在が明らかになった。また面接内では、子育て文化の差異に基づく視聴反応の違いに関する発話が生じており、表面的な子育ての差異に注目するのではなく、「子どもの成長」に複線性があることに気づく中で双方の価値観を理解するという、対立を超えた異文化理解の重要性が示唆された。

P19B-7 4歳児クラスにおける帰りのあいさつルーティンの生成～子どもたちと保育者により要素が決定した事例に着目して～

鈴木 幸子（常葉大学短期大学部 保育科）・青山 昌子（静岡大学教育学部附属幼稚園）

本発表では、幼稚園の4歳児クラスにおける帰りのあいさつルーティンが、子どもたちの決定する要素を取り入れつつ、生成されていく様相を明らかにすることを目的とする。ルーティンは「生起順序に規則性のある複数のスロット(構成変数)から成る定型的なやりとり」を指し、子どもと他者とのやりとりを支える重要なものである。2022年4月～2023年3月、4歳児クラスの帰りの集いにおけるあいさつ場面の観察記録と担任保育者にインタビューを行い文字化したもののうち、子どもたちと保育者とのやりとりによりルーティンの要素が決定された事例を分析対象とした。本研究は静岡英和学院大学研究倫理審査委員会の承認を得ている。結果、4歳児クラスの帰りのあいさつルーティンは、初め子どもたちによって親しみのあるルーティンが採用され、次第にその日の子どもたちの経験と楽しさを伴った要素を取り入れ生成されていた。

P19B-8 共生社会に向けた就学前教育における多文化共在実践の探究

**横山 草介（東京都市大学 人間科学部）・山本 登志哉（一般財団法人 発達支援研究所）・
周 念麗（華東師範大学）**

多文化共生社会の実現に向けた異文化理解の試みにおいては、文化的な差異についての認識上の理解や受容に留まることなく、多文化が共在するフィールドに身を置き、その渦中を生きる当事者間の情動的な応答や身体的な応答を伴った対話や調整のプロセスが不可欠であることが指摘されてきた。本研究では、日本および中国の就学前教育のフィールドに焦点をあて、それぞれの国で就学前教育について学ぶ学生たちを研究協力者とし、ビデオ再生刺激法を用いて両国の実践についての認識上の差異を把握することを糸口に、認識された差異の背後に前提されている規範的な実践観を明らかにした。加えて、これらの規範的な実践観が機能する実践的状况の中で、いかなる情動的、身体的な応答が予見されるのかについて検討を行った。これらの探究を通して我々は、共生社会における就学前教育の多文化共在実践の実践モデルを構築することを目指している。

P19B-9 心理専門職の職業倫理に関する発達プロセスの検討

慶野 遥香（筑波大学 人間系）

心理専門職は、業務の中で倫理的ジレンマなどの難しい判断を迫られる場合も少なくない。こうした状況では、直感的な判断や個人の倫理観だけでは不十分であり、職業倫理に関する適切な知識や意思決定が必要とされる（金沢，2006）。しかし、日本では海外と比べると体系的な倫理教育の方法が確立されているとは言い難く、心理専門職の倫理的資質に関する研究知見も数少ない。本研究の目的は、心理専門職の職業倫理に関する認識や倫理的判断のありようが、訓練や実務経験を積む中でどのように発達していくのかを探索的に明らかにすることである。公認心理師または臨床心理士の資格所持者を対象にインタビュー調査を行い、14名から得られたデータをM-GTA（木下，2007）を用いて分析したところ、職業倫理の理解の仕方が変容していく過程が示された。なお、本研究は筑波大学人間系倫理委員会の承認を得て実施している。

P19B-10 建設系大学院英語プログラムから日本の建設会社への移行の経験—建設技術に関わる語りの分析に基づいて—

柴山 俊也（千葉大学大学院 人文公共学府）

近年、日本の建設・防災技術を学ぶために、建設・防災技術の蓄積が多い日本の建設系大学院の「英語プログラム」に留学する外国人青年が増えている。こうした青年たちは、修了後に外国人建設技術者として日本の建設会社に就職することも多い。従来の日本企業に就職した元留学生に関する研究では、職場への適応過程や必要となる日本語力は検討されているが、就職後に使用言語が英語から日本語に切り換わるなど、言語の不連続性の経験については未解明であった。

本発表では、日本の建設系英語プログラム出身の元留学生の事例から、日本の建設会社に就職した後に遭遇する言語の不連続性をどのように経験していたのかを解明することを目的とする。具体的には対象者の建設技術に関わる語りに着目し、日本語を主要言語とする技術的なやりとりに参加する過程で、言語・数式・図などの「文化的道具」(ワーチ, 2002) がどのように関係していたのかを分析する。

P19B-11 出産を経験した女性のキャリア展望の変化:分岐点分析による検討

中田 友貴（立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構）・福山 未智（立命館大学大学院 人間科学研究科）・安田 裕子（立命館大学 総合心理学部）・サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）

本研究では、既に出産を経験した女性のキャリア展望に焦点を当て、彼女たちが直面するキャリア展望の変化を明らかにすることを目的とした。すでに出産を経験した3人の母親を対象に、出産前後、職場復帰、職場での役割の変化、家庭と仕事の両立など、彼女たちが経験した主要なキャリア状況におけるキャリアの見通しについて、半構造化インタビューを実施した。分析方法は、Trajectory Equifinality Modeling の分岐点に着目した分岐点分析を用いた。その結果、出産を経験した女性のキャリア展望の形成には、家庭と仕事の両立、職場の支援体制、個人的なキャリア目標などの要因が重要な役割を果たしていることがわかった。また、出産経験女性のキャリア形成には、キャリアの見通し、同僚の理解、職場の柔軟な勤務形態、育児支援制度の有無、参加者の将来像が大きく影響していることが示唆された。

P19B-12 自殺念慮のある自傷行為者の主観的世界ー「リストカッター」南条あやの最後の寄稿の分析からー

新井 素子（立教大学 文学部）

本研究は、自傷行為が遠因で亡くなった著名な「リストカッター」南条あやの寄稿（1999）の分析から自殺念慮のある自傷行為者の主観的体験を探求するものである。倫理的観点からもこのような人を直接対象とする調査の実施は難しいため、本研究では IPA（解釈学的現象学的分析）を参考に南条（1999）を分析した。分析の結果 104 個のテーマが得られ、テーマから 28 個のカテゴリが生成された。カテゴリは概略的に 5 つの視点（自己像，他者，身体，自傷行為，死）で整理できると考えられた。南条は【他者に頼りたい自己像】を満たしてくれない【他者への不満】を，【従順な身体】を傷つけることで部分的に満たし（【自傷行為による満足】），【自力救済できる自己像】を強めた。他方，【死への憧憬】による自殺は嘔吐に阻まれ自傷行為による失血で心機能が低下するなど彼女の自力救済は【身体の逆襲】に敗れ，彼女は身体と共倒れしたと思われた。

P19B-13 看護大学 4 年生の「寄り添う看護」に関する分析

石井 俊行（兵庫大学 看護学部）

「寄り添う看護」は看護部の理念に多く使用され、大辞典では「傍にすること」とされている。「寄り添う看護」についての定義は多く、実践する看護師は患者・家族の不安を傾聴する、辛さや苦しみを理解して関わる、患者・家族の立場になって考えて行動するなど知識と実践知より言語化している。本研究の目的は、看護大学 4 年生（すべての看護学実習が終了）が「寄り添う看護」をどのように捉えているのかを明らかにすることである。A 大学研究倫理委員会の承認を得た後、対象学生 6 名の同意を得てグループインタビューを実施後に分析を行った。結果：「辛い・しんどい時に患者の側に居ること」「患者の身体面と気持ちを理解すること」「患者・家族との関係構築」のカテゴリーが抽出された。抽出されたコードより、看護大学 4 年生の「寄り添う看護」の特徴を分析する。

P19B-14 クラスメイトによる特別支援教育の支援対象児へのサポータティブユーモア

黒住 早紀子（駒澤大学 総合教育研究部）

障害の有無にかかわらず、すべての児童が他児と程よい関係のもとで学校生活を送れることは、子どもウェルビーイングの観点からも重要なことであろう。本研究では、特別支援教育の支援対象児とクラスメイトの程よい関係のもとではどのような関わりあいがあるのかをフィールドワークを通して検討した。フィールドは、筆者が特別支援教育支援員として活動する小学校通常学級の2クラス（3年、5年）である。週1の頻度で1年間強の参与観察を経て蓄積したフィールドノーツを分析した結果、主に支援対象児がつまずきやすい場面や問題行動場面でクラスメイトからユーモアが発されていた。そのユーモアには、①場の雰囲気をやかにする②場面を切り替える③コミュニケーションを継続する等、ユーモアの一般的機能に加えて、④対象児に気持ちの切り替えを促す⑤対象児にヒントを与える等、対象児へのサポータティブな機能も併せ持つ様子が浮かび上がってきた。

P19B-15 がん闘病におけるどのような「つながり」の体験が、生きることの意味の再構築をもたらしているのか：ある青年の闘病記ブログの分析から

宮原 契子（筑波大学大学院 人間総合科学研究科）

終末期がん患者のスピリチュアルペインとして多様な概念が見出されてきた。村田（2003）はそれらを時間性、関係性、自律性の三つの次元に構造化し、各次元は互いに複合、他のペインと混在して表出されるとした。一方、一般成人において社会的つながり、自然とのつながり、および自己の内的体験への気づきはそれぞれ独立した概念として精神的健康との関係が明らかにされてきたが、近年、自己、他者、および世界とのつながりは多次元的な「つながり」という構成概念で統合できる可能性が見出されている（Watts et al., 2022）。そこで本研究では、死に向かう過程における生きることの意味の喪失と再構築に多次元的なつながりの関わりを想定し、どのような（対象・力動）つながりの体験がどのように（作用）関わりうるのかを、ある青年のがん闘病記を素材に SCAT（大谷，2019）による分析を通して検討する。

P19B-16 聴覚障害のある人と聴者との間の解釈のズレとその修復

広津 侑実子（東京都公立学校スクールカウンセラー）

聴者との対話の中で聴覚障害のある人の自己や体験への解釈はどのようなものか、ズレが生じた場合はいかに修復されるのかについて検討する。聴者の筆者が行った、2名の聴覚障害のある人へのインタビュー場面を対象に、会話分析・ディスコース分析を行った。その結果、①聴者の聴き手は、聞こえない身体的特徴により困難をもつという枠組みで聴覚障害のある人の体験を解釈しようとするが、②聴覚障害のある人は、手話や文字情報が整えられていない環境面の不備や、ろう者と聴者の文化の差異による関係性の不具合を強調する。個人が能動的に環境を調整できているため困り事は生じないと意味づけることもある。③両者のズレに対して、他のろう者の事例を示して体験をより一般化したり、あるいは性格や職業などより個人的な特徴に基づく体験と再解釈したりすることで修復がなされていた。なお、本研究は東京大学ライフサイエンス研究倫理支援室から実施許可を得た。

P19B-17 人の育ちにおける「目に見えないもの」の意義を探る

藤井 真樹（名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部）・西村 美佳（金城学院大学 人間科学部）・勝浦 眞仁（同志社女子大学 現代社会学部）

人間科学領域では、主体の経験を重視しようとする様々な方法論や研究が為されて久しいが、一方で一般社会においては数値化や序列化といった客観的な根拠を求めようとする流れがますます強い。しかし、すべてのことに根拠を求め価値づける現代社会への本能的な違和感や抵抗を背景とした生きにくさを感じている人々が多いこともまた現代社会の一側面ではないだろうか。たしかに日々の営みの多くは、根拠が詳らかにできるような確実性とは異なる次元で為されていることの方が圧倒的に多い。

人の育ちについても、見えないものや見えないものを信じる力に支えられていると考える専門家はいるが、見えないがゆえに研究の遡上に上りにくく、その重要性が議論されづらい。そこで、本研究では探索的に見えないものに支えられている現実をまずは明示化することを目的とする。

P19B-18 探究学習の担当教員は指導上の課題にどのように対応しているのか

小山 義徳（千葉大学 教育学部）

本発表では、「総合的な学習の時間」で行われる中学校の探究学習において、教員がどのような指導上の課題に直面し、その課題に対しどのように対応したのかを、教員にインタビューを行い、発話内容を分類することで明らかにした。その結果、探究学習において、教員は、主に「テーマ設定の指導の仕方」や「教員の知識不足」、「個別対応の難しさ」、「生徒とつくりあげること」、「時数が足りない」という点に課題を感じていた。また、そうした課題に対し、「外部人材を活用」して教員の知識不足を補ったり、「教師向けの指導書」を読んだり、「生徒から出る様々なテーマに対してどのように調べたら良いか」のように、調べ方についてスキルアップしたりすることで対応していることが明らかになった。一方、予想に反し、「生徒が行った探究学習をどのように評価するか」については、指導上の課題とは考えている教員は少ないことが分かった。

P19B-19 作曲家による音楽作品の評価プロセス(2)-インタビュー調査と SCAT による分析

多賀 秀紀（富山大学学術研究部教育学系）

本研究は、作曲家による音楽作品の評価プロセスを検討することを目的とする。

学校音楽教育における「評価」、特に創作学習については教師が抱える問題意識や困難の存在が指摘されてきた。その根底には、創作過程としての学習活動とその成果としての作品との整合性をどう取るのかという問題がある。創作学習は知識やスキルを使いこなすという意味で「統合」を主とする営みである一方、歌唱や器楽は既存の作品を「分析」して再表現するものである。しかし、教師の多くが教員養成段階において主に後者を学んでいるため、前者についてもより深い理解を促す必要がある。

本発表では、2名の作曲家を対象に実施したインタビューについて、質的データを分析し、作品を評価する際の手順や内在する思考などを明らかにする。

なお、本研究は「富山大学人を対象とし医療を目的としない研究倫理審査委員会」の承認（J2021004）を得て実施している。

P19B-20 衣服としてのコスプレコスチューム

福山 未智（立命館大学 人間科学研究科）・サトウ タツヤ（立命館大学 総合心理学部）

マンガ等に登場するキャラクター達に扮して遊ぶ「コスプレ」という行為がある。コスプレは 21 世紀から一般に発展し、現代では多くの若者が楽しむ遊戯となっている。

本発表ではコスプレをする際に必須となる衣装に着目し、コスプレ衣装を自作した経験から個人と文化の洋裁的な技術の変容について研究を行う。研究方法は、福山(2023)をデータとして、自作した衣装の写真と共に裁縫技術やコスプレ衣装独特の制作技術の習熟や変容について記述し、時間の経緯によってどのように成長していくのかということを検討する。裁縫分野における技術の習熟に関しては、洋裁技術は戦後から女性教育や家庭の中で発達し、その後は既製の台頭により洋裁は趣味や学問の扱いとなっていたため、技術の習熟に関して明確に示した文献はない。したがって、本研究はコスプレ衣装制作のための制作本や小道具作成のための制作本、コスプレ専門雑誌、という文献を参考にする。

P19B-21 PrEP 薬を通してつながる人々：ピアサポートグループのエスノグラフィー

首藤 真由美（早稲田大学大学院 人間科学研究科）・石井 友恵（早稲田大学大学院 人間科学研究科）・金 智慧（東京大学 多様性包摂共創センター）・鈴木 勝己（早稲田大学 人間科学学術院）・辻内 琢也（早稲田大学 人間科学学術院）

【目的】自助グループによって、どのように未承認のヒト免疫不全ウイルス（HIV）曝露前予防（PrEP）薬の使用者へのケアが立ち上がってきたのか、を明らかにすることを目的とする。【方法】エスノグラフィーを用いて、LGBTQ 当事者で精神疾患等を抱えたダブル・マイノリティのピアサポートグループを対象に、フィールドワークとインタビューを行い、質的に分析した。（倫理審査委員会承認番号：2021-083(1)）【結果と考察】ピアサポーターのゲイ男性 2 名は、HIV 感染の不安と、自分のコントロール不能だった性行動に対して自己嫌悪に苦しんだ経験があり、社会の中で否定的に捉えられてきたその経験を「生の声」で伝えることからケアを始めた。医療などの専門家を巻き込みながら、様々なマイノリティの人々と共に PrEP の啓発活動を行なっていた。

P19B-22 SST-VR コンテンツによる客観的現実性の必要の有無：メタオートエスノグラフィ

村松 秀樹（放送大学大学院 文化科学研究科）

本研究は、筆者の分析的オートエスノグラフィによる SST-VR (social skills training-virtual reality) の先行研究 (村松, 2024) を素材として、喚起的オートエスノグラフィの観点でメタオートエスノグラフィを行うことを目的とする。質的データとして、村松 (2024) の SST-VR 論文の可視化された「表」と「考察」を素材とする。分析的観点による一般的な理論化に焦点化した分析ではなく、自分自身の喚起的な再帰性を記録した内容をメタ分析した。また、考察において他の先行研究を用いて外的妥当性を確保した。その結果、SST-VR コンテンツの登場人物の統合失調症のプレコックス感の有無に対して、既存の客観的現実性を重視した科学的価値に対して、社会的偏見を緩和する障害理解教育的な要素を重視した非客観的現実性の科学的価値の必要性和それに対する課題が明らかになった。

P20A-1 2名の木工作家のモノづくりのヒストリー：インタビューデータを軸にして

山本 尚樹（弘前学院大学 文学部）

同じ研修所にてろくろ挽きという木工の加工技法や漆塗りの技術を学んだが、異なる作風で作家活動を行う2名の木工作家、K、Tを対象にインタビューを行った。インタビューは大きくは以下の4つの観点から質問を行い、作家の回答に合わせて適宜追加で質問などを行った。1. 研修所に入るまでの木工、学校などでの製作・学習経験 2. 研修所で学んだこと 3. 研修所時代から現在の作品作りに至るまでの制作活動 4. それに伴う道具の工夫について 得られたインタビューデータや、過去に撮影した工房での制作の様子を踏まえ、個々の作家がどのように現在のモノづくりを行うに至ったのかを示していく。

P20A-2 「レゴで街をつくろう」をテーマとしたワークショップはどのような場だったのか？——集合的な創造性の観点から——

稲嶺 美祈（立命館大学 人間科学研究科）・川野 健治（立命館大学 総合心理学部）

「レゴで街をつくろう」というテーマで開催したレゴワークショップが、どのような場であったのかを検討する。レゴワークショップは地域活動として行ってきたものであり、本研究では2024年5月に行ったいばらき&立命館DAYでのデータを取り上げる。本企画は、ファシリテーターとして5人の大学院生がつく形で行い、参加者は4時間で約100名であった。また、参加者がレゴを作る様子をカメラで撮影し、そのデータをもとに自然観察法を行った。この際、参加者がどのようにレゴの街をつくり、またレゴの街を作る中でどのように参加者同士がつながるのかという点から分析した。その結果、自由に出入りが可能という特殊な場で、他の参加者の作品やアイデアがきっかけとなり、街が作られていく様子が見られた。加えて、違う目的を持った参加者同士が一緒にいられる場であると同時に、「街をつくる」というテーマによってつながることが可能になっていた。

P20A-3 防災活動が地域コミュニティに与えた影響についての分析—高知県四万十町興津地区を事例に—

大西 祐輔（京都大学大学院 情報学研究科）・矢守 克也（京都大学 防災研究所）

本研究は、地域防災活動の成果が、その地域にいかなる影響をもたらしたか分析を試みるものである。研究フィールドとした高知県の興津地区では、発表者が所属する研究室も十年以上にわたり関与して、津波防災活動が展開されてきた。ただ、過去に大学生が同地区を舞台に研究実践を行ってきたことは、地元住民にはあまり知られていないことがわかった。そこで、これまでの学生たちの研究論文を簡略化したものを住民に読んでもらい、その内容に基づいてインタビューを行うことを計画した。研究者が自身のエスノグラフィーを共同研究者に還元するような実践は過去にも行われているが、本研究は、題材となる研究実践に直接は参加していない人をインタビュー対象としている点で独自性が高いと考える。インタビューを通じて、興津地区の防災活動に関する多声的・多角的な現実を明らかにすることを目指した。

P20A-4 地域社会における絵本環境に関する研究 —絵本環境づくりに携わる自治体や各種団体へのインタビュー調査から考える—

仲本 美央（白梅学園大学 子ども学科）・小屋 美香（育英短期大学）

本研究は、地域の絵本環境づくりに取り組む自治体や各種団体 12 施設を対象にインタビュー調査（白梅学園大学・短期大学倫理審査委員会の承認済）を実施し、絵本環境づくりに関連している人・物・場が、子どもの育ちや人々のつながりをどのように支えているのかを検討していくことを目的としている。具体的には、地域の絵本環境に関連している人・物・場、その環境で展開している活動、活動によって地域社会や人々へ与えた影響、支えていきたい子どもの育ちや地域の人々のつながり、現状の課題、今後の展望などの聞き取り調査を行った。結果の分析方法には、M-GTA を採用した。その結果、地域の絵本環境づくりに携わる専門的な知識・技術をもつ人々の力だけではなく様々なマンパワーと協働しながら、新たな文化を創造し、地域社会の活性化につながっていた。

※本研究は公益財団法人前川財団「2023 年度家庭・地域教育助成」を受けたものである。

P20A-5 別の家が居場所になる ―出入り自由な家のフィールドワークを通して―

寺山 千智（茨城大学 人文社会科学研究科）・松本 光太郎（茨城大学 人文社会科学部）

寝室以外の94%を開放し、家主以外の人間もいつでも好きな時に訪れ、滞在できる家がある。筆者はこの家に断続的に訪れ、滞在して、参与観察およびインタビューを行ってきた。

本報告では、この家の利用者の1人に注目する。観察とインタビューの記録をもとに、自宅とは別の家が居場所になる過程を検討した。その結果、以下の2点が明らかになった。1点目は、「〇〇しても大丈夫だろう」と自らの行為が許容される期待を持てる場所になっていることである。2点目はこの家で何をしてよいのか、その線引きが家主や他の利用者と交渉するなかでともに画定していることである。

これらから一般的な家では得られていないことが、この家では得られているように思われた。そして、従来の家という場所の意味を拡張していることが考えられた。

P20A-6 アオテアロア・ニュージーランド在住の日本人移住者に関する 研究(3)

石盛 真徳（追手門学院大学 経営学部）・イゴール エマヌエル デ アウメイダ（京都大学 人と社会の未来研究院）・中尾 元（追手門学院大学 経営学部）

近年、生活の質を重視して行うライフスタイル移住が注目されている。本研究では、ニュージーランドの地方都市に移住した日本人9名（女性6名、男性3名）を対象に、調査参加者が撮影した写真とそれに関するナラティブから生活世界にアプローチするPEN-A（Photo Eliciting Narrative Approach）を用い、彼らの移住がライフスタイル移住に該当するのか、どのような特徴があるのかについて検討を行った。移住理由やプロセスにおいては、就業・起業目的、第2の人生としての移住、職業の専門性の活用、2カ国以上での移住生活経験等、かなりの多様性がみられたが、PEN-Aによるニュージーランドでの生活の分析では「家族とゆったりと過ごす」、「身近で豊かな自然を楽しむ」、「趣味の時間を充実させる」など、多くの共通性が認められ、それらは彼らが移住で求めていたライフスタイルと合致していた。

P20A-7 重症心身障害児と保護者の相互関係に関する研究 ～重症心身障害を持つ子の「笑い」の意義～

横堀 正枝（山梨大学大学院 医工農学総合教育部）・豊田 隼（山梨大学大学院医工農学総合教育部・日本学術振興会）・尾見 康博（山梨大学大学院総合研究部）

重症心身障害児（以下、重症児）を養育する親らは、身体的・精神的の両側面において過大な養育負担を訴えていることが報告されており、こうしたケースにおける親への心理・社会的支援が求められている。

このような背景から「重症児の養育において、子のどのような反応が、親の子に対する肯定的な関わりに影響を与えるのか」を調査するため、重症児を在宅で養育している親8名に対して半構造化インタビューを用いて「子の出生～育児に関するライフヒストリー」を収集し、グラウンデッドセオリーを用いて分析した。その結果、親らは「子の障害を受け入れられない辛さ」を体験する中で、子の「笑い」反応が親の子に対する「かわいい」という感情を賦活させ、その後の親子関係を前進させていることが示唆された。このことから、重症児の「笑い」反応が生じやすい育児環境をサポートすることは、重症児の親への心理支援となり得ると考えられる。

P20A-8 医療的ケアが必要なわが子を妊娠期から育む母親の経験 ―わが子との身体のまじわりの意味―

佐々木 由佳（大阪大学大学院）

医療的ケア児は年々増加し、2021年には新たな法律が施行され、支援体制への整備が進められている。しかし、医療的ケア児を家族で育むことは多くの苦悩があり、それらに寄り添うには制度面の充実だけでは不十分である。また、近年は出生前診断により出生前から苦悩を抱える家族も多い。そこで、本発表では、妊娠中に異常がわかり医療的ケア児となった“わが子”を育む母親1名の経験をインタビューと参与観察を通して、現象学的分析方法を基盤に両者の関係性の視点から検討する。母親と子どもの関係性はわが子と身体での交わりのなかで深まり、わが子を「感じる」ところから「感じ取る」、そして「感じ合う」へと変化するものであった。それは、疾患をもつ医療的ケア児のわが子なりの反応やその奥にある子どもの想いの母親の理解により成り立つものであった。なお、本研究は所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

P20A-9 重度知的障害者を子に持つ親が抱く障害児・者像のうつりかわり —ライフストーリーに基づく検討—

梶原 佐保（東京大学大学院 教育学研究科 臨床心理学コース）

障害児・者との関わりが乏しかった者が我が子に障害があると知ったとき、彼らはいかなる障害児・者像をかたちづくり、それを変化させていくのであろうか。本研究では、重度知的障害者3名（30代）の親6名に対してライフストーリー・インタビューを実施し、我が子とのかかわりの体験について回顧的に語ってもらった。我が子の障害を知る体験は、親にとって我が子へ否定的なラベルを付すことにつながることが多い。しかし彼らは、我が子や、我が子を取り巻く障害児・者とその家族とのかかわりを通じて、我が子や周囲の障害児・者のポジティブな側面にも目を向けるようになっていった。ただし、この過程は単線的なものではなく、親が障害や障害児・者に対して付する意味づけには、常に肯定的、否定的な視点が入り交じっていた。この視点の複雑さは、彼らが直面した障害や障害児・者にまつわる体験の多様さに起因すると考えられる。

P20A-10 音を身体に還す技法 —指揮者とオーケストラによる創造的行為の分析—

丸山 慎（駒沢女子大学 人間総合学群 心理学類）

本研究の目的は、オーケストラ演奏の現場を対象にした観察データを用い、指揮者の言語的な指示と身振り、そして演奏者との相互的なやり取りの分析を通して、音楽表現の創造に寄与する身体性およびそれを具現する技法の熟達について考察することである。本研究の協力者は、わが国を代表する指揮者の1人である井上道義氏とオーケストラであった。リハーサルから本番までのほぼすべての過程を対象として、動画データおよび指揮者と数名の演奏者からのコメント・データを収集した。とりわけ本研究で着目したのは、指揮の一般的な方法論の枠組みを超えた井上氏のユニークな形態の身振りと、指示内容が必ずしも一義的ではないと思われる発話がみられた点である。このような事例をもとに、本研究では音楽という高度な認知的・創造的コミュニケーションを導く身体性の実際と発話の特徴を示し、その含意について身体性認知科学や生態心理学などの知見を交えて議論する。

P20A-11 大学院生の文章指導者としての経験は、書き手としての学びにどう寄与したか

千 仙永（国際基督教大学 教養学部）・平松 友紀（早稲田大学 グローバルエデュケーションセンター）・後藤 大輔（東京海洋大学 海洋生命科学部）・坂本 麻裕子（早稲田大学 グローバルエデュケーションセンター）・佐渡島 紗織（早稲田大学 国際学術院）

文章指導の経験は、大学院生にとって書き手としての学びにどう寄与するだろうか。東京都内の某大学で文章指導の経験を積んだ大学院生 12 名のインタビューデータを分析した。大学院生は、文章指導の経験をとおして得た気づきを、書き手としての自分の文章作成に反映させる様子が見られた。1) 文章診断基準が内在化され、その基準で自分の文章を診断できるようになった。2) 文章技術の原理を理解し、状況に合わせて応用できるようになった。3) 修正案を模索し、提示できるようになった。4) 書き手の取り巻く状況を理解し、読み手などの状況を意識して、書くようになった。5) 文章指導者としての自覚により、自分の文章を見直すようになった。このように、大学院生は、文章指導の経験を自身の文章作成に活かして、書き手としても学んでいた。本研究の結果は、文章指導の経験が大学院生にとって書き手として成長の糧となりうる点を示唆している。

P20A-12 共感から創造的飛躍につなぐデザイン実践 ～現象学的記述・分析の試み
角 めぐみ（東京工業大学 環境・社会理工学院）

デザインにおいて「共感 empathy」は、重要な要素と指摘されてきた。デザインの現場では、他者に共感するための実践がある。例えば、初期段階ではインタビューや観察などが行われる。他者の経験や感情に共感することで新たな気づきを得て「創造的飛躍」が起き、より本質的な価値の創造につながる可能性があるからだ。共感を基礎におき、人々の経験や感情を解釈するための手法については研究が進みつつあるが、共感それ自体の研究は十分に行われていない。本研究では、デザインの専門教育を受けていない 18 歳以上の学生を対象とした 2 ヶ月間のデザインプロジェクトにおいて、参加者と関係者に対する参与観察とインタビューを行い、現象学的に記述・分析する。デザイン実践の中で特に共感が求められる、リサーチからコンセプトメイキングに焦点を当て、共感のプロセスや状態、共感と創造的飛躍のつながりを考察する。

P20A-13 自己責任モードから関係性モードへ 「開かれた学習観」から「キャリア自律」を問いなおす

佐藤 達実（成城大学大学院 社会イノベーション研究科）

キャリア自律が注目されているが、その背景にはキャリアの「自己責任」があり、半ば前提となりつつある。この言葉からは働く個人が知識やスキルを蓄え、独りで切り拓こうとする競争的で閉鎖的なイメージを喚起させる。しかし、現実のキャリアは他者や道具、環境とのインタラクティブな状況のなかに埋め込まれて在るものと考えることができる。

本研究では、働く個人と組織の学びを促す理論的・実践的な示唆を得ることを目的に、自律的にキャリア形成するビジネスパーソンの学びを「開かれた学習観」、すなわち「自己責任モード」から「関係性モード」で捉えなおす。『LIFE SHIFT』が提示する新しい働き方を実践する人を対象に半構造化インタビューを実施し SCAT で分析した。

なお、本発表は、筆者が 2021 年に放送大学大学院にて執筆した修士論文を基に再構成したものである。

P20A-14 認知症と共に生きる人のポジティブ変容の要因：インタビュー調査を通して

山中 綾華（NTT 人間情報研究所）・小野 明日香（NTT 人間情報研究所）・瀬古 俊一（NTT 人間情報研究所）・松川 尚司（NTT 人間情報研究所）

認知症の人には、認知症を前向きに考え直す“ポジティブ変容”を遂げられた人たちがいるが、彼らの変容は偶発的な出会いや出来事によるものがほとんどである。そのため、偶発的なものに頼らずにポジティブ変容を行えることが認知症との共生社会実現につながると考える。そこで、本調査では、認知症の人のポジティブ変容の要因を明らかにすることを目的とする。認知症の人 5 名に半構造化インタビューを実施し、SCAT 分析を用いて理論化を行った。その結果、認知症に関する経験、その経験を通じた人との関わりに加え、その人がこれまで経験した趣味や仕事もポジティブ変容に影響していることが示唆された。そして、ポジティブ変容の背景には、認知症を前向きに捉えるための支えである、抛り所があると考えられる。今後は、得られた結果を踏まえ、認知症の人のポジティブ変容への介入方法を検討する。

P20A-15

(発表取り下げ)

P20A-16 身体障害をもつ在日コリアン女性の交差性

宋 知潤（大阪府立大学 人間社会システム科学研究科 社会福祉学専攻）

目的：本研究の目的は、障害、エスニシティ、ジェンダーの交差する位置にいる個人に焦点をあて、交差性を用いて、障害のある在日女性が経験する社会的抑圧およびそれへの対処の様態を明らかにすることである。

対象と方法：身体障害をもつ在日コリアン女性 1 名に半構造化面接を行い、テキストデータを質的に分析するために KJ 法を採用し、社会的抑圧や心理的葛藤について触れる 2-3 個程度のセンテンスを 1 つのコードにした。障害、エスニシティ、ジェンダーが交わる語りを「交差性」に位置づけた。

結果：障害とエスニシティとジェンダーの語りにおいて「規則や常識が立ちほだかる」というコードが抽出された。

考察：周囲の言動や眼差しによって、憐みや弱い存在として他者化されることや内面化などの抑圧的経験が語られた。その位置から、社会的規則や常識が要求された。それでも尚、他者との関係性から連帯や安堵、揺らぎなどの両面を獲得していた。

P20A-17 双極症患者の「遊びの記憶」から見る家族経験：自由記述の分析から

松元 圭（新潟医療福祉大学 心理・福祉学部 社会福祉学科）・三品 拓人（筑波大学 人文社会系）

双極症患者がライフヒストリーを語る上でも、家族の存在は大きな比重を占めている（松元 2017, 松元・灰原 2023）。本報告では、双極症患者の家族経験、特に幼少期の家族経験に焦点を当てて、そのリアリティに迫る。データは 2022 年に実施した WEB 調査「幼少期の遊びの記憶に関する予備的調査」の中から「幼少期の思い出」や「親との遊びの記憶」に関する自由記述を用いる。コーディングとカテゴリー化を行った結果、各種虐待をはじめとする様々な形で「望ましくない養育」や楽しい思い出としては描かれない「遊びの記憶」が浮かび上がった。また「親との遊びの記憶の不在」に属する記述も多くなされていた。以上より、本研究は双極症の「病因論」のような直接的因果関係を主張するものではないが、対象者の中には「標準的な家族イメージ」とは異なる家族経験を有している者が少なくない可能性が示唆された。

P20A-18 ADHD 当事者の片づけにまつわる主観的な体験の分析——半構造化インタビューを用いて——

山口 莉絵（東京大学 教育学部）

ADHD 当事者は片づけに困難を抱えている (e. g. Samuel J. C. Schrevel, 2015)。この片づけの困難さは、「できるようになりたいのにできない」という体験として語られる (e. g. 宇野・福山, 2006)。したがって、ADHD 当事者自身がどう困っていてどうなりたいかということに焦点を当てて考えることが本課題においては重要である。ADHD 当事者が現在は周囲の期待に応えないといけないと感じていること、そして当人が生きやすい環境で生きることの重要性がすでに指摘されている (Samuel J. C. Schrevel, 2015)。

本研究では、ADHD と診断されている人を対象に、片づけ時の体験をテーマとした半構造化インタビューを行った。カテゴリー分析とナラティブ分析を併用し、ADHD 当事者にとっての「片付け」がどのような体験であるかを分析・モデル化した。

P20A-19 障害者の自己形成：難聴者のオートエスノグラフィの対話的自己論に基づく検討
勝谷 紀子（東京大学 先端科学技術研究センター／放送大学 教養学部）

進行性の疾患・難病を患う者は症状進行にともない活動や社会参加も影響を受ける。それにより自己概念も変化することが考えられる。勝谷(2023)は希少疾患による難聴に焦点を当て、ブログなどオンライン上に書いた自身の記述を元にオートエスノグラフィをまとめた。希少疾患とわかるまで難聴の言及は乏しかったが、最終診断、身体障害者手帳の取得とともに障害が語られ、障害が外在化、他者とも共有された。本研究はこのオートエスノグラフィに対し障害者としての自己がどう形成されるかをハーマンスの対話的自己論にもとづき分析した。対話的自己論にもとづき自己形成を分析した先行研究（藤井，2018；溝上，2008；伴野，2022）を参考にして記述を分析したところ、難聴の問題が表面化した時期は「聞こえにくい自己」と他の対話関係は乏しかったが、希少疾患の判明後「障害者の自己」も新たに生じて他の自己との対話関係も発生した。

P20A-20 「総合的な学習の時間」の指導に携わる中学校の若手教師の力量形成に関する一考察

太刀川 祥平（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 自然系教育講座／三田国際学園中学校高等学校）・川畑 翼（聖ドミニコ学園中学校高等学校）

教師の「力量」の捉え方は様々であるが、教師の力量形成は省察によってなされている。省察は、教師自身が学習者の立場での経験を反省的に捉えて授業改善に取り組んだり、教科指導とのつながりを見出したりするという、自立した教師としての態度を形成に寄与することが考えられる。筆者は「総合的な学習の時間」は教科に依存しない力量を形成すると考えた。そこで本研究では、「総合的な学習の時間」の指導に携わることが教師の力量形成にどのような影響をもたらすのかを明らかにするために、中学校に勤務する若手教師2名（新川，山中。いずれも仮名）にインタビュー調査を行い、その中の語りを分析した。その結果、「総合的な学習の時間」は、新川と山中にとって「学習活動に関心が向かない生徒に対するアプローチの方法」や「探究の『問い』の立て方の難しさ」「生涯学習とのつながり」を見出す契機となっていることが明らかになった。

P20A-21 CEFR を日本語教育実践に活かすために —学習支援ボランティアの語りにみられた Mediation に着目して—

原野 恵子（東京都立大学 都市環境学部）

CEFR を参考にした「日本語教育の参照枠」の普及計画により、日本語教育の現場はこれまでの教育観からの転換を迫られている。本研究では、外国につながる子どもの学習支援ボランティアの語りをもとに、CEFR を日本語教育実践に取り入れる際に必要となる視点を考察することを目的とする。

所属大学での倫理審査を経て、将来のキャリアとして日本語教師を視野に入れているボランティア 4 名に半構造化インタビューを実施し、その語りを SCAT（大谷 2011）で分析した。その結果、ボランティアは、勉強会に広義の意味付けをして、子ども達の言語運用能力に配慮しながら、子ども主体の時間を提供しようとしている。そして、家族とは別の立場で子ども達の日本社会への参加によりその姿勢が示された。これは、North B. and Piccardo E.（2016）の「教育的仲介」を実践していると捉えられる。

P20A-22 アンコンシャスバイアス解消に向けた教員の学びのプロセス—「実践コミュニティ」と「繋がり」に焦点をあてた質的検討—

上山 賢太郎（宝塚市立長尾小学校）・山中 一英（兵庫教育大学大学院 学校教育研究科）

対人認知過程に潜在する偏見や思い込みとして定義される「アンコンシャスバイアス (UB)」について、それが教員の柔軟で多面的な子ども理解を妨げていると考えられることから、その解消に向けた取り組みをデザインし、そこでの教員の学びのプロセスを事例として描出することを目的とした。小学校で組織された「実践コミュニティ」のなかで教員は、UBに関連した学術理論を学びながら、UBの気づきと問い直しに向けた対話を重ねていった。分析の結果、次のような特徴的事例が把握された。「自身の認知の正当性への懐疑」や「概念の再考と再定義」によって子ども理解やかかわりを変化させた事例、「学習環境を意識した授業づくり」によって児童の主体性が立ち上がった事例等である。そしてそこには、いくつかの「繋がり」が関与した可能性が示唆された。学術理論と固有の具体的経験の繋がり、各教員の経験を共有することで生まれた繋がり等である。

**P20A-23 性カテゴリー観の（再）構成：LGBT 活動に連帯しない当事者とのかかわりから
宮尻 零実（公立はこだて未来大学大学院 システム情報科学研究科）・坂井田 瑠衣（公立
はこだて未来大学 システム情報科学部）**

近年、セクシャルマイノリティに関する議論があらゆる領域で行われている。そのなかには、より多くの当事者を包括し可視化するために「LGBT」などの枠組みを用い、当事者への理解促進や当事者の自由獲得・権利回復を推進するために行われている LGBT 活動がある。性別違和を抱えていた私（筆頭発表者）は、LGBT 活動のなかでセクシャリティは一人一人異なるものと説明されているにもかかわらず、「LGBT」といった性カテゴリーを用い当事者をまとめて分類することに違和感を覚え、性カテゴリーのあり方に対して強いイデオロギーをもつようになった。本研究では、SNS 上で LGBT 活動に対して批判的な発言をする当事者とのかかわりのなかで、私自身の性カテゴリー観がどのように（再）構成されていくのか明らかにする。過去の私自身のセクシャリティに関する記述をもとに、他者とのかかわり方の変化や自身の当事者性の変化について論じる。

**P20A-24 ポルノとして描かれたレズビアン表象—日活ロマンポルノ「百合族」シリーズの
分析から—
島田 樹里（お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻）**

社会におけるレズビアンの不可視性が問題とされる一方で、ポルノではレズビアンが一種のジャンルとして描かれてきた。表象の主となる場がポルノであることへの問題提起は多くなされているが、映像中のレズビアン表象を分析対象とした研究は少ない。そこで、本研究では、日活ロマンポルノ「百合族」シリーズの映像分析を通して、作品中でレズビアンがどのように描かれたかを検討した。

その結果、①女性同士の関係が観客には可視化され、劇中では不可視化される二重構造の存在、②女性同性愛を「密か」なものとして描き、観客が覗き見ることを可能にする構図の存在、③異性愛と対照的に女性同性愛が描かれ、女性同士の関係の継続には男性への不信感が前提とされることが明らかになった。上記の 3 点が異性愛者男性を観客として想定したポルノにおいて、女性同士の関係を描くことを可能にするための仕掛けとして作用すると同時に、表象の限界であるといえる。

P20A-25 市民映画館の成員としての共創デザイン活動に向けた現場理解

小林 陽昭（公立はこだて未来大学 大学院 システム情報科学研究科）・坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学 システム情報科学部）

本研究は、市民映画館における課題をエスノグラフィックな調査を通じて分析し、共創デザイン活動を展開することを目的とする。

私（筆頭発表者）はいち映画館スタッフとして現場に参加し、スタッフ同士やスタッフと客との関わり合いを観察し、その気付きをフィールドノートに記述した。これらを分析することで現場の文化と課題を理解し、デザインの余地を見出す。私がスタッフとしての視点を獲得していくことで現場理解が深まり、現場におけるデザインの必要性を判断することが可能となる。それに基づき、スタッフも共にデザインの必要性を感じるような省察の機会を創出する。

成果として、市民映画館にあるデザインの余地がある物の扱われ方と、その経緯を理解し、スタッフが抱える現場の理想像を推測した。今後は、近隣大学での展示会や、市民映画館の日常をイラストにしてスタッフと共有することで、省察の機会を創出し、現場への還元を目指す。

P20A-26 Twitter（現 X）における〈出会い〉の相互行為分析

藤田 華奈（公立はこだて未来大学 システム情報科学研究科）・坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学 システム情報科学部）

アーヴィング・ゴフマンが提唱した重要な概念である「共在」は、対面状況を想定した概念であるため、非対面状況の SNS にそのまま適用することは難しい。一方で、「一緒にいる」と感じる状態のことを共在とよぶのであれば、SNS 上にも〈共在〉が存在していると考えられる。そこで本研究では、Twitter（現 X）の〈共在〉における〈出会い〉を可能にしている相互行為技法と情報環境を明らかにした。Twitter 上で活動する企業 A と B の朝の挨拶を分析した結果、1 つ目の A のツイートは「朝の挨拶という活動」を構成する発言であり、2 つ目の B のリプライは「朝の挨拶という活動への参加」を示す発言であることが明らかになった。また、3 つ目の A のリプライ（隣接ペア第二成分）が産出されることによって、2 つ目の B のリプライが隣接ペア第一成分として働き、B は活動への参加と連鎖の開始を同時に行っていることになることが明らかになった。

P20A-27 移動販売の「店じまい」におけるドライバーと利用者の相互行為

酒井 晴香（東京国際大学）・坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

過疎・高齢化地域では近年、交通アクセスの限られた高齢者を主な対象として、食料品などを小型車に積み、利用者の自宅付近で販売する移動販売が普及している。採算が取りにくく事業の継続が難しい移動販売では、利用者となる地域高齢者とのコミュニケーション技術を有したドライバーが集客に影響すると指摘されている。そこで本研究では、積載可能な商品数や停車可能な販売時間の制約下で、ドライバーが実際どのような接客をしているか分析する。瀬戸内海の島しょ地域で収集したビデオデータを基に、移動販売ドライバーの言語的・身体的な振る舞いに注目し、最後の利用者による買物の終了後から車体撤収までの「店じまい」を取り上げる。特に、買物後の利用者がすぐには立ち去らずその場に留まる事例を扱うことで、車体操作を基底的活動としながら利用者との会話という随伴的活動に参加するという複層的な活動としての接客の様相を記述する。

P20A-28 待遇コミュニケーション能力習得に差をつける要因 TEA と関係学の融合による事例研究

ウォーカー 泉（シンガポール国立大学）

本研究は、日本語学習者の待遇コミュニケーション（TC）能力習得に関わる要因を探るものである。ウォーカー（2024）では、シンガポールで日本語を学び、日本で就労して数年経つ高度外国人材の日本語習得プロセスについて TEA（複線径路等至性アプローチ）を用いて分析、可視化した。その結果、卒業時に同程度の日本語能力を有していても、言語に対する認識や行為の有様によって習得、特に TC 能力に差が生じることが明らかとなった。しかし、TEA では待遇にとって極めて重要な要素である人間関係と習得の関わりについて十分に可視化することができなかった。そこで本発表では、人間の根源的な自己・人・物の接在共存関係状況を究明し、複雑な人間諸現象を捉えるための理論的な枠組みを提供している「関係学」を融合することにより、学習者をとりまく人間関係やその認識によって習得がどのように左右されるかについて分析した結果を報告する。

P20A-29 フィリピンの若者が職業訓練校で学び直し自立する過程

金井 貴佳子（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）・井庭 崇（慶應義塾大学 総合政策学部）

フィリピンでは、経済的困難により学校をドロップアウトする若者を救済する手段の一つとして職業訓練校が重要な役割を担っている。フィリピンの若者にとって、職業訓練校に通い学び直す機会は得られる一方、訓練修了後にそこでの学びを活かして自分の人生をより良くしていけるかどうかは、本人に委ねられている。そこで本研究では、学校をドロップアウトしたものの職業訓練校で学び直すことを選択し、習得した技術を活かしバリスタとして自分のお店を構えるまでに至った 20 代フィリピン人女性の A さんを対象にライフストーリーインタビューを行い TEM（複線径路等至性モデリング）の手法を用いて分析した。A さんのライフストーリーにおける、分岐点や必須通過点を図式化することで、職業訓練中や職業訓練修了後の経験とそのプロセスを分析し、どのように得られた学びや技術を活かしながら自身で生計を立てて自立的に生きていけるようになったのか考察する。

P20A-30 昆虫の保存技法：自然・科学・社会のハイブリットな集合体から記述する虫屋の世界

阿部 廣二（東京都立大学 人文社会学部）・大山 星馬（青山学院大学大学院 社会情報学研究科）

本報告では、昆虫採集などの実践を行う虫屋の人々が、虫を保存する技法に焦点を当てる。保存技法は、虫を採集する際の技法や、標本作成時の利便性、その後の研究において利用する際の方針、経済性など、多様なアクターが絡み合ったネットワークとの関係から調整される。したがって、保存実践は、虫屋を取り巻く昆虫などの自然、科学的世界、社会的・経済的状况のハイブリットな集合体（Latour, 1991）を反映していると考えられる。そこで本報告では、採集への同行フィールドワークで得られたデータから、虫の保存実践に関わるハイブリットな集合体を記述することを目指す。また、この記述から、「保存」という一見無視されがちな現象が、科学的・趣味的実践に持つ意義について考察を試みる。本研究は、青山学院大学研究倫理審査委員会による倫理審査を受け、承諾されている（承諾番号：H21-034）。

P20A-31 ダンサーとしてのアイデンティティの多義性と踊ることの意味をめぐって

小林 海愛（成城大学大学院 社会イノベーション研究科）

本研究は、人前でダンサーとして踊り続けている若者たちにインタビュー調査を実施し、ダンスをアイデンティティの形成に繋げている過程を分析した。”踊り続ける”ためには、「向上心」や「楽しい」といった個人の中に生まれる感覚的で内的な要因を支える、「ダンスを習わせたい親」や「学校行事としてのダンス」などの外的な要因が必要不可欠であることが読みとれた。他人のエゴや強制的にダンスに触れざるを得なかった環境が、自分自身の個性として確立されていく文脈に注目し、それぞれの踊る意味について考察した。なお、本研究データは、筆者が成城大学社会イノベーション学部にて、2023 年に卒業論文として提出したものの一部である。

P20A-32 フォトボイスに重なる声—ミュージアムの編集機能を考える

川野 健治（立命館大学）・高田 すず（立命館大学 人間科学研究科）・中山 佐代（立命館大学 人間科学研究科）・橋本 光理（立命館大学 人間科学研究科）・浜崎 爽子（立命館大学 人間科学研究科）・稲嶺 美祈（立命館大学 人間科学研究科）

フォトボイスは、参加者自らが撮影する写真（フォト）とその写真に関する撮影者の語り（ボイス）からなる作品を通して当事者の声を社会に訴え、問題解決のためのアクションを促すアクションリサーチ（武田, 2014）であり、作者に焦点が当てられがちである。しかし、制作・展示には他者が存在し、彼らもまた作品の声に関わることができる。本研究では、大学のオープンキャンパスで展示をするために、学部生がキャンパスでフォトボイスを制作した際のファシリテーターである大学院生の語りについて検討した。声を創るための SHEFF 法（See、Happening、Emotion、Factor、Future）を通して制作に協力するファシリテーターは、最初に写真を見る者でもある。キャンパスでの経験や所作、知識によって身体を重ねて写真を捉え、特有の半指示的な関りを行っていた。

P20A-33 生成 AI とインタビューを用いた顔のリアリティ判断に関わる規範的特徴の探索
岡田 心（大阪大学 生命機能研究科）・新川 拓哉（神戸大学 人文学研究科）・西田 知史
（情報通信研究機構 未来 ICT 研究所 脳情報通信融合研究センター）

人々は知覚した顔のリアリティをどのような特徴に基づいて判断しているのか？本研究では、生成 AI が作った様々な人工顔を実在顔と識別する際に、人々が判断に用いる画像の特徴を、半構造化インタビューを用いて網羅的に探索した。生成 AI が作る極めて精巧な人工顔を用いることで、人工顔と実在顔を識別するための類型的な特徴だけではなく、主観的なリアリティ判断の規範となる特徴が抽出できると考えた。結果として期待通り、識別の正答率はチャンスレベルと差がなく、類型的な識別ができないことが示された。そして、インタビューデータにテキスト分析を適用し、リアリティ判断に用いる特徴を抽出したところ、目が最も重視されていることが分かった。次いで、髪、光の当たり方、肌、表情、背景などが重視されていた。本研究の成果は、顔を対象とした人々のリアリティ判断の規範的な特性を理解するうえで、重要な示唆を与える。

P20A-34 視線計測結果を基にした協働分析による「読み」の認識変化—視線計測機を用いた数学の学習支援の事例から—
信夫 智彰（東北大学大学院 教育学研究科）

本研究では、数学を苦手とする生徒の学習支援を目的として視線計測を行い、その計測結果を基に対象生徒と協働分析を行った。本稿では、協働分析時の対話に焦点をあて、対象生徒の自己の読みに対する認識の変化について考察する。具体的には中学 3 年生 1 名を対象に図形の証明を読ませその視線動向を計測し、その結果を教師（筆者）と対象生徒の 2 人で協働的に分析した。その結果、対話の前半部では対象生徒が「読んだ」と認識していたのに対し、計測結果を基にした教師との対話を経て「読んでいなかったかもしれない」という認識に変わっていたこと、視線計測結果とそれを基にした対話によって読み方の特徴を言語化、概念化できるようになり自己の読み方や他者との認識の違いを捉えることが可能になっていたこと、このような支援が自己の読みに対するメタ認知を醸成につながる可能性があることを指摘した。

**P20A-35 Kelly, G. A. の代替解釈 (constructive alternativism) をパラダイムとした
質的研究方法論の検討及び開発—コンストラクトの現象学, 解釈学, プラグマティズム,
構成主義的側面に着目して—**

火ノ口 史野 (九州大学大学院 人間環境学府 実践臨床心理学専攻)

本研究は、Kelly, G. A. (1955) が提唱した「The Psychology of Personal Constructs: PCP」を用いて新たな質的研究方法論を構築することを目的とした。PCP は、代替解釈 (constructive alternativism) と呼ばれる Kelly 独自の科学哲学に根付いており、多様な哲学的含蓄に富んでいる。しかし、異なるパラダイムを混ぜて研究対象を観ようとすることは、トライアンギュレーションの課題へと研究者を直面させる。本研究では、代替解釈の人間観である「man-the-scientist」に着目しながら、研究参加者のコンストラクトを抽出して、経験を記述する方法を検討した。解釈学的現象学と言説分析の研究方法を両立させることで、人がコンストラクトを使って世界を観るという経験のされ方、機能、構築のされ方を分析できる可能性を論じた。

P20A-36 「共感しすぎる」ことへのエコロジカル・アプローチによる接近

石渡 美穂子 (立教大学 文学研究科)

本研究は、「相手に共感しすぎてしまう」や「常に気を使い疲れ果ててしまう」という現象をオートエスノグラフィによって詳細に記述したものを、エコロジカル・アプローチ(河野, 2011)の立場から分析するものである。これらの現象は、2020 年以降メディアによって急速に知名度を上げた「HSP(Highly Sensitive Person)」の特徴の1つとして語られることが多い。現在の HSP に関する研究は、生得的な観点と経験的な観点との双方から検討されているが、議論はまだ始まったばかりで、今後多くの実証的な研究知見が期待される。本発表では、HSP を自認する筆者の「共感しすぎて疲れ果ててしまう」という現象を、個体と環境間における相互作用を、認知の問題ではなく知覚の問題として、そのメカニズムを明らかにしていく。 *参考: 河野哲也, 2011「エコロジカル・セルフ」ナカニシヤ出版

P20A-37 「学校と学習塾の連携」の日本の特質

鈴木 繁聡（名古屋大学大学院 国際開発研究科）

先進諸国においては、政府が専有していた公教育の提供主体を民間企業へ開放し、民間活力の導入によって公教育の活性化を図ることが国際的な教育改革の潮流の一つとなっている。これは新自由主義的教育改革として捉えられ、学校が自由を得られる一方でアカウンタビリティが強く求められ、「成果主義」や「経営主義」に陥ることが指摘されている。しかし、日本の「学校と学習塾の連携」の先駆的な事例である「官民一体型学校」では「成果主義」や「経営主義」に陥っている実態が観察されていない。そこで本発表では、佐賀県武雄市の「官民一体型学校」における長期にわたる聞き取り調査と参与観察に基づく事例研究を行い、それをイングランドの Academy と比較することで、「学校と学習塾の連携」の「日本の特質」を明らかにする。

P20A-38 歯科における名もなき子育て支援—歯科スタッフおよび歯科利用者の子育て支援観—

鈴木 光海（東北大学大学院 教育学研究科）

本研究では、歯科における子育て支援、歯科スタッフおよび歯科利用者の子育て支援観に着目し、歯科における名もなき子育て支援について考察した。方法はヘルス・エスノグラフィおよびインタビューであった。制度化されている子育て支援に対し、制度化されていない名もなき子育て支援は、生活の様々な場面で自然発生的に行われている。歯科健診は3か月毎受診が推奨されていることから、親子が定期的・継続的に通う場である歯科においても、名もなき子育て支援がみられた。歯科スタッフおよび歯科利用者計35名のインタビューを分析した結果①支援の根源は子育て経験とその伝達・伝承であること②歯科スタッフたちの妊娠出産子育ての前後において、子育て支援および支援観が変容すること③子育てを終えた世代における名もなき子育て支援と支援観④名もなき子育て支援・保育士の子育て支援の差異⑤名もなき子育て支援の独自性と有用性 の5点が明らかとなった。

P20A-39 空想他者との対話実践に関する一人称研究空想他者との対話実践に関する一人称研究

遠藤 友咲（筑波大学大学院 人間総合科学学術院人間総合科学研究群博士前期課程 情報学学位プログラム）・松原 正樹（筑波大学図書館情報メディア系）

イマジナリー・コンパニオン（以下 IC）は児童のみならず青年、成人においても確認されており、相談相手としての安心感、メタ認知などの機能的側面が報告されている。しかしこれまでは既に IC を経験している人へのインタビュー調査等が多く、IC の経験に乏しい人がどのように IC の実在感を高め、ストレスコーピング手法として活用できるかについては研究されてこなかった。そこで本研究では、IC 実践において実際に他者と関わっている感覚や IC の実在感をどのように高め、社会的安心感やメタ認知といった機能的側面を引き出すことができるのかを分析する。本研究においては一人称研究の手法をとり、研究以前は IC 経験を持たなかった筆者自身が生活の中で実践・記述する。これによって、IC 実践を日常生活で真に実用的な形で提案、またはその発見プロセスをこれまで IC 経験を持たなかった人に対しても提示できる。

P20A-40 中国残留邦人の自己形成における葛藤一再会した家族の眼差しから生じる揺らぎ

曾谷 美華（京都大学大学院 人間環境学研究科）

第二次世界大戦終戦から長い年月が経過し、日本における戦争の記憶は風化されつつある。また近年、国際情勢の不安定化により、国同士の関係が緊迫になる場面が増えている。そのため、国家間の対立に巻き込まれた人々（戦争体験者）の体験に注目することは現代を生きる者にとって非常に重要である。本研究は満洲で終戦を迎え、中国残留孤児として生きてきた中国残留邦人との語り合いの分析を通して、国家や民族がどのように自己形成に影響を及ぼすのかを検討する。協力者は満州移住、日本敗戦後の逃避行、中国文化大革命など激しい社会変動を生き抜いてきた。そして、日中国交が正常化した後、生き別れた実親との再会を果たし帰国したが、家族関係の変化に苦しむこととなった体験が語られた。語り合い法を用いて分析した結果、家族の眼差しにより当たり前に継承していたはずの民族的自己が大きく揺さぶられる葛藤の様相が浮き上がってきた。

P20B-1 ひきこもり青年の関係性の変容プロセス —事例研究における複線径路等至性モデリングと関係学の融合—

廣瀬 太介（立命館大学人間科学研究科）

2023年3月31日に公表された「こども・若者の意識と生活に関する調査」では、ひきこもり者は推定146万人いることが報告されている。労働人口のうちの50人に1人が社会的にひきこもっているということは、個人の問題として考えるのではなく、社会・文化の問題を個人が代表していると考えて、ひきこもり者の行為を理解する試みが必要であると思われる。そのように考えると、146万人のうちの一人が経験していることは、個人的な体験にとどまらず、146万人の人たちの共通性を基盤にしながらも、一般性があるものとしてモデル化し得る可能性が拓かれる。本研究では、TEM(複線径路等至性モデリング)と関係学の2つの分析方法を用いてトライアングレーションをして事例をモデル化した結果を提示する。そして、分岐点における破滅の関係性、「理想」が語られる時の関係性、等至点における理想の関係性について考察を行う。

P20B-2 コーダはどのように当事者になり、それを対象化し続けるのか—コーダがコーダを研究する過程の探索—

中井 好男（大阪大学 人間科学部）・中津 真美（東京大学 多様性包摂共創センター）

本発表は、「コーダ (Children of Deaf Adults)」を研究する2名のコーダが、コーダとしての自己を自覚し、コーダを研究するに至るまでの各々の経験を協働的オートエスノグラフィとして記述したものである。具体的には、経験の内省を深めるべく対話を重ねつつ、「自身にコーダを内在化させて当事者となり、研究の営みの中でコーダを対象化して内実と向き合う」過程を記述した。その記述からは、コーダとしての自己を探る中で、自身の経験に新たな意味づけを成し肯定的な変容に導かれる様相が窺えた一方で、変容する自己と対象化されたコーダを分析する自己との間に葛藤や二律背反性が生起する事象も浮かび上がった。コーダという見えないマイノリティとしてのアイデンティティを自身に付与する行為を経て、さらには社会的相互性の諸相にも言及し、その改善を試みるマイノリティ研究をどのように生み出してきたのかについて議論する。

P20B-3 ADHD 女性の生きづらさ

河原 希美（京都大学大学院人間・環境学研究科）

注意欠如・多動性障害（ADHD）の当事者である発表者が、当事者女性に対してインタビューを行い、ADHD 女性特有の体験世界を描き出す。「注意が安定しない」「優先順位がつけられない」といった単なる症状だけでなく、ADHD 者の内面から見た体験のあり方の特有さを描く。さらに、そこに女性であるというジェンダー的視点が組み合わされたときにそれがどのような体験をもたらし、彼女たちの生きづらさにつながるのかを考える。

P20B-4 幼児の試行錯誤を支える保育者の援助と環境構成の工夫

松原 未季（大阪信愛学院大学 教育学部）

本研究では、幼稚園 5 歳児クラスにおけるフィールド観察を通じて、幼児の試行錯誤を支える保育者の援助、及び環境構成の工夫について明らかにすることを目的とする。本研究の遂行にあたって、協力園の園長に許可を得ており、東京大学倫理審査委員会において研究公表の承認を得た。保育者は、5 歳児のトイに水を流したり、転がしたりする場面における試行錯誤の過程において、子どもの発想や探求心を活かせるように見守ったり、土や水といった自然現象に関心を持てるように遊んでいる子ども同士及びクラス全体で共有するといった援助を行っていた。また、環境構成については、自由遊びの時間が長時間確保されており、子どもが試行錯誤する時間が十分に設けられていたり、「広い砂場」があったり、子どもたちがトイなどの遊具を目に届く範囲で自由に持ち運びできるように工夫されており、5 歳児が試行錯誤できるような「時間」や「空間環境」が保障されていた。

P20B-5 幼稚園は 2 歳児の生活面の自立をどう促しているか

古賀 松香（京都教育大学）

3 歳以上の子どもを対象とした幼児教育を専門としてきた幼稚園が、平成 19 年文部科学省の通知「幼稚園を活用した子育て支援としての 2 歳児の受入れに係る留意点について」発出以降、3 歳未満児を受け入れて保育を行う取り組みが広がっている。しかし、その保育内容や方法は国の基準がなく、各園によって 3 歳以上の保育との接続を考慮した内容や方法の工夫を行っている現状がある。同じ 2 歳児の保育といっても、より早期からの継続的な長時間保育の中で育つ子どもに対する保育と異なり、家庭において自立が十分に促されていない環境で育っている子どもたちの保育となる。これまで 3 歳以上の幼児教育を専門としてきた保育者たちは、2 歳児の自立を促す援助をどのように実践しているのか。5 園 9 クラスの朝の支度に焦点を当てて、保育者-子ども間の相互関係、環境の構造化等を視点とし、幼稚園における 2 歳児の保育の朝に見られる援助の特徴を明らかにする。

P20B-6 爪切り初めにおける手の微視的分析

松本 光太郎（茨城大学 人文社会科学部）

何事にも初めてがある。そして、人間の手足の末端には大抵平爪が生えている。乳児は自分の手足の爪を切ることができないため、必然的に養育者が乳児の爪を切ることになる。初めての爪切りは、身体の一部である爪を切られる乳児と、他人——とはいえ我が子——の身体の一部を切る養育者、双方の手にとって未踏の経験である。また、今後長く続く営みの幕開けでもある。

本発表では、乳児2名の初めての爪切りに注目して、爪切りの様子を記録した動画を微視的に分析することを通して、初めてという時間的展開、手や爪という身体、親子の絡まりや非対称性などについて報告を行いたい。

P20B-7 対話の性質を明らかにするための指標や分析方法の検討

北村 篤司（昭和音楽大学）

近年、オープンダイアログや当事者研究など、当事者を中心とした対話的な実践が広がっており、臨床的な実践において、対話の性質が重要であることが示唆されている。対話の性質を明らかにする指標として、シークエンスの長さ、やりとりにおける優位性、言葉の使われ方（指示的か象徴的か）、モノローグ的かダイアログ的か（Seikkula, 2002）など、幾つかのものが示唆されており、会話における対話の質を定性的および定量的に評価する試みもなされている（Miralles ほか, 2020 など）。しかし、対話を捉える視点は多様であり、どのような場面で、どのような指標や分析方法が役立つのか十分に整理されているわけではない。本発表では、先行研究で示唆されている対話の性質を明らかにするための指標や分析方法を整理し、発表者自身の分析も振り返りながら、その意義や課題を検討する。

P20B-8 複線径路等至性アプローチを用いた大学生の自分磨きの様相の検討

木戸 彩恵（関西大学 文学部）

本研究は、自分磨きのきっかけや動機、モチベーションから自分磨きの種類・対象、男女間の共通点・相違点を明らかにすることを目的として実施した。男女5名ずつを対象に半構造化インタビューを実施し複線径路等至性アプローチによる分析を行った結果、外面の自分磨きは「自分自身の容姿や健康の向上」、内面の自分磨きは「対人関係の質の向上」と「自分自身の人間性や考え方の質の向上」を目指して行われることが示唆された。また男女で自分磨きのイメージや類型にいくつかの共通点がみられた。さらに自分磨きにより、理想自己のイメージとアイデンティティ形成に関連があることが示唆され、充実感や自己効力感が得られ自己変容志向が強まり、それが自分磨きという行為の維持につながっていることが明らかになった。

P20B-9 難民日本語教育は学習者=難民的背景を持つ人々の幸福に貢献可能か ——複線径路等至性モデリング(TEM)による事例の検討

伴野 崇生（慶應義塾大学 総合政策学部）

難民日本語教育(伴野 2023)は学習者=難民の幸福に貢献できるのだろうか。本研究では、複線径路等至性モデリング(TEM：安田・サトウ編 2017)を用い、1名の難民を「ご招待」してTEM図を描き、検討を行った。その結果、難民日本語教育は難民的背景を持つ人々の幸福に確かに貢献できる側面もあるが、日本語力の向上に伴って生じる新たな困難への対応を織り込んだ形で教育実践を行う必要があることが示唆された。また、少なくとも日本語力の向上と比例するように幸福度が増すようなことはなく、日本語ができなければ遭遇しなかった困難をも乗り越えながら自律的で自分らしい社会参加や活躍を目指せる教育的支援が必要であるとの結論に至った。さらに、難民日本語教育が学習者=難民の幸福に貢献するためには、狭義の日本語教育の実践にとどまることなく、他職種、他機関とも連携しながら全人的なアプローチを採る必要があることも示された。

P20B-10 不登校という病みの価値を転換させる当事者：場と時間の中で却来する意味をめぐって

俣賀 勇人（成城大学大学院 社会イノベーション研究科）

一般に不登校は「社会的自立に向けた支援」が必要（文部科学省 不登校への対応）な存在とネガティブに定義される。一方、不登校の経験を「希望」と語る当事者がいる。彼らがどのように意味を捉え直しているかに迫ることで、不登校を語り直す可能性を拓くことができるのではないだろうか。本発表は、このようなユニークな意味生成のプロセスについて報告する。調査は不登校の当事者団体 F に所属する 2 名に、グループインタビュー形式で半構造化面接を行った。調査の結果、当事者団体 F の場の価値観と、当事者の経験が相互に作用し、意味が形成されていた。詳細にこのプロセスに注目すると、意味が時間をダイナミックに行き交っていた。時空を往還する複雑な意味生成の実践を、世阿弥が提唱した却来の概念と関連させて整理し、分析を行った。なお本発表は、2023 年度に成城大学社会イノベーション学部に出した卒業研究のデータを再分析したものである。

P20B-11 みんなが寄り合う場の「おしゃべり」 — 大学サークル「九州大学放送研究会」における「話の輪」の生成と成り行き

拜藤 真梨（株式会社中海テレビ放送）・木下 寛子（九州大学大学院 人間環境学研究院）

新型コロナウイルス感染症が拡大した頃、それまではできることが自明だった「おしゃべり」の機会が失われたことの意味を痛切に経験した人も少なくない。本研究は、このような経験を背景として「おしゃべり」がどのようにして生じ、さらにまたどのような時にそれが楽しめるものになるのかを問う。第一報告者が所属した大学サークルは、いつも「おしゃべり」に花が咲き、それを楽しみに集う人さえいる場だった。本発表では、部員として継続的に参与して観察した「話の輪」の生成・解消と「話題」の移ろいに注目した出来事の記述、部員の協力を得て場面を再現した写真・図を提示する。それらを元に「話の輪」が生成されて、楽しめている状況に見出される要件と、それを支える「みんなが寄り合う場」、そして「おしゃべり」ができ、楽しめることの意味と意義を示す。（本発表は第一報告者の 2023 年度九州大学教育学部卒業論文を再編集した内容です）

P20B-12 未知の「本」と「人」に出会う場 ——読書会において読書体験を言葉にすることと受け取ること——

福田 珠希歩（株式会社秀英予備校）・木下 寛子（九州大学大学院 人間環境学研究院）

本研究は、読書会に人が集まる「理由」を問う。読書会は、学校の場合に限らず、街中や図書館でも休日や平日の夜に開催されており、そこに行けばわざわざ読書会の間を探し出して、本を手にいそいそ集う人達の姿を見ることができる。本を読む行為が基本的に「黙読」を意味する現代では、読書会の「開催」は様々な意義・意味、目的が付与されて語られる一方、読書会への「参加」については、当人が語る素朴な「ニーズ」を越えた理由が見えにくい。本発表では、自ら（第一報告者）も場に参加し、主に会話内容の分析から参加者の経験を明らかにする試みから、読書会に幾重もの目立たない出会いが生まれる様子を描き、その場を成り立たせる基本的な特徴である「会話」こそが最も大事な「参加の理由」になる可能性を示すと共に、まちなかにひっそり開かれる読書会の場の意味を示す。（本発表は第一報告者の2023年度九州大学教育学部卒業論文を再編集した内容です）

P20B-13 ファン活動としてのスマホいじり：上映会における相互行為分析

千田 真緒（千葉大学大学院融合理工学府）・岡部 大介（東京都市大学メディア情報学部）

本稿では、スマートフォン(スマホ)のような人工物とともにどのように上映会をつくりあげているのかを考察した。上映会とは、アイドルなどのファンが集まり、対象のアイドルの映像を自宅やカラオケボックスなどで鑑賞することを指す。ELANを用いた相互行為分析の結果、単に映像に関する知識をスマホで調べるだけではなく、SNSにあげるためにテレビで流している映像をスマホで撮影していたり、参加者が上映会をする様子を自ら撮影したりしていた。主にトーク中にスマホをいじり始め、映像のなかのアイドルに話しかけながらも、アイドルに関する情報交換が共同的に行なわれていた。その場にいる他者だけではなく、SNS上の同じアイドルのファンや、画面の向こうに存在するアイドル本人も含めながら上映会が構成されていた。こうした映像鑑賞とともに行なわれるスマホいじりの技法は、ファン活動の一環である上映会における歓びの実現に係る問題となる。

P20B-14 看護管理者へのインタビューを通して生じた研究者の個人的側面の考察—オートエスノグラフィーを用いて—

渡邊 優那（広島大学大学院 人間社会科学研究科）・服巻 豊（広島大学大学院 人間社会科学研究科）

筆者の修士論文研究である渡邊（2024）では、2名の看護管理者にライフストーリー・インタビューを行い、キャリア発達に伴う心理的变化を質的に調査した。結果、キャリア発達の中で患者や職場環境に対する心の準備状態である「心的構え」（田畠，1992）が適応的に変化し、看護師になる以前から培ってきた心的構えと看護師として働く上で必要な心的構えが融合していく在り様を示された。得られた研究成果は、面接で生まれた研究協力者の語りや語り方、回想した場面の共有など、研究者の主観的体験を含めた相互作用をもとに語りを解釈したものである。本研究では、看護管理者のキャリア発達変遷の理解を深めるために、渡邊（2024）の研究結果を再分析することを目的とする。具体的には、オートエスノグラフィーの手法を用いて研究過程で生じた研究者の個人的側面に関するデータを加え、研究者と研究協力者の自己の在り様を捉え直していく。

**P20B-15 EPA 看護師・介護福祉士の受け入れ 17 年：長期滞在に伴う意思決定
浅井 亜紀子（桜美林大学リベラルアーツ学群）**

日本とインドネシアの二国間経済連携協定によるインドネシア人受け入れが始まって 17 年となる。1 陣の国家試験合格者の中には、日本で継続して勤務している者もいる。永住権を申請し、定住化が進んでいる。本研究は、17 年の EPA の歴史をたどり、その後日本に残っているインドネシア人の事例を取り上げ、滞在を決める意思決定の過程とそれへの影響因を検討する。とくに、永住権を取得するか否かは、将来帰国か滞在かに関係し、極めて重要な決断である。意思決定には、彼らの主観的ウェルビーイング（Subjective Wellbeing, Diener, 1984）が関係してくるが、パートナーや子どもを含むインドネシア人の家族としての意思決定の側面がある。同時に、在日インドネシア人コミュニティの発展もみられ、日本での定住を促進する要因もある。それらの要因を整理し、今後の外国人労働者の受け入れに伴う課題を明らかにする。

P20B-16 出来島の学習支援教室に通う外国にルーツを持つ子どもたちの居場所の考察

後藤 ガブリエラ（大阪大学大学院 人間科学研究科）・宮本 匠（大阪大学大学院 人間科学研究科）

目的：外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援を行っている西淀川インターナショナルコミュニティ（以下 NIC）「きらきら（小学生向け）」に着目し、子ども達や保護者にとって、NIC がどのような居場所として機能しているかを分析し、望ましい長期的な支援方法を明らかにする。研究対象はNIC の学習支援教室に毎週通う子どもとその保護者である。NIC は、学校に通っている子どものみならず、不登校や言語の壁を抱えている子どもの高校・大学進学の手助けと支援も行っている。研究方法は参与観察と半構造化インタビューを用いる。週に1回、NIC を利用する子ども達がNIC をどのように利用しているのかを参与観察する。調査者が学習ボランティアとして、NIC の支援活動に参加し、外国にルーツを持つ子どもたちへの支援及び居場所における課題を考察する。

P20B-17 小学校の個別支援級の質的調査

小池 星多（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）・江原 繁光（東京都市大学 メディア情報学部）・佐藤 優哉（東京都市大学 メディア情報学部）

著者らは、地域の学校、NPO、行政、企業、大学などが地域の問題を協働で解決するリビングラボに参加している。本研究は、リビングラボの一環で小学校において不登校や、登校できるが教室に行くことができない児童を一時的にケアする個別支援級に参加し、個別支援級の児童の変容をフィールドワークして明らかにした。個別支援級はひとつの教室で運営され、専任教員が常駐して学年の異なった児童たちが自分の興味関心のある活動、遊び、勉強を自分のペースで行うことができる。ここに大学生が週に一回参加して児童のケアにあたった。大学生は「教員」などの肩書きがなく児童との年齢も近いので、児童たちの活動を指導する、されるの関係ではなく共に活動したり工作物を褒めたりすることで、児童の自己理解やアイデンティティの形成に貢献した。また小学校にはないレゴブロックなどを持ち込むことによって登校する動機を高めることができた。

P20B-18 ヴィゴツキーの「回り道」の概念によるインクルーシブな授業の分析

司城 紀代美（宇都宮大学大学院 教育学研究科）

特別支援教育において「特別な支援が必要な子ども」は文字どおり「支援」すべき対象としてとらえられ、周囲の子どもたちとの間に、支援する・支援されるといった一方的な関係が想定されやすい。しかし、実際の子どもたちどうしのかかわりは一方的なものではなく互恵的な関係にあると考えられる。

本研究では、このかかわりの過程を明らかにするためにヴィゴツキーの「回り道」の概念に着目する。子どもが直接解決できない問題に遭遇したとき文化的操作として異なる方法をとることをヴィゴツキーは「回り道」と呼んだ。「回り道」は単なる遠回りではなく、異なる構造を生じさせるものであり、そこには創造的過程があるとされる。本研究では、インクルーシブな授業を志向する教師の授業を「回り道」の概念を用いて分析し、子ども同士の互恵的なかかわりがどのように生じているのかを明らかにする。なお、研究に際しては、学校の関係者に事前に許可を得た。

P20B-19 現代日本における心および超自然的存在を感じる対象に関する調査

森山 徹（信州大学）・小林 一樹（信州大学社会基盤研究所）

本調査では、20歳以上の1,596人に対し、26種の対象に対し、心、魂、神の存在を感じる度合いを7段階評定法で回答させた。対象は人間など8種の生物群、石など10種の自然物群、家など8種の人工物群であった。分析の結果心と魂の存在感は生物群で強く、人間では最大であった。他の2群では弱かった。神の存在感はどの群でも弱かった。回答者を20・30代、40代、50代、60代以上の4つの年齢群に分類した分析結果では、20・30代と60代以上という離れた群において、心が人間から魚類までの広範囲で受容されていた一方、40代と50代という中間の群では、人間から鳥類までという狭い範囲でしか受容されていなかった。また、魂は、両群において人間からムシまでの広範囲で受容されていたが、その度合いは前者の方が高かった。この年齢群による違いは、ヒトの生物、心理学的発達段階や、社会、文化的背景の違いに起因する可能性がある。

P20B-20 断片を集めて、編む-日常のなかの記憶の継承

安斎 聡子（青山学院大学 コミュニティ人間科学部）

沖縄戦の痕跡が残る本島南部の集落で発表者が行ってきた参与観察・インタビュー調査では、沖縄戦の記憶に関する「語られなさ」／「聞かれなさ」とともに、「非体験者」が日常見聞きしてきた複数の体験者たちの身体的な表現や語りの断片、自ら体験する環境（戦跡等）が、「非体験者」自身によって時に集められ、編み直される様相が確認された。「非体験者」による「編み直し」とも言えるこの状況は、特定の体験者の記憶表象を意図的に受け渡す、いわゆる語り部の体系的な実践でも見られる構造である。本発表ではこれらの意図的・無意図的な記憶の継承の実践を比較しながら、「体験者の記憶の継承」が、本質的に「非体験者」による多種多様な断片を「集めて編む」実践であること、その際に「非体験者」自身の体験性（環境との接触）が重視されること、そして、環境との接触という観点に立てば「非体験者」も出来事の「間接的な体験者」であることを提示する。

P20B-21 シアターワークの自己変容プロセスに関する一人称研究～自ずから動きが生まれるとき～

松原 正樹（筑波大学 図書館情報メディア系）

内なるからだの声に導かれおのずと演じる・舞うという身体の芸術表現は、自身に対する新たな気づきを呼び起こす。その気づきはやがて自己の確立へと繋がり、同時に他者に対する思いやりの心を育む。シェークスピア演劇を学んだ俳優小木戸利光氏が考案した「シアターワーク」は、表現芸術療法・マインドフルネス・身体知の学びを基盤とし、受け手によっては、セラピーであり、教育であり、遊びであり、通過儀礼であり、祈りとなる。本研究は一人称研究アプローチ(諏訪 2013)を採用し、著者自らがシアターワークの認定プラクティショナーになるために実践を続ける中で得られた一人称記述や共に実践した者たちのインタビューによる二人称記述を読み解く。具体的には、無意識化の共振・共鳴 (Raja 2019) や、そこから得られる間主観的な運動体験による癒しのプロセスについて生態学的知覚の観点からまとめた仮説的なモデルについて報告する。

大会参加者索引

あ行			
青山 昌子	P19B-7	尾石 智美	P19A-17
青山 征彦	会員企画シンポジウム 6	大内 雅登	会員企画シンポジウム11 P19A-8
浅井 亜紀子	P20B-15	大垣 有美	P20A-15
阿部 廣二	会員企画シンポジウム15 P20A-30	大倉得史	質的心理学フォーラム編集委員会企画 シンポジウム
綾城 初穂	質的心理学研究編集委員会企画シンポ ジウム	大城 凌子	会員企画シンポジウム16
新井 素子	P19B-12	大西 郁子	会員企画シンポジウム 2
安斎 聡子	研究交流委員会企画シンポジウム P19A-6 P20B-20	大西 祐輔	P20A-3
飯田 奈美子	会員企画シンポジウム 1	大橋英永	会員企画シンポジウム 7
イゴール エマヌエ ル デ アウメイダ	P20A-6	大本 航	P19B-4
石井 俊行	P19B-13	大山 星馬	P20A-30
石井 友恵	会員企画シンポジウム14 P19B-21	大和田裕美	会員企画シンポジウム 1
石黒 広昭	会員企画シンポジウム 3	緒方 亜文	会員企画シンポジウム 5
石田 喜美	会員企画シンポジウム12	岡田 心	P20A-33
石盛 真徳	P20A-6	岡部 大介	P19A-33 P20B-13
石渡 美穂子	P20A-36	岡部 大祐	会員企画シンポジウム13
いとう たけひこ	質的心理学研究編集委員会企画シンポ ジウム	奥村 かえで	P19B-3
伊藤 哲司	常任理事会企画シンポジウム 会員企 画シンポジウム16 P19B-3	奥本 京子	質的心理学研究編集委員会企画シンポ ジウム
伊東 美智子	P19A-16	小田 郁予	会員企画シンポジウム 5
稲嶺 美祈	P20A-2 P20A-32	小野 明日香	P20A-14
井庭 崇	P20A-29	尾見 康博	会員企画シンポジウム 7 P20A-7
入江 智也	P19A-13	小山 義徳	P19B-18
岩根 由佳	P19A-10	か行	
上田 敏丈	P19A-11	各務 竹康	P19A-4 P19B-2
上田 洋平	研究交流委員会企画シンポジウム	榎田 美雄	会員企画シンポジウム 1 会員企画シンポジウム14
上山 賢太郎	P20A-22	梶野顕明	P20A-15
上山 瑠津子	P19A-2	梶原 佐保	P20A-9
ウォーカー 泉	P20A-28	春日 秀朗	P19A-4 P19B-2
内田 千春	P19A-1	勝浦眞仁	P19B-17
梅井 尚美	P19A-30	勝谷 紀子	P20A-19
江原 繁光	P20B-17	加藤 望	P19A-1
海老田 大五郎	会員企画シンポジウム17	加戸友佳子	会員企画シンポジウム 1
遠藤 晋作	P19A-11	金井 貴佳子	P20A-29
遠藤友咲	P20A-39	鎌田 真実	P19A-13

上川 多恵子	会員企画シンポジウム 4 会員企画シンポジウム 8	小林 陽昭	P20A-25
上手 由香	質的心理学研究編集委員会企画シンポジウム	小林海愛	P20A-31
川島 大輔	P19A-19	小屋 美香	P20A-4
川島 裕子	会員企画シンポジウム 6	小山 多三代	P19A-23
川野 健治	会員企画シンポジウム 7 会員企画シンポジウム13 P20A-2 P20A-32	古和 友子	P19A-2
川畑 翼	P20A-20	近藤 百玲	P19A-21
河原 希美	P20B-3	さ行	
川本 静香	P19A-4 P19B-2	齋藤 優希	P19A-29
岸 磨貴子	招待講演 会員企画シンポジウム 6 会員企画シンポジウム12	酒井 晴香	P20A-27
北尾良太	質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム	坂井田 瑠衣	P20A-23 P20A-25 P20A-26 P20A-27
北村 篤司	P20B-7	坂本 麻裕子	P20A-11
木戸 彩恵	P20B-8	佐川雄太	P19B-3
鬼頭 弥生	会員企画シンポジウム 4	櫻井 未央	P19A-7
木下寛子	P20B-11 P20B-12	佐々木 由佳	P20A-8
金 智慧	常任理事会企画シンポジウム P19B-21	佐藤 達実	P20A-13
清田 敦彦	P19A-28	サトウ タツヤ	会員企画シンポジウム 4 会員企画シンポジウム10 P19A-4 P19A-18 P19A-29 P19B-2 P19B-11 P19B-20
楠見 友輔	会員企画シンポジウム 5 会員企画シンポジウム17	佐藤 由紀	研究交流委員会企画シンポジウム P19A-6
久保田 裕斗	会員企画シンポジウム 5	佐藤 優哉	P20B-17
呉 文慧	会員企画シンポジウム17	佐渡島 紗織	P20A-11
黒住 早紀子	P19B-14	司城 紀代美	P20B-18
郡司菜津美	質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム	静間 健人	P19A-6
慶野 遥香	P19B-9	信夫 智彰	P20A-34
小池 星多	P20B-17	柴山 俊也	P19B-10
河野 暁子	会員企画シンポジウム16	澁谷 雪子	P19A-16
古賀 松香	P20B-5	島田 樹里	P20A-24
後藤 ガブリエラ	P20B-16	薛 海升	会員企画シンポジウム 7 会員企画シンポジウム16
後藤 大輔	P20A-11	首藤 真由美	会員企画シンポジウム14 P19B-21
小林一樹	P20B-19	周 念麗	P19B-8
		庄野俊平	P19A-25

新原 将義	P19A-20	辻内 琢也	会員企画シンポジウム14 P19B-21
菅原 大地	P20A-15	土元 哲平	常任理事会企画シンポジウム
			会員企画シンポジウム10 P19A-16
杉浦 彰子	研究交流委員会企画シンポジウム 常任理事会企画シンポジウム P19A-6 P19B-3	寺山 千智	P20A-5
杉山 高志	研究交流委員会企画シンポジウム P19A-6 P19A-17 P19B-4	照井 稔宏	P19B-2
杉山 陽香	P19A-19	伴野 崇生	P20B-9
鈴木 勝己	P19B-21	豊田 隼	P20A-7
鈴木 光海	P20A-38	な行	
鈴木 幸子	P19B-7	中井 好男	P20B-2
鈴木 繁聡	P20A-37	中尾 元	P20A-6
鈴木ミチル	P19A-6	中島 由宇	P19A-7
鈴木 祐子	P19A-4 P19B-2	永田 素彦	P19A-28
角南 なおみ	会員企画シンポジウム 3	中田 友貴	会員企画シンポジウム 7 P19B-11
角 めぐみ	P20A-12	中津 真美	P20B-2
瀬古 俊一	P20A-14	中坪 史典	P19A-1 P19A-16
千田 真緒	P20B-13	仲本 美央	P20A-4
曾谷 美華	会員企画シンポジウム16 P20A-40	中山 佐代	P20A-32
宋 蘇安	P19A-33	滑田 明暢	会員企画シンポジウム10
宋 知潤	P20A-16	新川 拓哉	P20A-33
た行		西垣 正展	P19A-14
多賀 秀紀	P19B-19	西澤有喜子	会員企画シンポジウム 2
高木美歩	会員企画シンポジウム11	西田 知史	P20A-33
高田すず	P20A-32	西村美佳	P19B-17
高梨 克也	会員企画シンポジウム15	西村 優美	研究交流委員会企画シンポジウム
高松 邦彦	P19A-16	新田 莉生	P19A-22
高森 順子	研究交流委員会企画シンポジウム P19B-1	能智 正博	会員企画シンポジウム 3
匠 英一	P19A-26	は行	
竹宮 彩香	P19A-12	拜藤 真梨	P20B-11
田代 順	会員企画シンポジウム 2	萩原 健	会員企画シンポジウム 6
太刀川 祥平	P20A-20	橋本 光理	P20A-32
田中雅美	質的心理学フォーラム編集委員会企画 シンポジウム	長谷川 綾音	P19A-18
谷口 泰子	P19A-28	畑 亜紀子	会員企画シンポジウム14
張 亦瑾	会員企画シンポジウム16	馬場 紗矢香	P19B-3
崔 月瀨	P19A-3	浜崎 爽子	P20A-32
千 仙永	P20A-11	早川 真桜子	P19A-15

林 直哉	P19A-24	松尾 純子	P19A-27
林田 一子	会員企画シンポジウム 8	松川 尚司	P20A-14
原野 恵子	P20A-21	松嶋秀明	質的心理学フォーラム編集委員会企画 シンポジウム
服巻 豊	P20B-14	松原 正樹	P20B-21 P20A-39
東村 知子	会員企画シンポジウム 6	松原 未季	P20B-4
引地 達也	会員企画シンポジウム17	松元 圭	P20A-17
肥田 武	P19A-1	松本 光太郎	P20A-5 P20B-6
日高 友郎	P19A-4 P19B-2	丸山 慎	P20A-10
火ノ口 史野	P20A-35	三品 拓人	P20A-17
平野 真理	P19A-10 P19A-31	南 摩周	P19A-32
平松 友紀	P20A-11	宮下 太陽	会員企画シンポジウム10
廣瀬 太介	会員企画シンポジウム 4 P20B-1	宮尻 琴実	P20A-23
広津 侑実子	P19B-16	宮原 契子	P19B-15
福田 珠希歩	P20B-12	宮前 良平	P19A-6
福山 未智	会員企画シンポジウム 4 P19B-11 P19B-20	宮本 匠	P20B-16
藤井 真樹	P19B-17	村松 秀樹	P19B-22
藤田 華奈	P20A-26	村本 邦子	会員企画シンポジウム16
藤田 裕一	質的心理学研究編集委員会企画シンポ ジウム	森 美緒	P19A-30
藤森裕紀	質的心理学フォーラム編集委員会企画 シンポジウム	森本 行人	P20A-15
ポーター 倫子	P19A-1	森山徹	P20B-19
保坂裕子	質的心理学フォーラム編集委員会企画 シンポジウム	や行	
細馬 宏通	会員企画シンポジウム15	ヤーン ヴァルシ ナー	会員企画シンポジウム10
堀内多恵	会員企画シンポジウム 7	安井 琴音	P19B-6
堀畑 佳宏	会員企画シンポジウム 3	安田 裕子	会員企画シンポジウム 8 P19A-23 P19B-11
本間(照井)稔宏	P19A-4	ハッ塚 一郎	会員企画シンポジウム13
ま行		山口 莉絵	P20A-18
俣賀 勇人	P20B-10	山田 修司	P19A-6
町田奈緒士	質的心理学フォーラム編集委員会企画 シンポジウム	やまだ ようこ	会員企画シンポジウム 9
松井 かおり	会員企画シンポジウム12	山中 綾華	P20A-14
松浦智恵美	会員企画シンポジウム 1	山中 一英	P20A-22
松浦 由典	P19A-16	山本 一成	会員企画シンポジウム 9
松浦李恵	質的心理学フォーラム編集委員会企画 シンポジウム	山本 登志哉	会員企画シンポジウム11 P19B-8

山本 尚樹	P20A-1
矢守 克也	P20A-3
余語 琢磨	会員企画シンポジウム14
横堀正枝	P20A-7
横山 草介	会員企画シンポジウム 9
	会員企画シンポジウム17 P19B-8
横山 直子	会員企画シンポジウム 8
吉田 さとみ	会員企画シンポジウム 8

ら行

梁 梓超	P19B-4
劉毓禧	P19A-5
李 勇昕	会員企画シンポジウム12
	P19B-3 P19B-5

わ行

渡辺忠温	会員企画シンポジウム11
渡邊 優那	P20B-14



新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-9
TEL 03-3264-4973 (代表) / FAX 03-3239-2958
https://www.shin-yo-sha.co.jp
sales@shin-yo-sha.co.jp



最新の情報は新曜社
web サイトへ

新曜社 web マガジン

クラルス **clarus** https://clarus.shin-yo-sha.co.jp/



書評 『アンラーニング質的研究』(評: 横山草介氏)

連載 『自己の科学は可能か』 出版記念シンポジウムの現場から
(本書執筆陣)

ワードマップ 学習マッピング

10月下旬刊行
予約受付中

— 動物の行動から人間の社会文化まで

青山征彦・古野公紀・サトウタツヤ 編

四六判 248 頁・定価 3,190 円 (税込)

学習は心理学を中心に膨大な研究があり、内容も多岐にわたる。本書は、動物の行動から人間の社会文化におよぶ学習研究をマッピングという手法で整理し、学習研究の歴史や機械学習、実践の広がりも加えて第一線の研究者が解説した、これまでにない刺激的な知の見取り図。

学習の魅力と
本質に迫る！

アンラーニング質的研究

— 表象の危機と生成変化 (電子書籍あり)

楠見友輔 著

四六判 312 頁・定価 3,960 円 (税込)

質的研究は幅広い分野に拡大し、豊かな実践を生み出している。その一方で、方法は知らず知らずのうちに形骸化し、必要とされる変化を閉ざしてしまう可能性がある。質的研究を「アンラーニング (学びほぐし)」し、問いを創出しつづけるための本。



ワードマップ 記号創発システム論

— 来るべきAI共生社会の「意味」理解にむけて

谷口忠大 編

四六判 292 頁・定価 3,080 円 (税込)

記号 (言語) の意味はどのように成立しているのか? この根本問題に最先端のAI・ロボティクス研究者と、第一線の人文社会系研究者らが集い探究する新学融領域、記号創発システム論。来るべき生成AIとの共生社会を見通すための、初のキーワード集。



ヘルスヒューマニティーズ

— 相互回復の実践・教育・研究

木下康仁・井上麻未・糟谷知香江 編著

A5 判 312 頁・定価 3,850 円 (税込)

病いや障害をもつ人とケアする人双方のウェルビーイングの向上を目的として、医学・看護・介護・教育とアート・人文学を融合する新しい学際領域、ヘルスヒューマニティーズ。その考え方と教育プログラム、幅広い領域の実践を紹介するわが国初の本。



質的心理学研究 第23号

既刊

特集 産・学・官連携による／についての質的研究

日本質的心理学会『質的心理学研究』編集委員会 編

B5 判 284 頁・定価 3,520 円 (税込)

自己の科学は可能か

— 心身脳問題として考える (電子書籍あり)

田中彰吾 編著／今泉修・金山範明・弘光健太郎・浅井智久 著

A5 判 224 頁・定価 3,520 円 (税込)

SAGE質的研究キット 全8巻完結!

すべてA5判並製 (定価は税込)

- 1 質的研究のデザイン
- 2 質的研究のための「インター・ビュー」
- 3 質的研究のためのエスノグラフィーと観察
- 4 質的研究のためのフォーカスグループ
- 5 質的研究におけるビジュアルデータの使用
- 6 質的データの分析
- 7 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析
- 8 質的研究の「質」管理

- | | |
|--|----------------|
| U. フリック 著／鈴木聡志 訳 | 196頁・定価 2,310円 |
| S. クヴァール 著／能智正博・徳田治子 訳 | 272頁・定価 2,970円 |
| M. アングロシーノ 著／柴山真琴 訳 | 168頁・定価 1,980円 |
| R. バーバー 著／大橋靖史 監訳、藤野秀美・片山富美代・菊池和美・小林久子 訳 | 256頁・定価 3,190円 |
| M. バンクス 著／石黒広昭 監訳 | 224頁・定価 2,640円 |
| G. R. キブズ 著／砂上史子・一柳智紀・一柳 梢 訳 | 280頁・定価 3,190円 |
| T. ラブリー 著／大橋靖史・中坪太一郎・綾城初穂 訳 | 224頁・定価 2,640円 |
| U. フリック 著／上淵 寿 訳 | 224頁・定価 2,640円 |

珠玉の集大成

やまだようこ著作集

全11巻 (予定)

やまだようこ 著

すべてA5判上製 (定価は税込)

- | | | |
|--------|------------------------------|----------------|
| 第1巻 | ことばの前のことば——うたうコミュニケーション | 496頁・定価 5,280円 |
| 第2巻 | ことばのはじまり——意味と表象 | 356頁・定価 3,960円 |
| 第3巻 | ものがたりの発生——私のめばえ | 320頁・定価 3,520円 |
| 第4巻 | 質的モデル生成法——質的研究の理論と方法 | 384頁・定価 4,290円 |
| 第5巻 | ナラティヴ研究——語りの共同生成 | 504頁・定価 5,390円 |
| 第6巻 | 私をつつむ母なるもの——多文化の「人と人の関係」イメージ | 608頁・定価 6,380円 |
| 第7巻 | 人生心理学——生涯発達モデル | 480頁・定価 5,280円 |
| 第8巻 | 喪失の語り——生成のライフストーリー | 336頁・定価 4,730円 |
| 第9巻 | ビジュアル・ナラティヴ——人生のイメージ地図 | 432頁・定価 6,050円 |
| 第10巻 | 世代をむすぶ——生成と継承 | 344頁・定価 3,520円 |
| * 第11巻 | 詩的心理学——かさねのコミュニケーション | (準備中) |

新刊

関係の世界へ

◎危機に瀕する私たちが生きのびる方法
ケネス・J・ガーゲン 著／

東村知子・鮫島輝美・久保田賢一 訳

一番やさしい社会構成主義入門。2420円

何のためのテスト？

◎評価で変わる学校と学び

K・ガーゲン＋S・ギル 著／

東村知子・鮫島輝美 訳

教育システム変革に向けて。

2750円

遺伝について家族と話す

◎遺伝性乳がん卵巣がん症候群のリスク告知
李怡然 著

インタビュー調査から遺伝にまつわる家族内
コミュニケーションの多様性に迫る。3850円

最強の社会調査入門

◎これから質的調査をはじめるとの人のために
前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆編

「聞いてみる」「やってみる」「行ってみる」
「読んでみる」から始まる極意。2530円

岡本祐子著作集①

中年からの アイデンティティ心理学

◎成人期の危機と発達
岡本祐子 著

3960円

動かして学ぶ！はじめての テキストマイニング

◎フリー・ソフトウェアを用いた自由記
述の計量テキスト分析

樋口耕一・中村康則・周景龍 著

2420円

関係からはじまる

◎社会構成主義がひらく人間観

K・ガーゲン 著／東村知子・鮫島輝美 訳

独自の関係論から世界を記述する、対立
を乗り越える未来への招待状！5500円

基礎から分かる会話 コミュニケーションの 分析法

理論的かつ体系的な入門書。

2640円

フェミニスト現象学

◎経験が響きあう場所へ

稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編
当事者の経験を記述・考察するフェミニス
ト現象学の可能性に迫る。3520円

早わかり混合研究法

クレスウェル 著／抱井尚子 訳

混合研究法を始めようとする読者の入り
口として、重要なポイントがばつと読んでも
かめる最適な入門書。2640円

テーマリサーチナリシ法

◎インタビューデータ分析のためのコー
ディングの基礎 土屋雅子 著

分析の透明性や厳密性を確保するTAA法
を実例を挙げ順を追って解説。2420円

社会調査のための 計量テキスト分析

◎内容分析の継承と発展を目指して

【第2版】 樋口耕一 著

KH Coder の利用方法、事例。3080円

あなたへの社会構成主義

K・ガーゲン 著／東村知子 訳

「常識」を覆す社会構成主義への格好の入
門書。平易な文章で、ガーゲンとの対話の
世界へ誘うロングセラー。3850円

チーム・ダイナミックス の行動科学

◎組織の生産性・安全性・創造性を高める
鍵はどこにあるのか

山口裕幸 編著

3630円

医療とケアの現象学

◎当事者の経験に迫る質的研究アプローチ
榊原哲也・西村ユミ 編

医療やケアにかかわるさまざまな当事者
の経験を「現象学」によって描く。3300円

内容分析の方法

【第2版】 有馬明恵 著

メッセージ内容の客観的・体系的かつ科学
的分析の技術を、コーディングシートとテ
キストマイニングに分けて解説。1760円

質的研究のための 理論入門

◎ポスト実証主義の諸系譜
ブシユカラ・ブラサド 著／箕浦康子 監訳

考え方、基本的概念、研究事例。4180円

会話データ分析の実際

◎身近な会話を分析してみる

中井陽子・大場美和子・寅丸真澄 著

会話ビデオ、文字化資料を見ながら会話
データを具体的に分析する。2750円

社会を説明する「新装版」

◎批判的実在論による社会科学論

B・ダナー・マークほか 著／佐藤春吉 監訳
基礎理論から解説する北欧発のすぐれ
た入門書、待望の復刊！3960円

精神障がいのある人を 排除する社会でよいのか

◎国際比較調査からみる人間の価値
樋口麻里 著

共生可能な新しい社会の提言。6600円

グラウンデッド・セオリー の構築【第2版】

K・シャーマズ 著／岡部大祐 監訳

多くの事例と内容を盛り込み詳説した
増補版。6050円

フィールドワークの学び方

◎国際学生との協働からオンライン調査まで
村田晶子・箕曲在弘・佐藤慎司 編著

新しい時代の変化に対応したフィールドワ
ークを学ぶための実践的参考書。2420円

新版 暮らしの中の 社会心理学

安藤香織・杉浦淳吉 編著

日々の暮らしの中で浮かぶさまざまな疑
問は社会心理学で説明できる！2530円

リーダーシップは みんなのもの

◎フェミニズムから考える女性とリーダーシップ
J・E・オーウェン 著／和栗白恵ほか 訳

女性とリーダーシップを問い直す。3520円
〈予価〉

北大路書房

〒603-8303
京都市北区紫野十二坊町12-8
☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393
<https://www.kitaohji.com> (価格税込)

〈生活一文脈〉理解のすすめ

—他者と生きる日常生活に向けて— 宮内 洋, 松宮朝, 新藤 慶, 打越正行著 四六・208頁・定価2970円
生身の身体を伴った、生活する人間を、同じく、生活する人間が理解するとはどういうことか？ 乳幼児期の食（共食の体験）、青年期の労働（沖縄のヤンキー）、成人期の政治行動（市町村合併）、老年期の社会関係（孤独・孤立）をとおして考える。

ナラティブと情動

—身体に根差した会話をもとめて— 小森康永, D. デンボロウ, 岸本寛史, 安達映子, 森岡正芳著 四六・304頁・定価3520円
ナラティブ・セラピーは神経科学や「感情」「身体」とどう関わっているのか？ 人文・社会科学における「情動論的転回」がナラティブ実践に何をもたらすのかを探究。

体験と経験のフィールドワーク

宮内 洋著 A5・160頁・定価2420円
フィールドワークの人間関係や調査者としての苦悩、フィールドワーク上のトラブルといった従来語られなかったセンシティブな問題を抽出し、真正面から向き合った待望の入門書。心理学、社会学、教育学、民俗学、社会福祉学等の質的調査、フィールドワークに向かう人へ。

ニューロマイノリティ

—発達障害の子どもたちを内側から理解する— 横道誠, 青山 誠編著 四六・312頁・定価2420円
当事者・支援者・研究者が一体となって「発達障害理解」に革命を起こす！ ニューロマイノリティとして生きている子どもたち、「発達障害児」の体験世界を「内側から理解する」という視点から多様な著者が多角的に描き出す。

質的研究ハンドブック(全3巻)

N. K. デンジン他著/平山満義監訳 定価5060円〜6160円

人間科学のための混合研究法

J. W. クレスウェル, V. L. プラノ/クラーク著/大谷順子訳 定価3630円

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 定価3080円

質的研究用語事典

T. A. シュワント著/伊藤 勇他監訳 定価3520円

なるほど！ 心理学観察法

三浦麻子監修/佐藤 寛編著 定価2420円

〈当事者〉をめぐる社会学

宮内 洋, 好井裕明編著 定価3080円

質的データの取り扱い

L. リチャーズ著/大谷順子, 大杉卓三訳 定価3520円

心理学マニュアル 観察法

中澤 潤, 大野木裕明, 南 博文編著 定価1430円

ナラティブ・アプローチの理論から実践まで

G. モンク他編/国重浩一, バーナード訳 定価2860円



A5 判
3500 円

心理尺度構成の方法

——基礎から実践まで

小塩真司 編

心理学、教育・臨床現場、マーケティングなどで活用される心理尺度の構成に関する基礎から実践まで、検討すべきポイントを丁寧に解説。



A5 判
3300 円

TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述

——保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究

安田裕子・サトウタツヤ 編著 TEMから昇華したTEAによる対人援助に関する実践的研究について、その内容紹介から研究の真舞台までをつまびらかにした書。



A5 判
3400 円

TEMでひろがる社会実装

——ライフの充実を支援する

安田裕子・サトウタツヤ 編著

外国語学習・教育、看護、保健、介護などに焦点をあてた論文に加え、キャリアデザイン、学生相談など実践の応用事例を収録。

文化心理学への招待

——記号論的アプローチ

ヤーン・ヴァルシナー著 サトウ タツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽 監訳 「記号」を媒介とした、人間の未来志向的かつ動態的な発達を描くことを目指す「記号論的動態性の文化心理学」について解説する。 ■A5 判 3900 円



A5 判
3400 円

TEMでわかる人生の径路

——質的研究の新展開

安田裕子・サトウタツヤ 編著 質的研究に時間の概念を導入し、視覚的に理解を促す試みの集大成。誰もが自身の人生の径路をTEMに描くことができ初学者でも簡単に質的研究用のデータを拾っていくことが可能になる。



A5 判
3000 円

TEMではじめる質的研究

——時間とプロセスを扱う研究をめざして

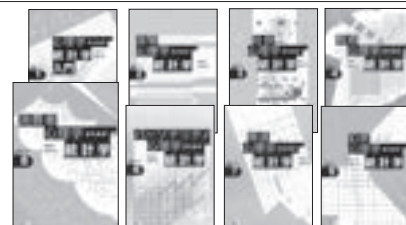
安田裕子・サトウタツヤ 編著 複線径路・等至性モデルを使用して、従来なかった時間の観念を心理学にもたらす。人間の多様性や複雑性を扱うための新しい方法論。臨床心理学分野でも導入が進む画期的手法。

心理学のための統計学 [全9巻]

荘島宏二郎編集・各巻共著
心理学の分野別に優先度の高い統計手法を取り上げて解説。各巻の各章は、90分の講義で説明できる内容にて構成。心理学を学ぶ人に必須の統計テキストシリーズ。

- ❶ 心理学のための統計学入門 (川端一光)
- ❷ パーソナリティ心理学のための統計学 (尾崎幸謙)
- ❸ 実験心理学のための統計学 (橋本貴充)
- ❹ 発達心理学のための統計学 (宇佐美慧)
- ❺ 社会心理学のための統計学 (清水裕士)
- ❻ シリーズ新刊☆
- ❼ 教育心理学のための統計学 (熊谷龍一)
- ❽ 消費者心理学のための統計学 (齋藤明宏)
- ❾ 臨床心理学のための統計学 (佐藤寛)
- ❿ 犯罪心理学のための統計学 (松田いづみ)

既刊 ❶ 2100 円 / ❷・❸・❹・❺ 各 2600 円 / ❻・❼ 2800 円



新しい言語心理学 最新刊！

茂呂雄二・伊藤崇・新原将義 編 定価 2,640 円

ことばの実践には、社会や文化を作り出す力がある。実践としてのことばという見方に立ち、言語心理学の新たな方向性を示す。心とことばの関係、社会とことばの関係、ことばの発達プロセス、ことばの障害に関する従来の知識をおさえつつ、この新しい見方をみんなで考えていくための教科書。公認心理師試験「言語心理学」領域にも対応。執筆者：青山征彦、伊藤崇、太田礼穂、城間祥子、新原将義、広瀬拓海、仲嶺真、茂呂雄二



物語の言語学 語りに潜むことばの不思議 好評2刷！

甲田直美 著 定価 2,640 円

「物語」、「語り」という観点から、言語学と隣接領域をわかりやすく解説した画期的な書。物語、神話、マンガ、うわさ、都市伝説、ナラティブ・ケアなどの豊富な事例から具体的に、音声、文字、翻訳、文法、談話分析、さらには物語論、文体論、会話分析を幅広く、楽しく学ぶ。構造主義、シナリオ術、サブカルチャー、ケアと自己物語などを通して、文化、芸術、メディア、フィールドワークなど、人類と文化を考える裾野を広げる。



【2024 秋刊行！】集団で言葉を学ぶ／集団の言葉を学ぶ

石田喜美 編

幼稚園や通信制高校、学校図書館など、様々なフィールドの報告と、社会・文化的アプローチにおける近年の議論から、「個別最適な学び」と「協働的な学び」とを二項対立的に捉える見方に疑問を呈する。言葉やりテラシーの学びについて、対話を始めるための礎がここに！
執筆者：青山征彦、新居池津子、石田喜美、伊藤崇、岡部大介、高岡佑希、宮澤優弥、吉沢夏音、吉永安里

〈価格税込〉



〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F
TEL 03-5319-4916 FAX 03-5319-4917
toiawase@hituzi.co.jp <https://www.hituzi.co.jp/>



ひつじ書房

ひつじ書房の新刊紹介ページはこちらからアクセス
<https://www.hituzi.co.jp/books/sinkan.html>

日本質的心理学会第21回大会 準備・実行委員会

委員名簿

準備・実行委員長	青山 征彦	(成城大学社会イノベーション学部)
準備・実行副委員長	岸 磨貴子	(明治大学国際日本学部)
事務局長	郡司 菜津美	(国士舘大学文学部)
委員	河原 智江	(共立女子大学看護学部)
	小池 星多	(東京都市大学メディア情報学部)
	新原 将義	(武蔵大学教職課程)
	鈴木 聡志	(東京農業大学教職・学術情報課程)
	土倉 英志	(法政大学社会学部)
	都築 幸恵	(成城大学社会イノベーション学部)

【実行委員会事務局】

俣賀 勇人 (成城大学大学院社会イノベーション研究科博士課程前期1年)

小林 海愛 (成城大学大学院社会イノベーション研究科博士課程前期1年)

佐藤 達実 (成城大学大学院社会イノベーション研究科博士課程後期2年)

【大会デザイン制作・協力】

小池ゼミ(東京都市大学メディア情報学部)のみなさん

【クッキー販売・コーヒーサービス】

社会福祉法人はる 社会就労センターパイ焼き窯

株式会社スワン成城店

【展示・広告】

株式会社新曜社

株式会社誠信書房

株式会社ナカニシヤ出版

福村出版株式会社

株式会社ひつじ書房

【広告】

株式会社北大路書房

SEIJO 2024



Japanese Association of Qualitative Psychology

日本質的心理学会 第 21 回大会抄録集

正誤表

抄録集の記載に誤りがありましたので、以下のとおり訂正いたします。

(誤) p.24 P19B-2 および p.98 P20B-13 (いずれも発表者名)

照井 稔宏

(正)

本間 (照井) 稔宏

(誤)

(た行) 照井 稔宏 P19B-2

(正)

(は行) 本間 (照井) 稔宏 P19A-4 P19B-2

(誤) p.34 P20B-13 (発表タイトル) および p.134 P20B-13 (発表タイトルと
アブストラクト)

「ファン活動としてのスマホいじり：上映会における相互行為分析」
(アブストラクトは省略)

(正)

「BTS ファンダムにおける「うしろめたさ」の相互的構成」

本稿では、韓国アイドルグループ BTS のファンダム ARMY を対象とし、相対するコミュニティに存在する者のファン活動を考察した。ARMY は、「社会に関心が高い」ファンダムとされており、実際に抗議活動や差別反対運動を行なっている。しかし、社会活動を行なうのはごく一部であり、ARMY の多くはファン

活動とともに社会活動を行なっている訳ではない。これまでのファン研究では、社会活動を行なうファンに焦点が当てられてきた。本研究では、ARMY のなかでも、ファン活動と社会活動を繋げていない人々に着目した。SNS での継続的な半構造化インタビューの結果、対象とした ARMY は、「ARMY は社会活動に熱心なものだ」という規範を抱えながらも、そのコミュニティには能動的に属さないことを表出していた。本発表では、「うしろめたさを覚えつつも非参加という参加をなす存在」として、社会活動への非参加を表出する ARMY を記述する。

(誤)

(さ行) 千田真緒 P20B-13

(正)

(た行) 千田真緒 P20B-13

(誤) p.39 常任理事会企画シンポジウムの話題提供

話題提供：土元哲平（中京大学心理学部）

話題提供：杉浦彰子（J A 共済総合研究所）

(正)

話題提供：土元哲平（中京大学心理学部）

話題提供：杉浦彰子（J A 共済総合研究所）

話題提供：ジョン・ジウォン（ラエル漢方病院附属心理相談室）

話題提供：イ・ユニ（東京大学教育学研究科）

以上